

UFOと宇宙

1974

隔月刊 6月号 No.6

コスモ

太平記の“電光”は宇宙船の大激戦?
日本古来の天空人出現説考 (完)

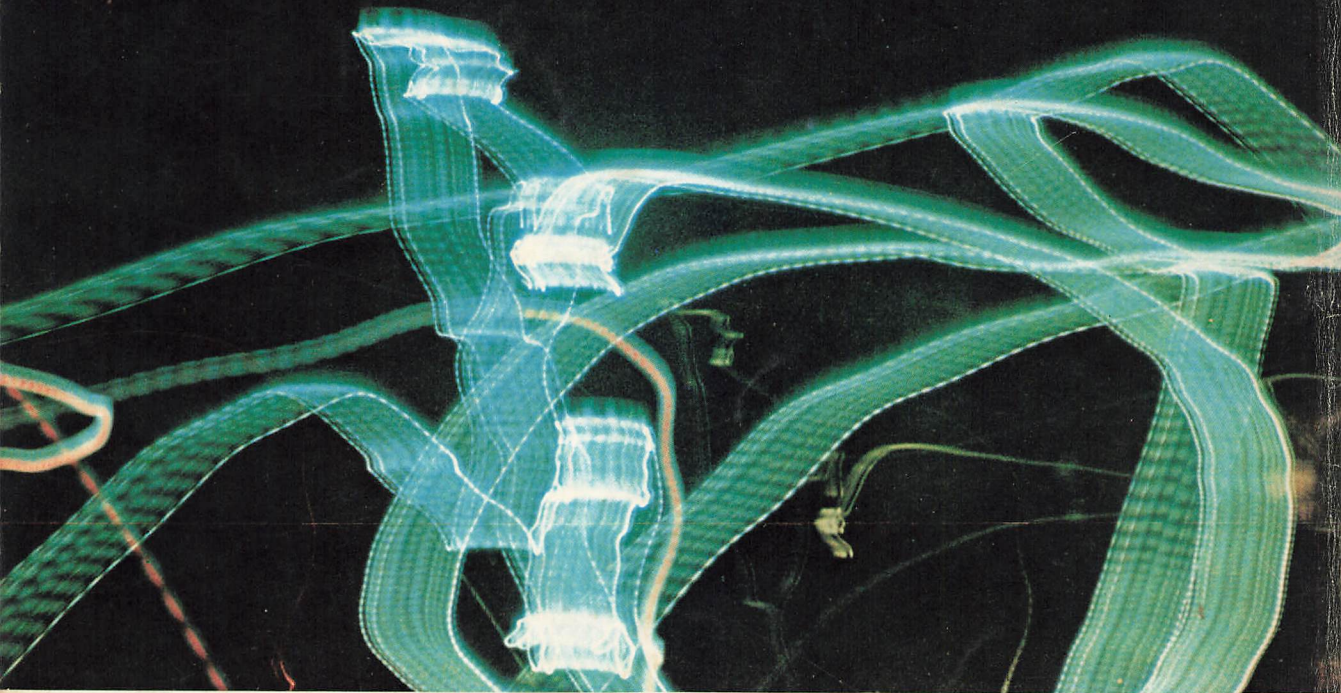
南欧に発生した100件の実例

イベリア半島のUFO着陸事件

〈天空と大地〉科学シリーズ(4)

●地球自転速度が急変!

宇宙・引力・空飛ぶ円盤



円盤人についての

最新刊!

マジメな話

平野威馬雄 著

B6・¥890 円 145

円盤と宇宙人についてのすべての疑問に答える書

宇宙人について

のマジメな話

平野威馬雄 著

B6・¥870 円 145

最新のUFOコンタクト情報を満載した待望の書

好調 UFO シリーズ

円盤について

のマジメな話

平野威馬雄 著

B6・¥780 円 145

空飛ぶ円盤は実在するか、写真と実例をもとに解説



平安書店

電話 03(664)0371
振替 東京 92080
東京都中央区日本橋茅場町2-11

世紀の謎 空飛ぶ円盤を究明した最新刊!

ヒューマノイド 空飛ぶ円盤搭乗者

平野威馬雄 編

定価 九八〇円

円盤着陸とその搭乗者に関する顕著な200の事件をとりあげ科学的に究明したJ・パレートの分析と65件の宇宙人の来訪例を分析したG・クレイトンの報告及び注目を引く宇宙人の活動ぶりをまとめる。従来の地球人的観察が、いかに狭い視野と独断に終始していたかを理解せしめる。

空飛ぶ円盤とアダムスキ
久保田八郎 編

空飛ぶ円盤の跳梁
高梨純一 著

空飛ぶ円盤のすべて
平野威馬雄 編

空飛ぶ円盤実在の証拠
高梨純一 著

アポロと空飛ぶ円盤
平野威馬雄・荒井欣一 著

空飛ぶ円盤の真相
G・アダムスキ・久保田八郎 著

空飛ぶ円盤は実在する
A・ミッセル・田辺貞之助 訳

これが空飛ぶ円盤だ
平野威馬雄 編

空飛ぶ円盤実見記
G・アダムスキ・D・レスリー 著

それでも円盤は飛ぶ
平野威馬雄 編

空飛ぶ円盤同乗記
G・アダムスキ・久保田八郎 著

火星からの空飛ぶ円盤
C・アラン・ガン・岩下 著

空飛ぶ円盤の秘密
T・ベサラム・久保田八郎 著

空飛ぶ円盤と宇宙人
黒沼 健 著

空飛ぶ円盤騒ぎの発端

高梨純一 著

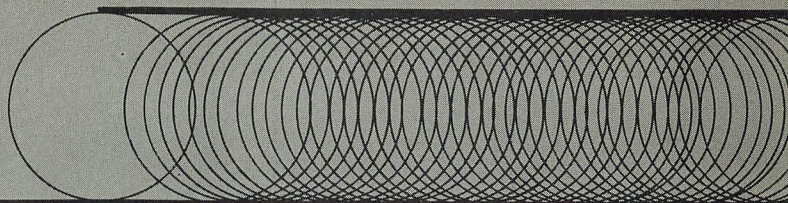
定価 九五〇円

アーノルドの事件以来、全世界にわたって頻発している魅力ある謎、円盤の本体に迫るため、その基礎知識として、円盤研究の発端前後の事情とその後の展開を関係資料を徹底的に調査・総合し、興味深い事件の紹介を中心にまとめた円盤研究史として注目される新書。

●東京 文京 本郷5-30 振東141750●

高文社

●京都 左京 百万遍 振京23523●



〈ロ絵写真〉

広島県呉市のUFO／長野市郊外のUFO／東京、渋谷区上空の円盤
横浜市のライティング・ライツ(以上カラー)
横須賀市のライティング・ライツ／北海道網走のUFO
大阪府枚方市上空のUFO(以上白黒)

イラスト 市川淑一

太平記の“電光”は宇宙船の大激戦？

科学評論家 齊藤守弘

日本古来の天空人出現説考(完) 6

ピセンテ・ホァン・バレステル・オルモス

スペインに発生した100件の実例

イベリア半島のUFO着陸事件 20

世にも異常なコンタクト事件

円盤の中に連れこまれた男(完) 南山 宏 35

エドガー・ケイシーの予言による世界の大変動 常岡理太郎 43

●〈天空と大地〉科学シリーズ——4

地球自転速度が急変! 46

東京大学東京天文台
理学博士 飯島重孝

世界的異常気象が原因か

沖縄の「天空人の墓」? 58

私はライティング・ライツを撮影した 横町 昭 59

科学トピックス 60

連載科学記事——

英国の円盤研究家による謎の推進機関の解明

宇宙・引力・空飛ぶ円盤(1) 63

レナード・クランプ

国内UFO目撃報告 77

—読者の声—
OPINIONS

81

表紙写真

秋田市の越前谷潔氏の知人(匿名希望)が撮ったカラー写真に写っていた不思議な美しい曲線模様(ライティング・ライツ?)。本人はマスコミ関係者で、信頼のおける人だという。

(近代宇宙旅行協会提供)



●広島県呉市のU F O

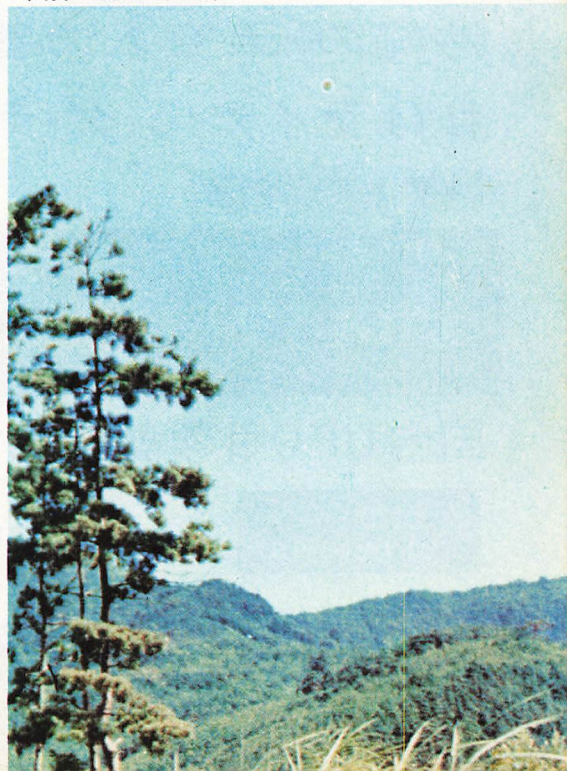
●1973年夏のある日、夜7時～8時に夜空を撮影した写真に偶然はいった光体。背後に薄い尾を引いている。呉市のF.S.君（15歳）撮影。（ニコマートFTN・ニッコール50mmF1.2・絞り開放・シャッタースピードは不明）

●長野市郊外のU F O

●1972年の夏テレバシー練習のため郊外の山へ登った長野市の藤沢清則氏が撮影。（オリンパスペンEE・F32mm・フジカラーR100・オート）

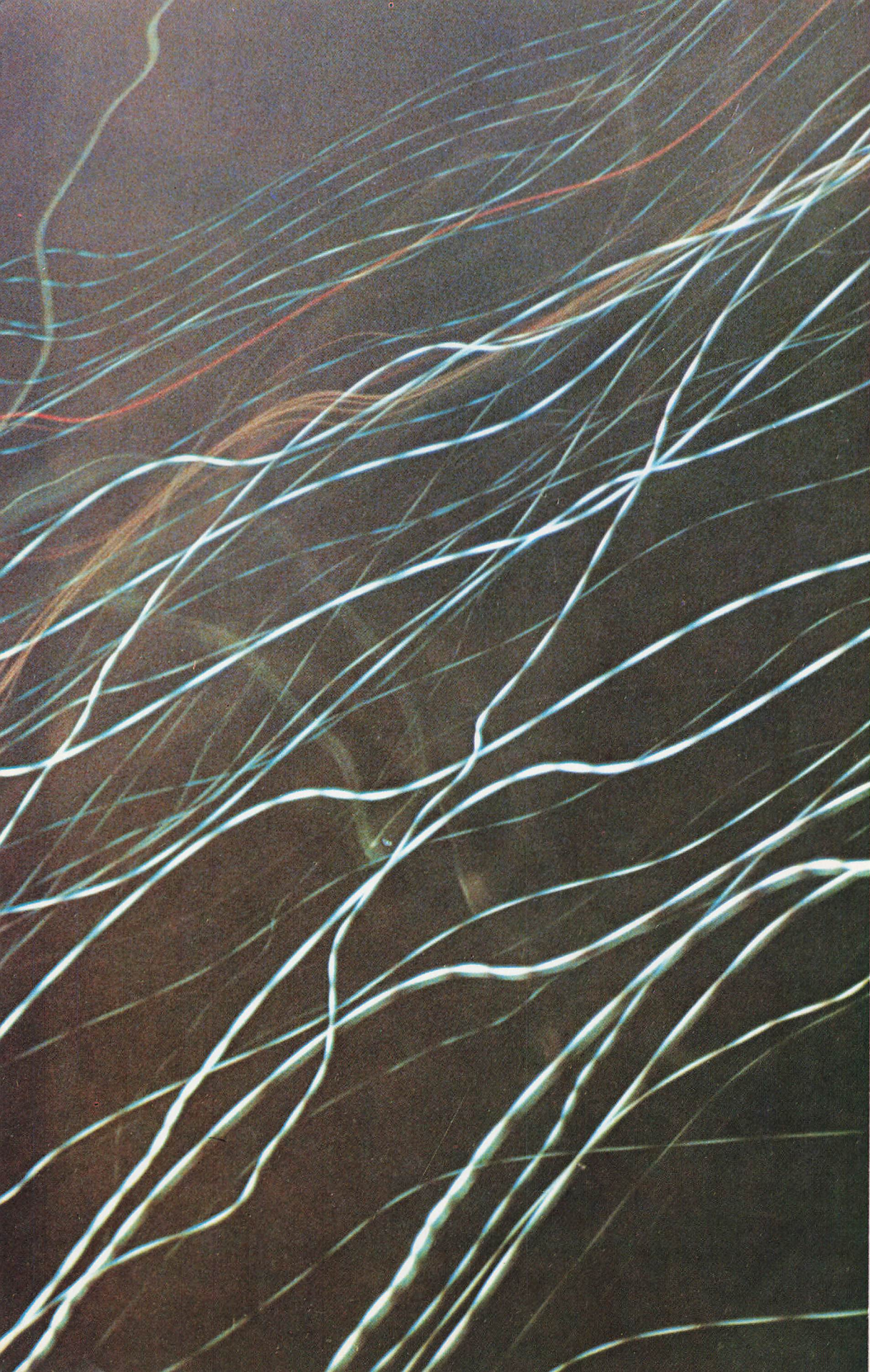
●東京、渋谷区上空の円盤

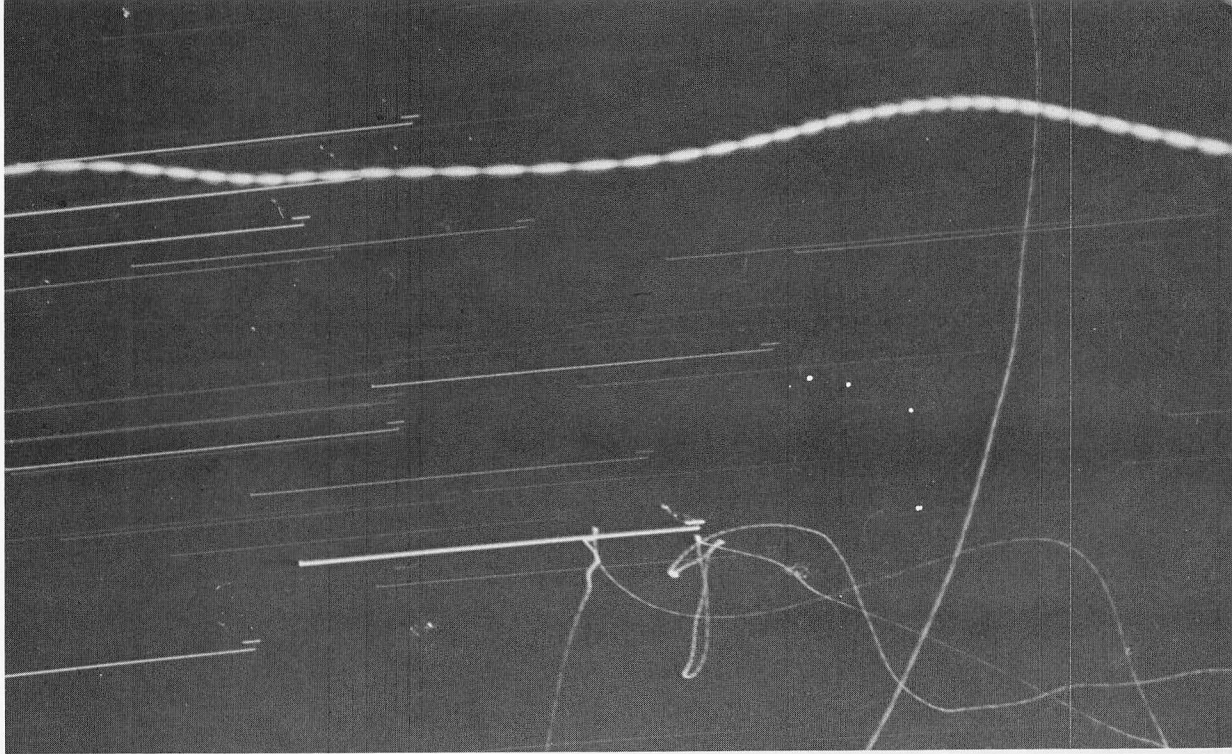
●1973年9月16日午後3時頃、自宅から雲を撮影中に円盤を目撃した同区の学生・松岡正憲氏（21歳）がキャッチ。オリンパスペンEE-2・Dズイコー28mmF3.5・2秒）



●横浜市のライティング・ライツ

●1974年1月6日、コホーテクすい星を観測撮影中の横町昭氏（43歳・会社員）のネガに写った点滅光跡。（詳細は50頁）



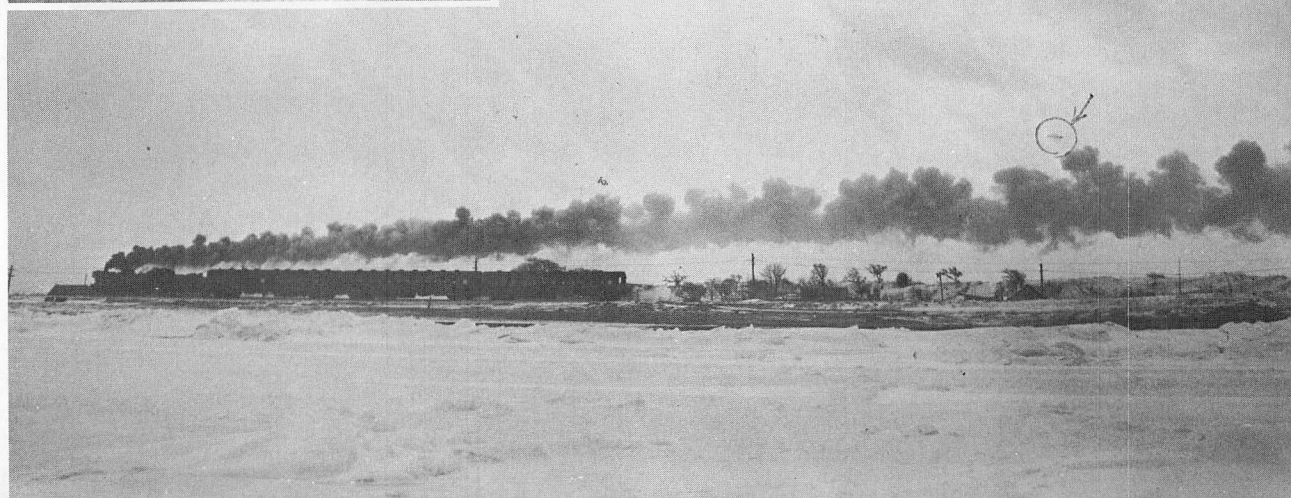
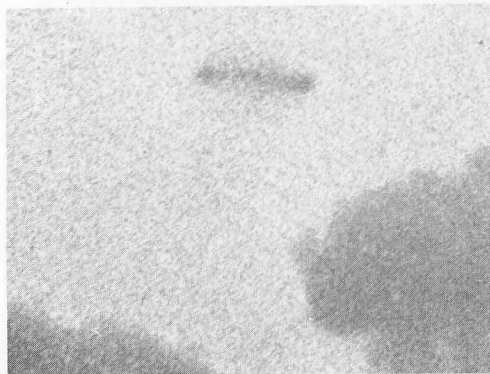


●横須賀市のライティング・ライツ

●1973年1月3日午後10時2分頃、横須賀市の浅賀光明君（15歳・中3）が撮影した点滅光跡。撮影時には気づかなかった。（ヤシカエレクトロ35GS・カラーヤシノンDX45mmF1.7・絞りF2.8・30分露出・ネオパンSSS）

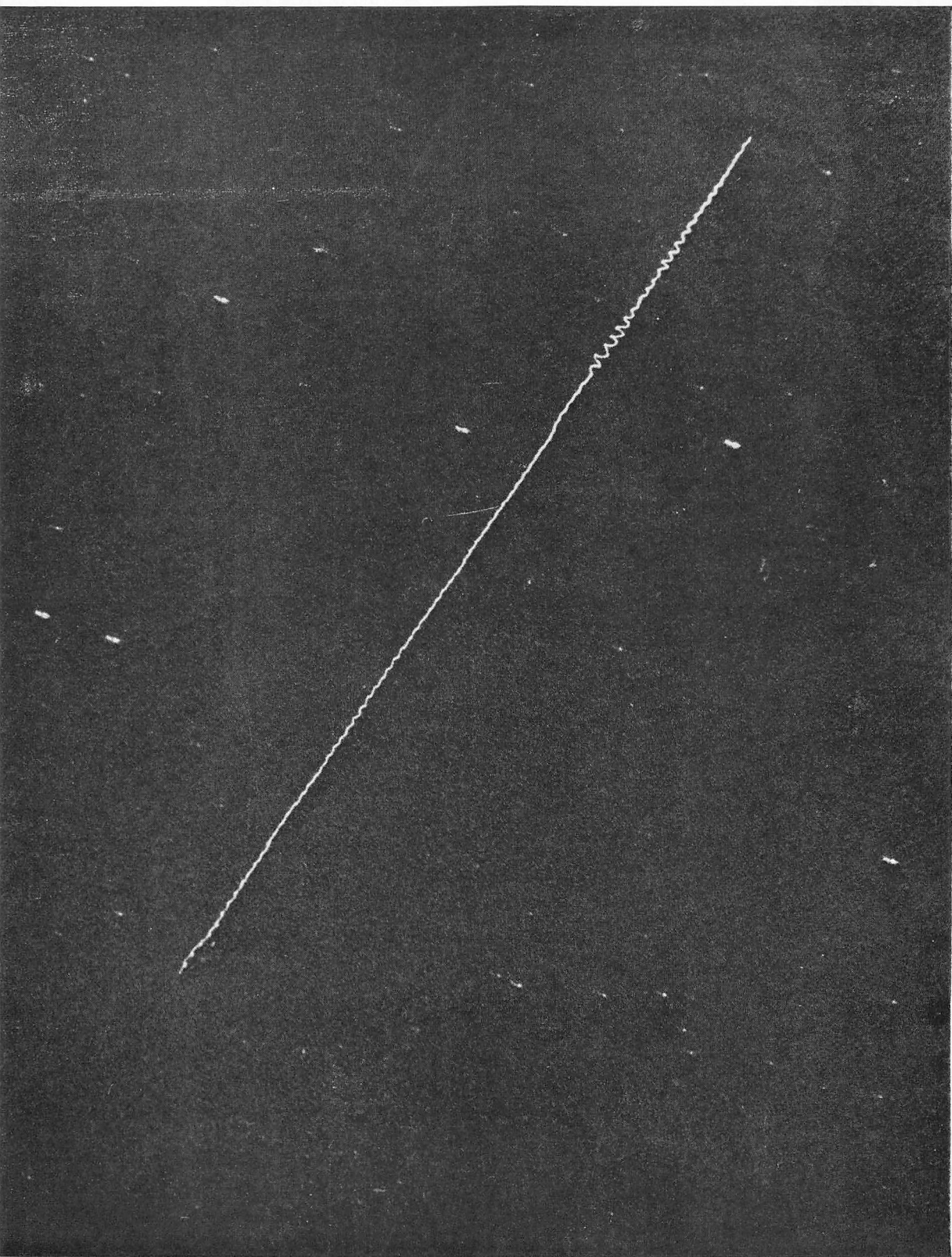
●北海道網走のUFO

●1974年2月11日午後4時45分頃、群馬県尾島町の岩崎充男氏（24歳・公務員）が網走で列車を撮影したところ、煙の真上に奇妙な細長い物体が写っていた。（左上は部分拡大）（マミヤRB67・セコール65mm・トライX）



●大阪府枚方市上空のUFO

●1974年1月11日午後5時53分頃、枚方市の大阪市立高等学校天文班（池田先生を含む10数名）が同校屋上よりコンホーテクすい星を観測中、ぎょしゃ座のカペラ付近を飛ぶオレンジ色のUFOを一同が目撃。その時2年生の瀬戸村勝利君が撮影。（フサヒペンタックスSP・SMCタカマラー200mmF4・開放・20秒・トライX・バンドール）



日本古来の天空人出現説考

太平記の「電光」は宇宙船の大激戦？

(完)

科学評論家
斉藤守弘



4 日本の古記録に見られるUFOの行動(続き)

●一〇九六年七月 乾に星見はる。珠を貫く如し。

『星代歴』三 永長元年七月 乾方有星数十如貫珠 長四五尺

『星年代略記』七 乾方星数十 如貫珠

『星年代私記』七月 乾方見星数千 如貫珠

三つの古記録は一致して報告している。

『西北の方角に星数十(星年代私記の「星数千」は「数十」の誤りか)あり、珠を貫くごとし。長さ四五尺』

すなわち「数十の珠をつらぬくごとし」というところからして、アメリカ、ニューメキシコなどで目撃された「空飛ぶビーズ玉」系統の現象ではないかと思う。ちょうど首飾り状に弧をえがいて連なるのだが、一九五二年七月十八日、岡山市上空を飛んだのも、同系統のものである。音もなく四つの光体が一列になってゆっくり飛んだのである。

●一〇九六年八月 怪星見ゆ

『後二条師通記』八月十三日庚午 朝間雨降

已刻許晴 (中略) 八朔間 怪星見虚衆人之所申也 秘奏末奏 申刻参内 喚師遠問件事

人之所申不見候 以随巷説 奏不献云々 召

親崇問怪星 申候由 所由常星也 仮不献奏也

件星流星也 本名候由所申也

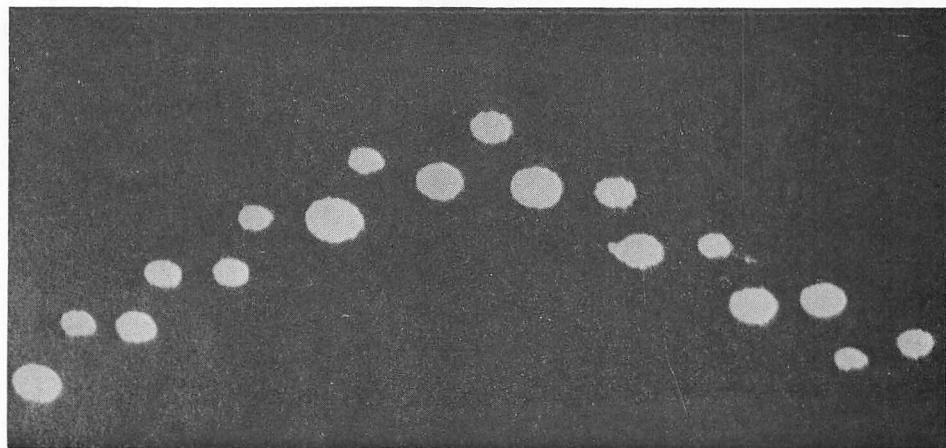
「朝がた雨降り、已刻ばかりに晴れた。八朔(陰曆八月一日)の節句のときに、怪星があらわれ、虚ろに見えたと人々うわさしあえり。(この変異を) 秘かに言上すべきかしからざるべきか、申刻に参内し、師遠(陰陽師か)をよび、くだんの事について問うに、『人々の申立てること、(私は) 目撃しなかった。たんなる噂にすぎない。言上する必要はない』と。そこでもう一人、親崇(これも陰陽師か)を召しだし怪星のことを聞くに、『それはなみの星、ありふれた天文現象であるから言上するには及ばない。くだんの星は流星にすぎない』とのことであった」

この記録で面白いのは、当時の学者が二人ともこの現象を否定していることで、今日の正統科学者の空飛ぶ円盤に対する態度とまったく変わらない。「怪星うつろに見ゆ」と記しているのは、かなり低空に降りた円盤の内部がわずかながら見えたことをいっているのだろうか。一九五九年六月、オーストラリア領パプア島上空に現われ、空中に静止したという窓のある円盤のような光体を、当時の平安末期の人たちが見たら、たしかにそう見えたことだろう。

だが、学問的に見れば「虚ろの星」などあるはずがない。目撃した人々の驚きの噂を、当時の学者が否定したのも無理はなかったようである。

●一一〇五年二月十五日亥刻天に光耀あり
『中右記』 正月二十九日 今夜亥刻許天有光

●ラボックの光体群。1951年8月30日に米テキサス州ラボックでカール・ハート少年が撮影。「珠を貫く如く」見える。



耀 人々見之 大驚

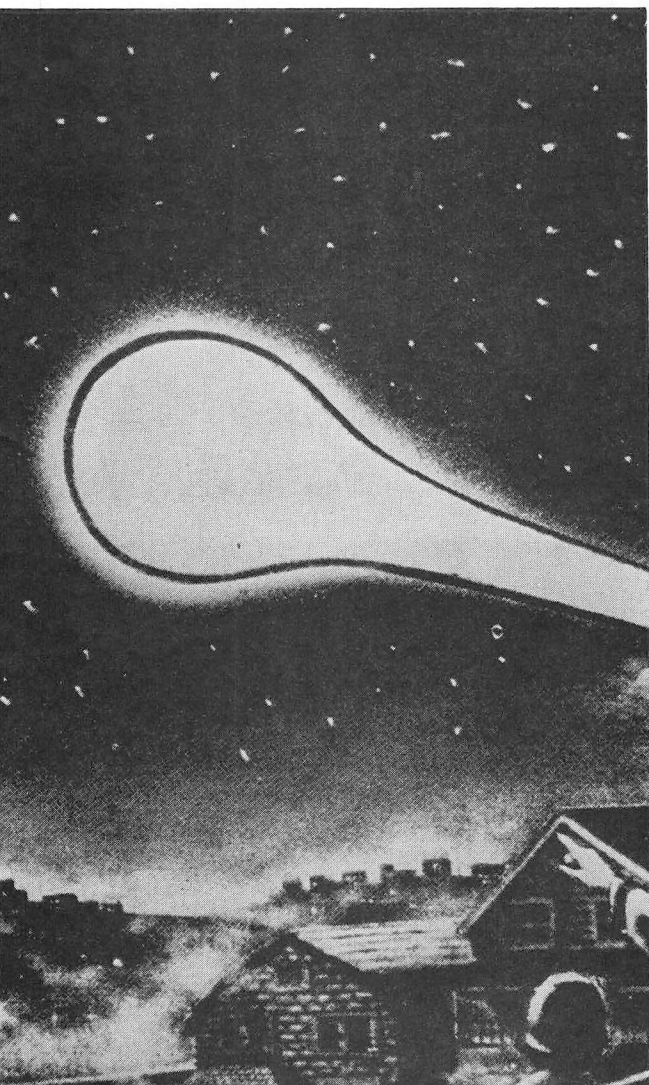
「夜十時頃、天に光りかがやくものあり。人々これを見、びっくり仰天した」

簡単な記述なのでよくわからないが、同『中



●「大アワビから光が……」こんな円盤が海底に鎮座したら、そう見えることだろう。1966年11月11日、オハイオ州ザネズビルの理髪師ラルフ・ディターが撮影。

●「今夕有大人魂」1948年9月11日、サンフランシスコの金門橋上空をかすめたUFO。



右記』同年三月二十日のところに「流星是入月中」の文句がみえるので、光耀というのは流星とは別物であることはわかる。いわゆる「光る雲」的な空飛ぶ円盤現象の一種か。それとも、太陽の黒点活動の激しい時、低緯度帯の京都あたりでも見えることのあるオーロラの一種か。よくわからない。

●一三二九年十一月二十二日夕人魂飛ぶ

『中右記』 十月九日（中略）今夕有大人魂飛渡天云々 万人見。

「夕方頃、大人魂があらわれ、天の端から端へ飛んだ。万人が目撃した」

「空飛ぶオレンジ」とよばれるUFOの一種か。ふつう、人魂とよばれる発光体はあまり大

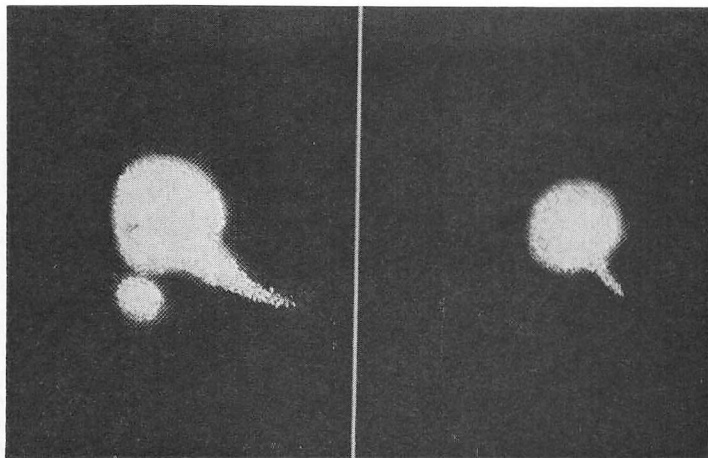
きくなく、人家の軒端からそう高くなくところを飛ぶ。ところがこの「中右記」の場合、「大人魂」（原記では「火人魂」とよめるが、火でなく大の意であろう）といい、天を渡るのを万人が見たというのだから、かなり高空を飛んだと考えねばならない。

とすれば、ふつうの人魂発光体ではありえず、尾を引いて飛ぶ「空飛ぶオタマジャクシ」型のUFOであったのかも知れない。

つぎにあげる三つの例は、いずれも同じ部類の発光体と思われる。

●一三三三年八月十二日戌刻天に大なる光物あり

『中右記』 七月十日天晴（中略）戌刻許天大



●「空飛ぶオタマジャクシ」1957年6月8日、福岡市で高校教師が撮影したもの。

刻 同十二日寅刻（中略）又有光指東 如日月（略）

「さる七日午前零時頃、同十二日午前四時頃また光あらわれ、東の方角に飛んだ。日月のように明るかった」

三例とも流星の一種である火球との区別がはっきりしないが一応あげておく。いずれも「大光物」「大光明」「日月のごとき光」とあるだけで、それ以上の観察がなく、UFOとは断定し難い。異常に大きな光であった点だけが、推定の手がかりである。

●一二九四年八月三日戌刻赤光北へ飛ぶ 月輪の如し

『東大寺八幡宮驗記』 七月十一日巳未 戌刻御遷座（中略）神輿出御樓間之刻 自御段之上赤光物 其勢如月輪而指北飛出之間 見聞之衆成奇特之思了

「神輿がいざ出発しようとすると、きざはしの上より赤い光物が現われ、月ぐらいの大ききで勢いよく北へ向かって飛んだ。これを見た人々は奇端なことだと感じいった」

円盤は地上を観察している

ちょっと見ると、UFOとは関係ないようだが、そうではない。米国の円盤研究の第一人者ドナルド・キイホーによれば、空飛ぶ円盤は遠隔操縦のテレビジョン撮影機を使って、ひそかに地上のようすを観察研究している。だから、とくに大きな催し物などのある場所に現われや

すいといい、第二次大戦のドイツ戦線上空や戦後の朝鮮戦争のさなかにも現われたし、その意味で、この世界最大の木造建築物東大寺の神輿式に現われた「赤光物」も、円盤の遠隔TV装置である可能性があるのである。

『東大寺縁起』 永仁三年七月十一日 戌刻奉遷大佛殿 三所神輿出御之時 赤光物如月輪指北飛出

●一三三九年八月九月 大星、西北へ飛ぶ。『南朝編年紀略』一 有妖種々 流星屢飛 或夜東方有雲 其色黒中有虹 赤青 其光如昼云々

「ある夜、東方にあらわれた雲はふしぎな色であった。黒色の中に赤、青の虹色がはしり、その光は昼のように輝いた」

これは日没後、地平線下の太陽の光を反射して光る「真珠雲」とも違うし、また、昼間、雲中の水滴のプリズム作用で七色の光を帯びるいわゆる「彩雲」とも違うようであり、正体は見当がつかない。

しかし、少なくとも「雲あり、その色」とあるのをみれば、オーロラなどの見間違ひでもなく、雲そのものが発光していて、しかも昼のように明るい光で輝いているのだから、月光などの分光作用でもない。

思うに、これは自然現象でなく、雲の中に人工的な光源が隠れていたのであり、やはりUFO現象の一つと考えてよさそうだ。

『続史愚抄』二十一 七月□□日□□ 大和記

光物 天下万人大驚云々。

「晴れた夜空に八時頃、大光物が現われ、世の人々みな、びっくり仰天したという」

●一三三八年六月十日戌刻天に大光見はる『興福寺別当次第』二 僧正玄覺 五月二日戌刻天有大光現

「夜八時頃、天に大光現（『中右記』には「大光明」とあり、その意らしい）あり」

●一二三三年六月二十一日寅刻怪光東へ飛ぶ『五妻鏡』 五月二十四日戌刻 晴 去七日子

有大星 形如日照傘 西北行 光燭如昼有尾
五条 色青赤声如雷

「大星あり。その形は日傘に似ていて、西北に飛んだが、青や赤にまぶしく輝き、五条の尾をひいて、雷のような音をひびかせた」

どちらかといえば火球の特徴をそなえているけれども、その形の記載が火球にそぐわない。同書の注釈によれば「大雲 飛星也 不隕者爲飛也」とある。すなわち大星というのは不隕、つまり隕石の飛ぶ火球ではないとはっきり断っていて、流れたのではなく、飛行したのだと、はっきり記している。

しかしながら、五条の尾をひいたのは非常に珍しく、海外の目撃談にもあまり例がない。何かの物質を放出していたのか、それとも故障を起こしていたのか。

マンテル大尉の悲劇

その形が日傘に似ていたというのはまさしく空飛ぶ円盤の特徴である。「空飛ぶアイスクリームコーン」とも呼ばれるが、円盤史上有名なマンテル大尉の悲劇を起こした円盤がこの型のものだった。一九四八年、米ゴッドマンフィールド空軍基地上空に現われた大円盤を追って、P51機搭乗のマンテル大尉は六〇〇〇メートルの高空まで上昇したが、そこで消息を絶った。空中分解して墜落したのである。その残骸機体からは不思議な擦痕が発見されたという。

● 一四一九年八月十日 大なる光物飛び、通

●円盤を追うマンテル大尉機（想像図）

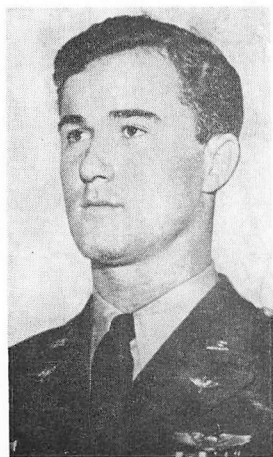


路の民家を破る。

『満濟准后日記』 七月十九日壬戌 今月十六日熱田社怪異稀代事云々 先風雨以外 其御通之路民家悉顛倒 其後於社頭託少女種々御神託在之 今夜光物伊勢御影向云々。

「熱田社に起こった怪異は世にも不思議なことだという。まず風雨の去ったあと、海面二十町ばかりが光り、大なる光物が飛び、社頭にはいった。そのため、その飛行コースにあった民家はことごとく倒壊したが、あとで社頭において少女に託した種々の御神託があり、今夜の光物

●故マンテル大尉



は伊勢の御真影であるという」

これは世界の円盤史上でも類のない目撃報告の一つであり、海面下の水中円盤の緊急発進による予期しない事故であつたらしい。風雨が去

つたあとに起こつたのだから、竜巻や突風による災害ではない。海面十二町ばかりが光つたというのは風雨の刺激による夜光虫の集団発光と考えられなくもないが、そうすると、その光る海面から飛び出したと思われる大光物との関連がつかなくなる。

それよりも、なにかの原因で海中に不時着した円盤の光を反映して、海面が光つたのであり、故障修理後、飛び上がったのだがまだ完全でなく、あまり低空を飛びすぎ

て、その衝撃波で地上の草草きの民家を倒壊させたのではないか。

そのあと、社の少女に託していろいろ神託があつたというのは、地上に損害をかけたことに對する円盤人からの、テレパシーによる陳謝の受信と考えると面白いが、それはもうフィクションと紙一重となろう。

●一四二二年七月十七日酉刻流星東へ飛び地震ふ。

『満濟准后日記』六月二十九日 申寅今日酉初刻計歟 大地響事一度 如雷鳴 諸人不

審仰天也 自京都來者 相語云 自西方三尺計

なる太刀様な物映夕日輝て東へ飛 花頂後山

へ落ちける其響也 諸人見之 稀代事也云々

自鞍馬下向者語申 於鞍馬寺聞此響様同前也。

「突如、大地が震え、雷鳴のような響きがあり、人々は驚いて空を見上げた。京都から来た

者の言うに、西方の空から長さ一メートルばかりの太刀そっくりの物が夕日に照り映えて飛

び、花頂後山へ落下したその響きであると。多くの人がこれを見て、不思議がった。鞍馬方面

から来た者も、鞍馬寺においてこの響きを聞いたという」

どうやら隕石落下の状況によく符合するにはするが、「太刀のような物、夕日に映えて輝き」という記述が気になるので、あえて引用しておく。あるいは葉巻型UFOの墜落事故である可能性もあるからだ。

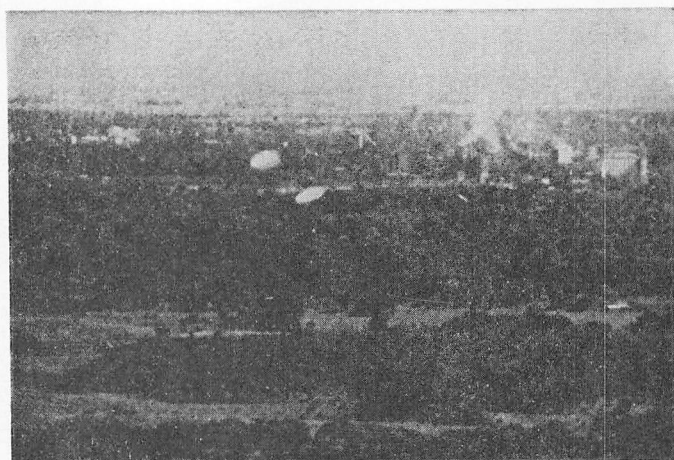
「花頂後山」とは現在の京都のどのあたりか、隕石の落下とすれば、その衝撃地震の大きさをあらして、たぶんクレーターが生じたはずだし、もしUFOの墜落とすれば、その残骸がなおそのあたりに埋まっていることも十分考えられる。いずれにしても、この古記録は追跡調査の要がありそうだ。

●一四二三年十一月客星東西に見はれ組合ひて落つ

『看聞御記』孟冬朔 天晴 吉兆（中略）抑聞 自去頃客星東西に出現 而此間事歟 件二星、客合組合地に落 醍醐辺に兩星組落中より

●「太刀様な物夕日に照りはえて」輝くようなUFO。1957年10月16日、米ニューメキシコ州ホロマン空軍基地の上空を飛んだ。看護婦のエラ・フォーチュン嬢が撮影。上方の雲も不思議な現象といわれている。（原写真はカラー。本誌創刊号にカラー写真を掲載）

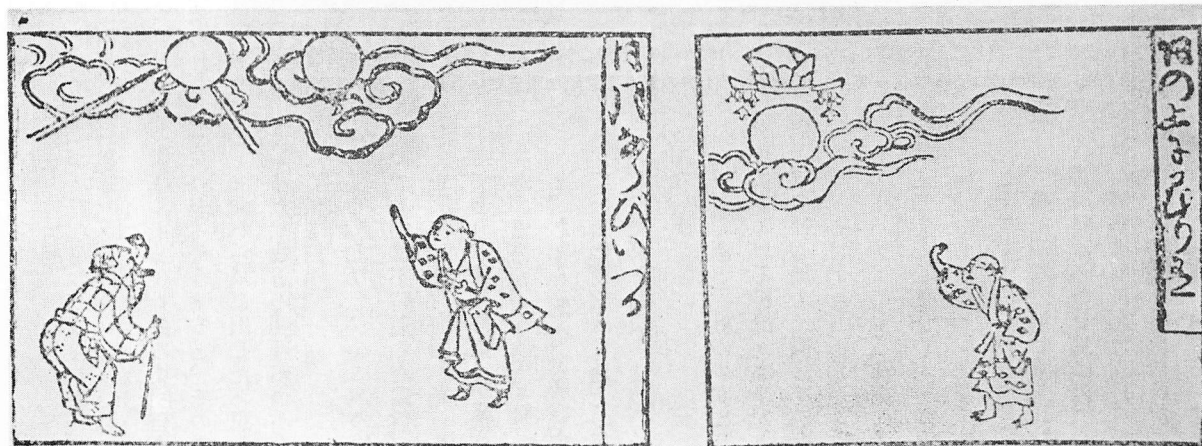




●「客星東西より組合いて」飛んだ2機の円盤。1955年9月3日、アイオワ州、ヒアワタ上空にて。下は江戸時代の史書に載っている雲上の2機。

天上、東星は地に落 近辺三時之間光云々 其
後行方消失 醍醐人見之 三宝院公方注進申
陰陽師被占之由申云々 西星は京都 東星は関
東歟 而東星地に落 西星は天に上仍御吉事ト
占申歟 関東叛逆未落居之間 西星勝誠吉事
也。

「二つの客星が東と西に現われ、たがいに接近
して組合いながら落下しはじめたが、西星は醍
醐あたりに落下しかけて途中から反転上昇、東
星だけ地上に落下、その落下地点のあたりは、
三時間のあいだ、光っていた。しかし、その後



は行方知れずとなった。醍醐付近の人はこの異常を目撃してさっそく三宝院の公方様に報告。公方は陰陽師を召しだし、これを占わせたところ『西星は京都、東星は関東をあらわす。しかし東星は地に落ち、西星は天に昇る。これは大吉である』とのことであった。すなわち関東勢は反逆のすえに没落し、西星はかならず勝つ。めでたいことではないか」

故障か何か起って連絡がうまくいかず、一機が墜落してしまったものとみえる。近年海外でもよく似た目撃例があり、飛行力を失って墜落しかける円盤を、もう一機が救助するように連れそって飛んだり、あるいはその甲斐もなく、一機が海中に墜落したという例もある。

琵琶型のUFO

●一四二四年十月十八日亥刻光物異より坤に飛ぶ。

『満濟准后日記』九月二十六日晴 今夜亥初刻歟天変 光物自辰巳未申飛 共如琵琶形云々。
「今夜、天に異常があった。奇妙な光物が辰巳の方角と未申の方角と二方面から出現して、空を飛んだ。その形は二つとも楽器の琵琶に似ていた」

琵琶の光物とはすなわち楕円形の物体で、UFOのなじみの機種。同時刻に二方向から現われたところからすると、いわゆる二星会合現象のUFOだったのか。あるいは多少尾を引いていたので琵琶形に見えたのか。

●一四三一年一月九日近日屢々光物飛ぶ。

『満濟准后日記』 閏十一月二十五日晴 自畠山方内々申旨在之 御所中に怪異連々在之一度は松はやしをして虚空を過する様に聞了一度は又光物自御所中出现 一度は女人魂光物又出現云々 及三ケ度了(以下略)

「皇居内に怪異がひんぴんと起こった。その一つは皇居上空から聞こえる怪音で、あたかも空中に松林を通過させるような音であった。もう一つは、光物が皇居の中から出現した。さらにいま一つは女の身体から抜け出る人魂形の光物が現われた。怪異は都合この三度におよんだ」ちょっとみただけでは単なる怪異物語でとりとめないが、怪音の記述が見逃せない。

一九四九年から五〇年にかけて、ロンドン子の耳を悩ました「空飛ぶ音響」事件があった。大風の時に電線が発するヒューンという音によく似ていたという。だとすると、この古日本の怪音とそっくり。どちらも音響学上からはエオルス音とよばれる空氣の渦動による震動音らしい。だが、はたして「空飛ぶ音響」と空飛ぶ円盤とが関連していたかどうかは明らかでない。私の仮設では、円盤が目にもとまらぬ高速で飛ぶ際に、大氣中に起こす振動だろうと思われる。その証拠に『満濟准后日記』を見れば、上空のUFOからリモートコントロールされている地上観察用TV装置とおぼしい光物や人魂がひんぴんとして現われている。

とくに「一度は又光物」とあるように、最初

の怪音の時も、すでに光物が目撃されたことがわかり、怪音と光物の関係を記録者はひそかに暗示しているのである。おそらく当時の御所(皇居)の内部を、宇宙から来た円盤人たちは好奇心にかられて調査観察したのだろう。

イギリスの姿なき怪音

ところで、この種の「姿なき怪音」の例は、非常にまれであり、海外で起こったケースにしてもあまり知られていないので、いまいし詳しく触れておこう。

一九五九年、イギリスのケント州の住民も「空飛ぶ怪音」に悩まされ、地元の警察ではいっこう正体がかみえず、さんざん手をやいた。この怪音はその数年前、ロンドン子の耳を悩ましたものとまったく同じであり、コックスというロンドンの元弁護士が発表した「怪音の正体について」という論文を読むと……「その音は、電線に風が当たったときよく聞かれる「ヒューン」という音に似ているが、慎重に調査したところ、ジェット機、レーダーの波、サイレン、秘密エンジン試験の、いずれでもないことが判明した」という。

他州から移ってきた家族などは、怪音に神経を乱されるあまり、生活を続けられず、ふたたび元の土地に戻っていくか、そうそうに他の土地に転出してしまい、州当局も「なんとかしなければ……」と頭をかかえているが、なにせ、相手が姿なき怪音では、手のほどこしようにな

い。

「レーダーが犯人では」とのもっぱらの噂に答えて、ロンドン空港の電波通信局長は

「私は騒音についての、あらゆる種類の苦情を受けている。たいがい普通の航空機エンジンの苦情だが、そのような怪音については、耳にしたことがない。レーダーが原因なら、とづくに私も聞いているだろう」

と、レーダー説を退けた。一説によると、ケント州の海岸に沿った町は、ドーバー海峡をへだてて、フランスの地下と白亜の暗礁でつながっており、その地層の内部を流れる地下水から飲料水をあおいでいる。だからこの怪音は、おそらく近年に出来上がった地下深くの大滝から響いてくるのではないかと、ともいわれた。

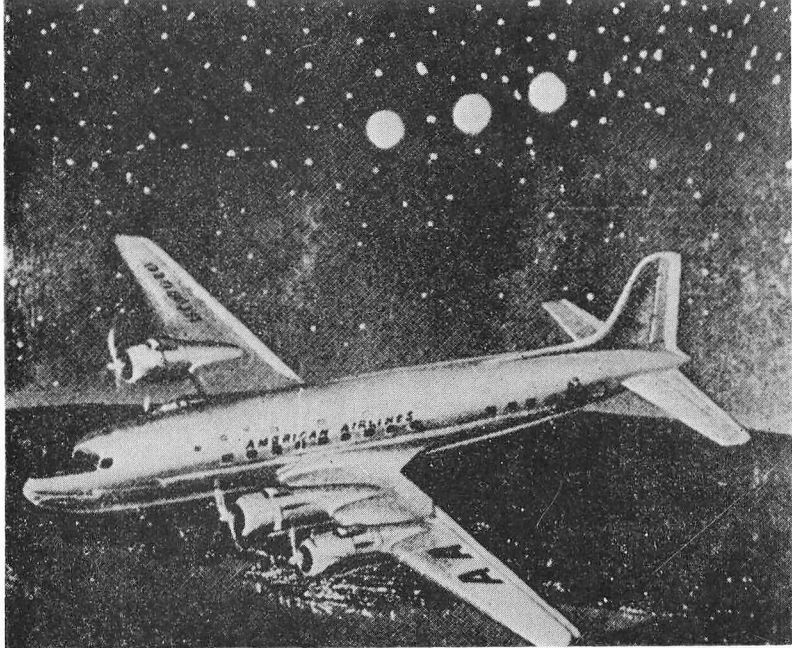
イギリスのUFO研究者として知られるジェサップという人など、宇宙人のテレポーテーション(電波のようになつて空中を移動する方法)など奇妙な考えを持ちだして説明しようとし、SF映画化されるほどの騒ぎであった。

いづれにせよ、空中から怪音が聞こえたことは事実であり、だれにもその原因はわからなかったのである。

●一四三一年八月六日戌刻流星北より巽へ飛ぶ。

『看聞御記』 六月二十八日晴 今夜戌刻大光物 自北巽方へ飛、其光如灯火 入雲了 流星歟 天変歟不審

「今夜八時頃、晴れた夜空に大光物あらわれ、



●「光物飛ぶ。北より南へ」1959年1月25日、ミシガン空港へ向かうDC6型旅客機が3個の光体に追跡された。(イラスト)

北より東南の方角へ飛んだ。その光は灯火のごとく、雲にはいつてしまった。流星だろうか、天変だろうか。とにかく異常だ」

同じような記録がもう一つあり、こうだ。

●一四三二年十月五日光物長より飛ぶ

『満濟准后日記』 九月十一日晴(中略) 自丑

寅方如蠟燭火物飛入天 若流星類歟

「東北の方角からローソクの火のごとき物が飛び上がり、天にはいった。あるいは流星か」

さきの『看聞御記』にしても、『満濟准后日記』にしても、記録者は判断つかず迷っている。その迷っていること自体に、UFO現象らしいと推定する根拠がある。

「その光、灯火のごとく」とか、「ローソクの火のごとき物」といい、どうやら形が紡錘形であつたらしいこと。また「あるいは流星のたぐいか」とか、「天変か。不審」と首をひねっているのを、いいかえれば、流星とは違う特徴の光物である証拠といえよう。

●一四七九年 是年三星東西に出で一に合す。

『分類本朝年代記』 文明十一年 星三つ出東西一合

「三つの星が東西からあらわれ、一つに合した」

記述が非常に簡単なのでなんのことやらよくわからないのだが、あるいは二機の円盤が母艦に収容された事実を示しているのかも知れない。

海外にもよく似た目撃例がある。米国フィラデルフィアの公園の近くで、夕闇迫るころ、十四歳の少年ジミイは、雲間から現われた巨大な葉巻形の物体に気がついた。

長さ三十メートルくらい。赤い色から青白い色に変わり、九月の初秋の森の上に静止した。見ていると、その葉巻形の物体は、東と北から

飛んできた大きな六メートルくらいの小型の円盤をつぎつぎと吸いこみ、ふたたび赤い色に変わると超スピードで北へ向かって飛び去った。たぶん、この葉巻形UFOは、小円盤をのせて大宇宙の星から星へ飛ぶ円盤母船だったのだろう。

以上でだいたい戦国時代にはいる頃までの古記録を紹介しつくしたわけだが、まだある他の記録も疑えばきりが無い。一例をあげてみよう。

●一四六八年三月八日子刻黒氣飛行す。

同年四月七日光物三個北より南へ飛ぶ。

これなどもUFO現象の記録の一部と数えてよいかもしれない。しかし他の多くの記録は「大光」「光耀」「光物」「天変」「怪光」などと簡単に表現されているだけで具体的な形状描写に欠けており、流星現象と区別がつけられない。

この点、事物の観察や幾何学精神を重んずるギリシャ科学の伝統をもつヨーロッパの古記録と比べて、信頼度が薄れるのは止むを得ない。戦国時代までの古記録を終えるにあたって、とっておき、きわめつけのUFO記録を紹介しよう。

太平記に見える不思議な「電光」は大激戦?

●一三四九年七月十八日雲間に光あり散らず。

『国大曆』十三 閏六月三日天晴 今日雲間有

光 如電光 但不散 遺尤奇也

『太平記』二十七 又閏六月五日 当戌刻に異方と乾方より電光輝き出で（注。同太平記西源院に「百千の灯を虚空に張る如くなり云々」とある）兩方の光寄合て、戦う如くして碎け、散ては寄合て、風の猛火を吹上るかの如く余光天地に満ちてひかる中に異形の者見えて、天乾の光退き行 異の光進み行きて、互の光消失ぬ 此妖怪如何様天下穩かならんと申合にけり

『太平記』 後の六月五日 戌刻異の方より電けしからずして天地を驚かす歟と見る程に 又乾の方より稲妻の様なる光輝出て天地を照す。あら不思議やと見居たれば 兩方の電光寄合戦か如くては散り、ちりては寄合 其烜燦たる火迸て、只猛火を打散し、暴風焰を吹立たるかの如く 余光天地に満てり 此電の寄合次に色々異形の者共見へしか 寅の刻計り光次第に退く 異の光頻に進み行様に見えて兩方の光滅去る事 卯刻に失にけり 是舊事に非ず 如何様天下の大変也と申合処に（下略）

他の書にも簡單ながら同類の記録がある。
『七巻冊子』三 閏六月三日 天晴 雲間有光の如し

『編年西略』 六月五日 戌刻異方乾方光耀如

戦
『続史愚抄』二十三 閏六月五日壬辰 雲間有光 非電而不散

「夜分八時頃、東南と西北の方角より電光輝きだし、空中で打々発止とぶつかりあい、まるで

猛火を散らし、火の粉を吹き上げるようなすさまじさ、その飛び散る光の中に奇妙奇天烈な形のもが動きまわっていたが、やがて西北の光が退きはじめ、東南の光は前進して、兩方の光とも見えなくなった。これはまさしく、天下の一大事であろうと話し合った」

いったい何事が起こったのか。私はこれをUFO 同士の空中戦闘、すなわち地球上空でおこなわれた世にもまれな宇宙遭遇戦ではなかったかと思う。そう考える以外、この天地を圧する壮烈な光の炸裂を説明しようがない。

もし自然現象とすれば、非常に見事なオーロラとする以外にないが、『太平記』の記述からみるかぎり、その光の動きはかなりこまかく、しかもごく短時間に消滅しているようなので、オーロラの大味な光の動きとは、いささか趣きが違うといえまいか。

思うに、たがいに対峙して放射した「電光」というのは、現代感覚からとらえればおそらくサーチライトのようなもの、あるいはレーザー光線のようなものであり、百千の灯を虚空に張ったような光とは、砲弾とミサイルの弾幕ではなかったか。

そして、その戦闘の後半になって姿を現わした「異類異形の者」とは、小型の特殊戦闘艇、または空中で白兵戦を演じることのできる「空中攻撃部隊」のようなもの、と考えられなくもない。重装備の宇宙船同士の戦いには、そうした小まわりのきく戦闘隊も必要となる。戦艦同

士の戦いを援護する駆逐艦や水雷艇の役割である。

だがしかし、これほどの大激戦ならさだめしその砲弾の爆裂音もすさまじかったはずにかかわらず、『太平記』の記述にはそうした大音響についてまったく触れていないのはどういふわけか。

記述者は冒頭から「電光輝き出で」とか「電けしからずして」と書きだして、この怪光現象を最初から稲妻放電の特別ケースとしてあつかっているの、雷鳴についてはいうまでもないと考え、ことさら記述しなかったのか。

ともあれ、この怪光現象は海外の目撃例にも類例のない非常に貴重なもの。私の推定のごとく宇宙遭遇戦の目撃記録とすれば、世界円盤史上、重要な文献の一つとなる。

つぎに江戸時代のUFO記録をみよう。

江戸時代のものについては、当時の文献を広くあさり、怪奇な話を蒐集した富岡直方編著『日本怪奇物語』に詳しい。その冒頭に「江戸時代狐奇年表」が詳しい。その冒頭に「江戸時代狐奇年表」がまとめてある。ここにUFO現象らしい記録が三例認められる。

●慶長十四年三月四日（一六一四年）近畿の空に四角な形の月が現われた。

これだけの簡単な摘要文で出典は明示していない。事実とすれば、蜃気楼現象の一種である「幻月」であったのか。それともフランスで目撃されたという「破れたトタン状の奇妙な飛行

物体」と同型のタイプだったのか。ちなみに故徳川夢声氏は、自宅付近の屋根の上を飛んだ、あまり大きくない不思議な「空飛ぶ四角形」を目撃したことがあるという。

●寛文六年五月二十六日（一六六六年）江戸の空に奇怪な光るもの現われ、東へ向かって飛んだが、長さ二丈余、その形は人の姿のようであった。

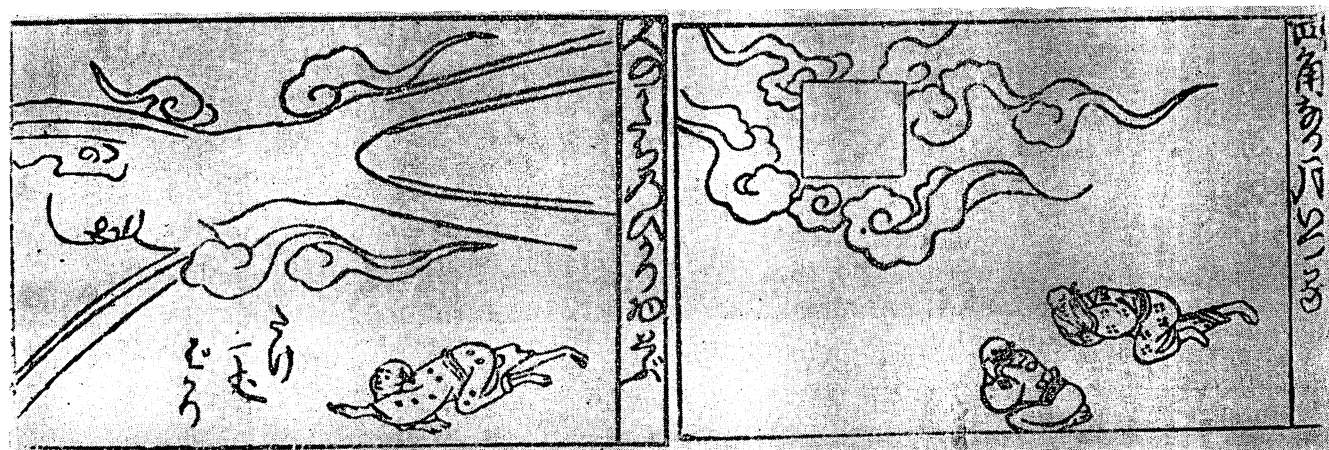
出典不明だが、翼ないし「ひれ」を持った飛行体だったと推定される。現代の後退翼をもつジェット機の飛行を江戸時代の人が目にした時の驚きを想像されたい。四肢をふんばった人の姿と見られないこともないだろう。

●元禄五年五月六日（一六九二年）白昼のこと、江戸の空に日、月、星の三光が現われ、無気味に輝いた。

出典不明。あるいは単なる気象現象だったとも考えられる。火山や山火事などの煙が流れてきて、上空をおおうと日光が弱まり、月や星の光が目立って見えてくるということもあり得る。とはいえ、日光の弱まりについては何もふれず、白昼とあるからには太陽と新月と、もう一つの星に見まがう光の強いUFOの滞空出現と解されなくもない。

房総の海の「大アワビ」UFO

さて、本文に入ると、第十話の項に、「房州の海に怪光を放った七八間の大鮑」という見出しで、『新著聞集』からの採録がある。



●江戸時代の文献に現われた人の姿をした光体と四角なUFO

寛文五年（一六六五年）のことであった。房州平群郡の内、亀崎の海中から、なにものか、にわかにこうこうたる光を放ちはじめたので、漁師たちも仕事に出ることができず、弱りはてていた。すると、浜の年寄りのある者が、
「若い者はしょうもないのう。私が見とどけて来てやろう」

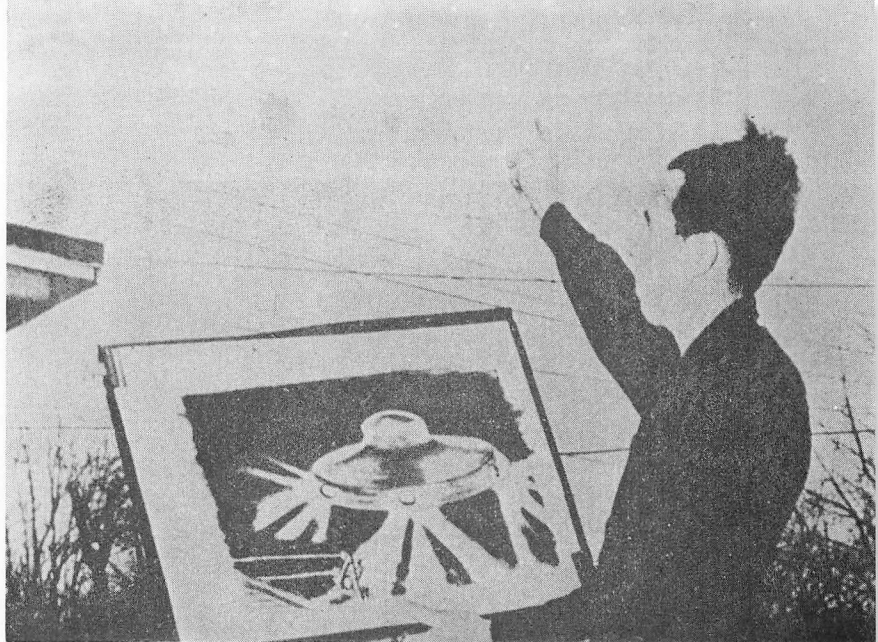
と、その光の放つところから二町ばかり離れた場所の海へ入り、海底の様子を見て来ているには、

「七八間もある大きな鮑から光が出ているのだが、とても凄じくて、そばへ寄りつくこともできな」

とのことであった。しかもその後、その鮑はどこかへ去ったのか、間もなく光もなくなってしまうた。

これと同じ話が、同じく江戸古書『梅翁隨筆』巻四にある。話の筋がやや違っているにしても、両書の記述から、大鮑出現の事実はあるかぬようだ。

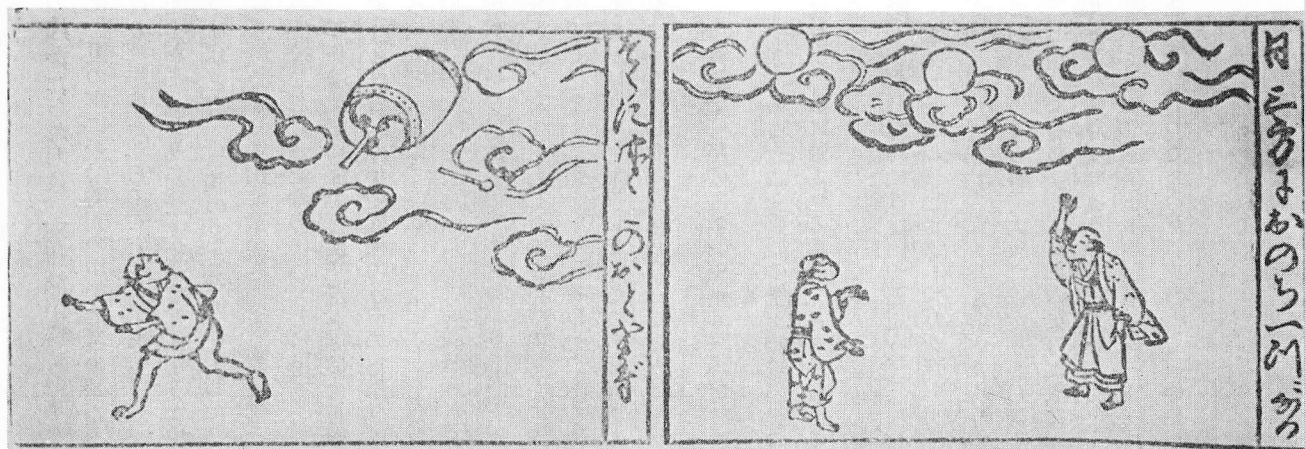
『寛文五乙巳年五月、安房国亀崎という所の海上、夜毎に光あり。蟹等不審におもひ、ある夜四五人申合せ、海底に入りてその光を見るに、凡そ七八十丁余りの大鮑ありしとなり。珍しきものなればとて、人々にも告げしらせしほどに、この辺の海人ども皆見たりといふ。かほどまで大きな鮑有るものにや。すべて鮑多くあつまりたる節は、海上時によりて光る事有るものなりといへり』



●「大アワビから光が……」こんな円盤が海底に鎮座したら、そう見えることだろう。

この大鮑の大きさをみるに、『新著聞集』では「七八間」（一四〇一五メートル）『梅翁隨筆』では「七八十丁（八四〇メートル）九六〇メートル」と大きく食い違う。しかし、どちらの数値をもとにしても、どんなにお化け鮑で天然にはほとんどあり得ない。どうしても「人工物」と思われるのである。

もし、海底に着陸した円盤を、昔の漁師が見たとしたら、いったいどう考えるだろうか。丸



●轟音を発するUFOと3個の光体

く、平たい円盤状の機体は、まさしく殻を閉じた大貝そっくり。しかも、側面にいくつかの窓を有していたら、それこそ鮑の特徴であり、漁師が大鮑と間違えるのも、まったく無理ない話なのである。

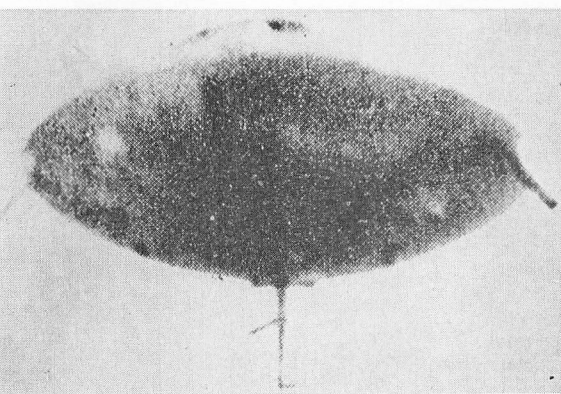
直径十五メートル前後とすれば、空飛ぶ円盤の大きさとして不自然ではない。また、『梅翁隨筆』の記述のように直径一千メートル級であったとすれば、それはおそらくUFO母艦の一種だったのではないか。

海外の目撃例を見ても、海の中から出たり入ったりするUFOが見られていて、UFOの基地は海底にあるのではないかという意見もあるくらいだから、安房国つまり今の千葉県沖の浅い海底に円盤が一機、または数機着陸して光っている、そして不思議でなく、十分あり得ることなのである。

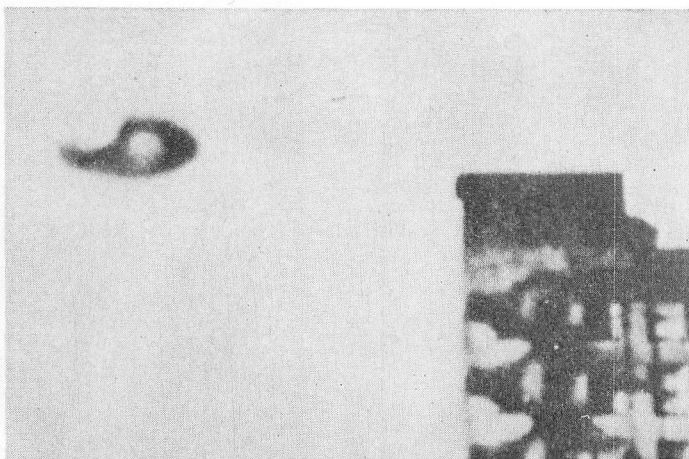
すでにお気づきのように、この特異な目撃例は、先に述べた『満濟准后日記』一四一九年八月十日の項、海面から飛び出し、民家に多大の損害を与えたという大いなる光物の報告とあい補い、よく一致するといえよう。

つぎに第五十一話の項を見よう。「晴れ渡った空の中空に竜の頭が現われる」という見出しで、島江正路の隨筆『異説まちまち』からの引用がある。この著書は寛延元年（一七四七年）間に執筆されたというから、出来事はそれ以前に起こっている。原本に当たってみよう。

『松浦氏妻はおやまと名をいひしなり。おやま



●「竜の首か」1957年12月、ラムゼイ号の船上から無線技師フォゲルがカリフォルニア海岸沖で撮影。



●「空中に竜の首が……」ニューヨークのテレビ技師ワーレン・セイグが撮影

の姉かたられしは、羽州酒田にての事なりしに、夏の事にや、晴天の中天に竜の頭のみ見えけり。牛のかしらのごとくにてありしが、目の光すさまじかりし。下へ下るとみなみな出ておひけれども、只其のままの体にて居たりしが段々四方より雲出て竜のきわよりして雲につかみかくされけりとなり』

これは空中に静止した空飛ぶ円盤の目撃例と考えられる。近年の同種の状況の目撃談とおどろくほどよく似ている。「牛のかしらのごとく」とは円盤からつきでたアンテナを牛の角と思つたからで、「目の光すさまじかりし」とは、日光が側面窓に反射したのを見間違えたのだろうか。それとも特殊な形のUFOで、ある種のライト・ビームを装置していたのか。目撃の日付がはっきりしないのは残念なことだ。

寛政十一年の「エンジェル・ヘアー」

つぎに第一百一話「真昼の空を蜘蛛の巣のような物が無数に飛ぶ」の項は、日本における非常に珍しい「天使の髪の毛」または「聖母の糸」降下現象の記録ではないかと思う。

「寛政十一年（一七九九年）の十月十四日は空が快く晴れて少しの風もなくのどかな小春日和であった。その日、大阪では淀川から天王寺の方へかけて、ちようどクモの巣のような、先が丸くかたまっているものが、ふわふわと上下に漂いながら、小春日和の真昼の空を数限りなく飛んで行くのであった。その中で一つ二つ地面

へ落ちたものを拾ってみると、それはクモの巣と少しも違わないようなもので、ただ糸が少し太かった。それを掌に入れてもむと皆跡かたなく消えてしまうのである。この不思議なものは正午頃から飛びはじめ、屋すぎが最も多く、八ツ時（二時）頃になって見えなくなった。

その翌日も前日と同じく天気が快晴で、ただし風があったが、今日も飛ぶかと人々は朝から心待ちに空を見上げて待ったが、その日は飛ばなかった。そのクモの巣のようなものが何物で、また何処から飛んできたか、わからなかった」（『梅翁隨筆』）

日本には古く東北地方などで「雪迎え」とよぶ現象があり、晩秋の晴れた日に多く、ある種のクモが長く伸ばした糸の浮力を利用して、空中を移動する状態をいう。

このエンジェル・ヘアー降下の典型的な例は、一九五二年十月フランスのオロロンとガイヤック地方の上空で起こった。円盤母船とおぼしい奇妙なシガレット型の大型機とともに、数十機の円盤編隊が現われ、いっせいにキラキラ光る白い繊維状の物質を、空いっぱいに出出した。不思議なことに、その降下した糸状の物質に手を触れると、すーっと空気に溶けるように消えてなくなり、あとに匂いも何も残らなかったという。

この奇妙な円盤編隊事件にたいして、実際に目撃しなかった学者たちは、フランスにもある「雪迎え」現象のクモの糸だろうと反論したの

を同国の著名な円盤研究家ミッシェルは紹介している。

ところで『梅翁随筆』の記事はUFOの目撃について何もふれていないが、遠方の高空からただよい落ちてきたために、それを放出した空中物体に気づかなかったのかも知れない。「雪迎え」なら例年の現象だし、クモの糸ならクモそのものが見つかるとは、手でもむと跡かたなく消えてしまうこともないだろう。この点、珍しいエンジェル・ヘアの降下現象であった可能性があるのである。

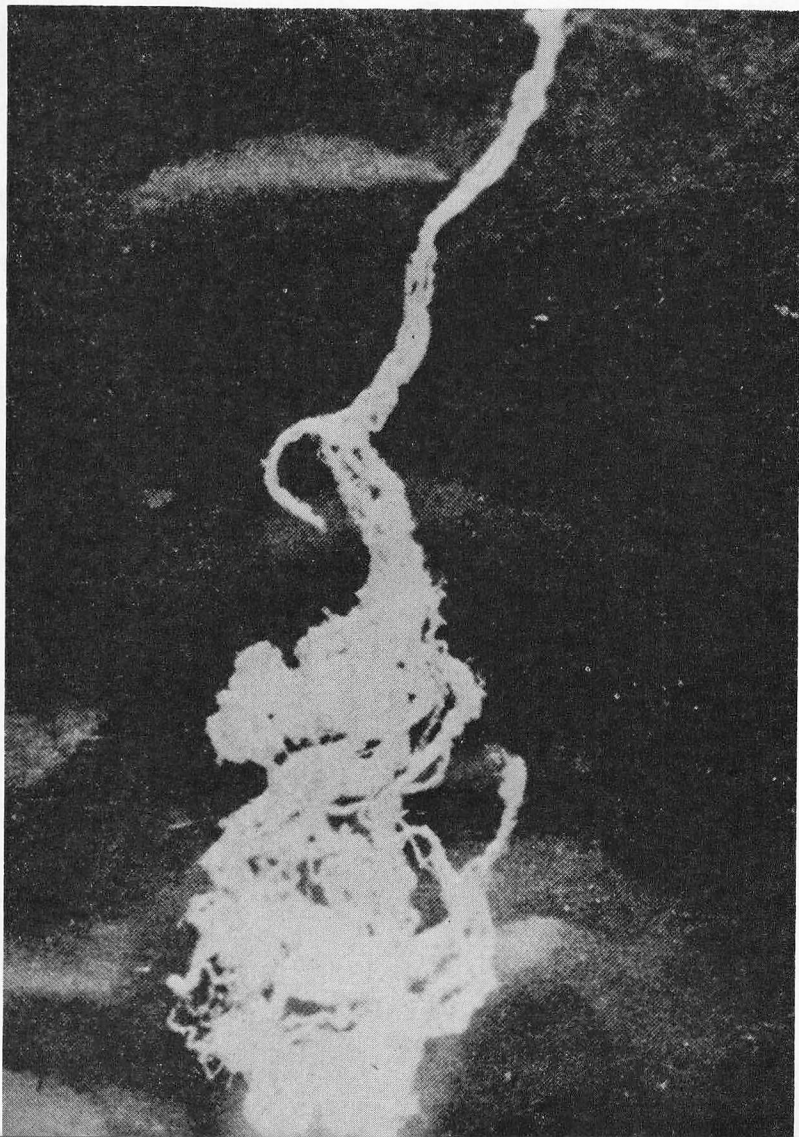
なにぶん過去に起きた現象だし、それを観察した人々も科学的素養が希薄なので、記録はいたってあいまいとなっている。簡単な文面からではいろいろの臆測が可能であるが、既知の天文現象、気象現象の知識をふまえて、しかも大胆に想像をめぐらし、各自に記録を検討してもらいたい。そしてこの方法によって、UFO現象観察の埋もれた古記録がさらに発掘され、世界UFO史研究の貴重な資料に加えられることを大いに期待したい。

日本のUFOの歴史記録は他に類のないユニークなものが多く、それだけ今後のUFO現象の理解と予測に最重要部分を占めるのである。

(完)

●6頁の絵は中国の史書に現われた天狗。謎の天空人か。

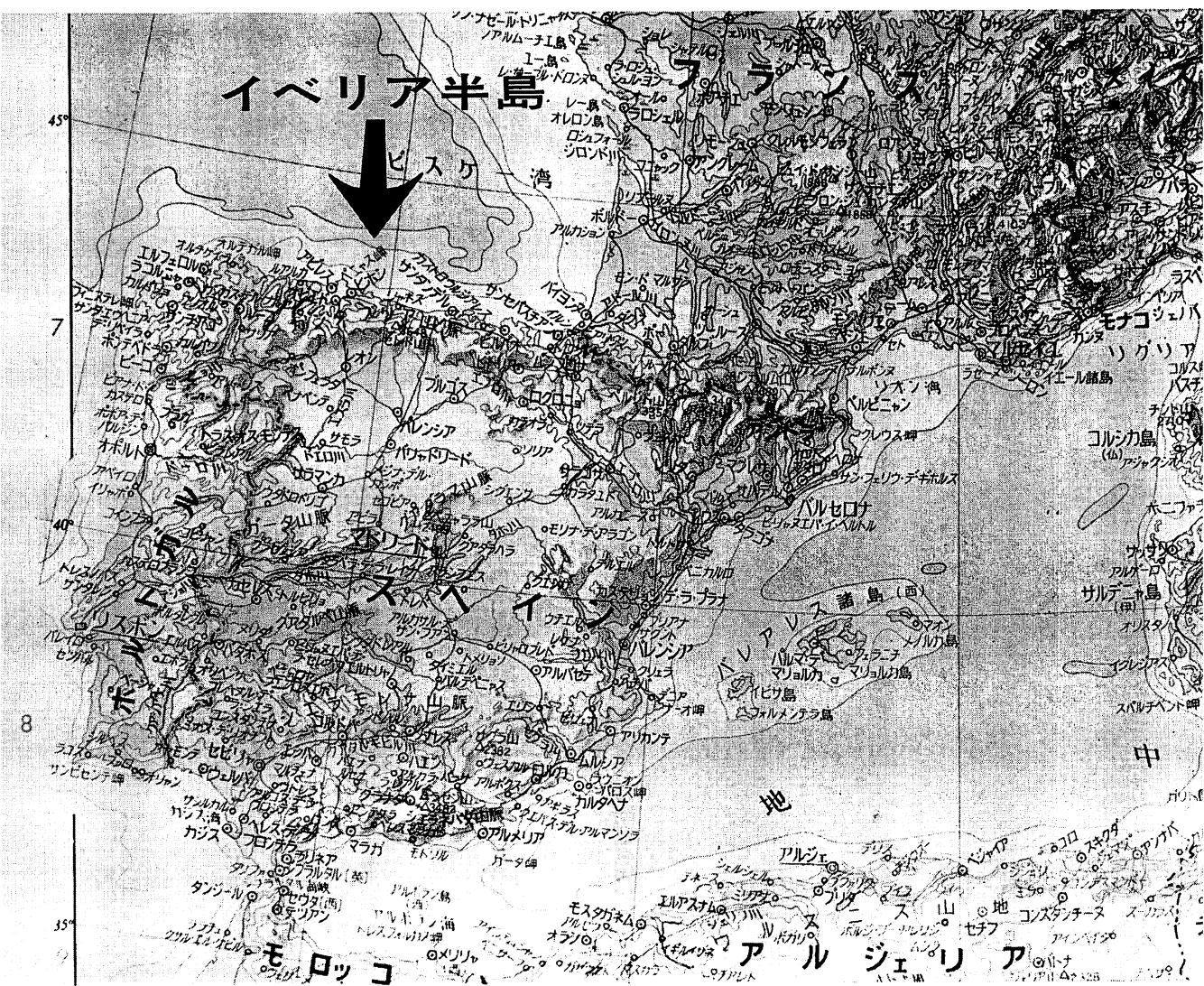
●UFOから投下されたエンジェル・ヘア



南欧に発生した百件の実例

イベリア半島の UFO着陸事件

ビセンテ・ホアン・バレステル・オルモス



一九二五年

ラ・マンチャ（スペイン、カスティリヤ・ヌエバ）

日付は不明だが、ある男が、緑色の服を着た身長百二十センチほどの怪人とバッタリ出会った。この怪人の手足はいかにも固そうで曲げることもできないように見えたが、両手で一個の円盤をかかえ、もう一個の円盤の上に乗って自由に動きまわっていた。両者間の距離はわずかに二メートルくらいだったが、言葉はかわさなかった。

一九三八年七月二十五日（二十時三十分）

グアダラハラ（スペイン）

ある軍人とその助手が、強烈な白い光を見た。その光は、六十メートルほど前方の地上二メートルの高度に静止している直径約十一メートルのレンズ形の黒い物体から発していた。そのうちに下面からプラットフォームのついた円柱が音もなくスルスルと出てきたばかりでなく、プラットフォームの上には二人の人影が動いているのが見えた。青い光の輪が地上を照らし、二人の目撃者に焦点を定めると、二人は体がゾクゾク寒いような感じを味わった。プラットフォームが引き上げられると、物体の二つの部分が互いに反対方向に回転を始め、全体が強烈な白光を放ちながら飛び去った。目撃者二人

は、あれはドイツ軍が共産軍の新兵器にちがいないと思った。

一九五〇年三月二十二日

ヴィリャルタ・デ・サン・ホアン（スペイン、シウダド・レアル）

フリアン・ニエトとグレゴリオ・ルイスという二人の商人が、非常に明るく光る雲のような物体を目撃した。二人は濃霧用ヘッドライトを点灯したけれども、まぶしさのあまりにあやうくその物体と衝突しそうになった。しかし物体はヒラリと後退し、やがてまた車におおいかぶさるように接近した。物体は、車が町につくまで二十回ほども接近と後退をくりかえした。

一九五〇年四月十二日（午後）

レウス・タラゴナ（スペイン、タラゴナ）

軽トラックでレウスとタラゴナを結ぶ街道を走っていたベドロとアンドレス・ガルシアの兄弟は、オリブ並木の上を低空飛行している物体を見た。その物体は直径約一メートルの円盤で不気味に輝き、数秒後に非常に高速で飛び去った。

一九五〇年四月十四日

カマラサ（スペイン、レリダ）

カマラサの人々は、水力発電所のある湖の水面に輝く物体が着水するのを見た。しばらく浮かんでいたが、やがて沈んでしまった。

一九五二年八月（夜）

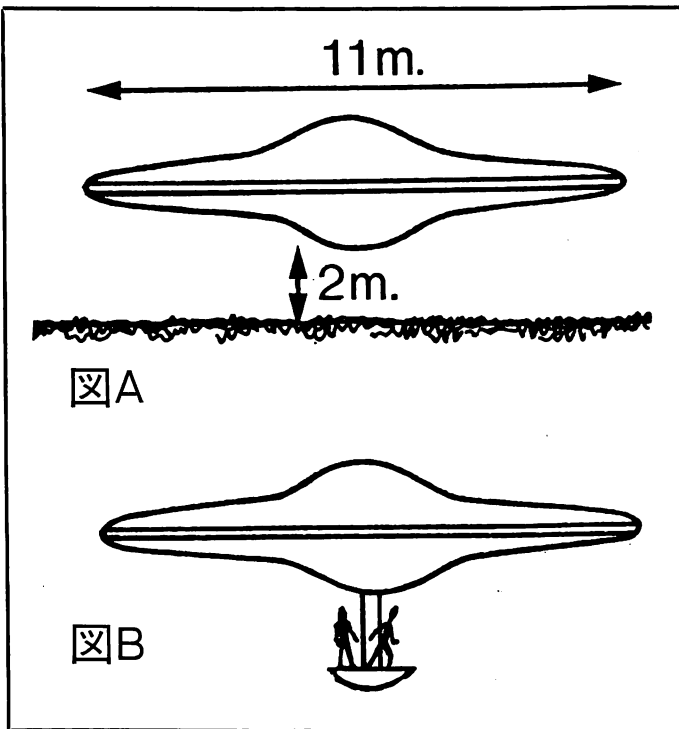
アイトナ（スペイン、レリダ）

ラモン・ビラルデル（三十七歳）は

か一名は前方約百メートルの路上に球状の物体がいるのを発見した。直径は推定で一・五メートルほど、満月の六倍は大きく、緑と青の「蒸気のような光」を放っていた。十秒後には消えたが、二人はただ驚くばかりだった。

一九五三年七月一日（十三時）
ビリャレス・デル・サス（スペイン、スエンカ）

ムノス・オリバレス（十四歳）というある無学な牛飼いの少年が、背後の笛を吹くような小さな音に気づいてふりむくと、「大きい気球のような物体が地上にあった。形は水差しに似ていたが、金属製という感じだった。黄色い顔に細い眼という東洋人みたいな身長六十センチほどの小人が三人開口部から出てきて、少年にはわけのわ



●グアダラハラのUFO 1938年7月25日

からぬ言葉で話し合った。彼らの服は青色で、前にひさしのついた平たい帽子をかぶり、腕には金属板がつけてあった。一人が少年の横面をはりとばした。三人とも内部にはいると、物体は明るく輝き、低い笛のような音を発して「ロケットのように」上昇した。警察の調査で、足跡と、深さ五センチの穴四つで一辺三十六センチの正方形を形作っているのが発見された。

一九五三年九月（夜）

サントナ（スペイン、サンタンデル）

ある晴れた夜、約三千五百メートル前方の海上にがっちりした物体が浮上して、そのまま垂直に飛びあがって約一分後には姿を消した。目撃者のF・カンパニアの話では、明るい青色に光っていたという。

一九五四年十月十七日

アルヴィト（ポルトガル、バイゾ・アレメンホ）

マヌエル・マデイラは大きな動物の発するような音を聞き、何だろうと近よったところ、奇妙な物体が地上から飛び立って高速で垂直上昇をした。

一九五四年十一月一日（二十二時四十分）

オルデネス（スペイン、ラ・コルナ）
運転手のG・ルビノス・ラモスは、

ギヤボックスが破損したため、サンチャゴ・オルデネス街道のクルバ・デル・オビスポで車を止め、ラ・コルナに連絡した。真夜中になって友人のラファエル・カロロ・サベルとホアン・パドロ・ラモスがレッカー車で現場に到着したとき、ルビノスは車の中でロザリオを手にひどく興奮していた。直径六メートルもある球体が地上に現われて、付近の犬という犬がほえたてるなかを上昇して行ったというのである。ラジオが聞こえなくなったのもその夜のことで、ベセラアとメラでは一機のUFOが目撃された。ルビノスは信心深い人間で、兄弟二人はジェスイット派の修道院にいる。

一九五四年十二月三日

アスアガ（スペイン、バダホス）

幅十メートルもある四角な物体が着陸し、ふたたび離陸して南の方へ高速で飛び去るのを、十二人の労働者が目撃した。

一九五四年十二月六日（七時二十五分）

イルン（スペイン、ダイブスコア）

レンテリアの自宅からイルンに通動するホアン・マルティネス・ポルトレス（二十六歳）が自転車でロイディ・ベリの近くを通行中、海上を北から南へ輝く丸い物体が降下してくるのを見

た。物体が着陸したので彼はその物体から六メートル以内まで接近して、その長さは三メートルくらい、高さは一メートルくらいだと見当をつけた。物体には四つのひれがあり、その中心には大きなヘッドライトが光っているのが見えた。急にこわくなった彼は急いで立ち去ったが、あとになって父と二人で現場に引き返したところ、地面に物体の痕跡が残っていた。野原には押しつけたようなあとがあり、長さ約十五センチの足跡が残る、ある種の金属標本まで発見された。

一九五四年十二月八日

スエラ（スペイン、サラゴサ）

猟師のミゲル・セビリア・ガルベスはシエラ・デ・アルクビエレの山中で約五十メートル前方に、直径二十メートル、高さ四メートルくらいでアンテナとプロペラを持つ輝く物体が着陸するのを見た。物体のドアが開くと二人の男が意味不明の言葉で話しながら出てきた。二人がまた物体にはいるとドアはしまり、物体はシューッという音とともに非常に高速で垂直上昇してしまった。

一九五四年十二月十九日

カルタヤ（スペイン、ウエルバ）

M・モラル・ベルナルとJ・リケルメ・カマチョの二人はタビロナで、丸

い物体が五十メートルほど前方の地上に着陸しているのを目撃した。二人が近寄ると、物体は騒々しい音を立てて上昇し、ポルトガルの方へ飛び去った。

一九五五年一月五日（十六時）

ガインチュスリケタ、オヤルスン（スペイン、ダイブスコア）

フェリス・ハララガ（二十三歳）は

駅の停車場から、ミゲルとマルティン・アラスピオは国道から、直径二・五メートルもある赤い球体が降下してくるのを見つけた。金属製といった感じで明るく輝いていた。ハララガが近寄ろうとしたところ、もう百メートルというときに物体は上昇して行った。

一九五五年六月（一時）

船員のホアン・アグラ・リベイロは

作業中ゴリラによく似た小人に出会った。その怪人は胸と腕はがっしりしていたが、足はきわめて小さくて、プラスチックの作業服にヘルメットという奇妙なかつこうで、手に何かを持っていた。リベイロのほうは緑色の光線で体中がしびれてしまったが、それがどのくらいの時間続いたのかもわからなかった。

一九五七年八月二十八日（三時）

ナザレ（ポルトガル、エストレマドゥ

ラ)

カルロス・ロハ(十九歳)がガールフレンドと浜辺に出ると、海面から約二百メートルの上空に緑色の光につつまれた黒い物体が浮かんでいた。頭上まで飛んできたその物体は完全な円形で、二人から約百メートル離れた地点で高度五メートルまで降下したときには、上部に小さな塔と三メートル幅の窓がハッキリ見えた。窓からは黄色い光がもれていた。物体は下面から黄緑色の光線を発して地面を照らしながら、さらに地上二メートルまで降下した。物体が飛び去った後も地上には四平方メートル以上の痕跡が残り、小石も植物も消えてなくなっていた。

一九五八年四月三十日(夜)

エル・パドゥル(スペイン、グラナダ)

イグナシオ・ヒメネス・レイバとルクト・サンチェスの二人は、直径約十メートルもある輝く物体が丘の斜面に着陸するのを目撃した。この不思議な物体はまもなく離陸し、信じられないような高速でバサの方に飛び去った。あとに黄色い航跡が残ったという。

一九五八年八月(十九時三十分)

ピコ・ムラセン(スペイン、グラナダ)

モホン・アルト山の頂上で(高度三千メートル、気温は摂氏十一十五度、よく晴れて乾燥した日)三人の登山者が、四キロほど離れた地上に奇妙な物体を発見した。ロケットに似た形で高さは約八メートル、三本の脚でささえられていた。金属製(鋼鉄のような)らしく、光を反射して輝いていたが、十五分後には音もなく離陸し、しだいに加速してアルビカの方角に消えた。

一九五九年七月十四日(〇時)

スエス(スペイン、レリダ)

日時は推定。レリダから二十五キロばかり離れた農場に、後光にかこまれた球体が停止しているのを、アントニオ・ドミンゴ(四十歳)が発見したが、その物体は急に東の方に動き始め、高度約十五メートルの低空飛行で地上を「真昼のように」照らしながら、十秒後には姿を消してしまった。続いて大きな爆発音が聞こえ、目撃者は腰が抜けるほど驚いた。

一九六〇年六月十日(三時三十分)

アルゴス(ポルトガル、アルガルベ)

カルロス・サビノ(二十五歳)と友人のフィリペがペラウス付近を歩いていると、何か光るものが見えた。最初は自動車だろうと思ったが、よく見ると円盤形の物体で強烈な光を放っていた。その周囲に五、六人の人影がある

のに気づいた二人は物かげに身をひそめたが、物体は垂直に離陸しておそろしい高速で飛び去った。サビノが走って自宅に帰ろうとしたとき物体はふたたび姿を現わし、強烈な光線で地上を照らしたのち、またもどこかへ飛び去った。事件後サビノはその恐ろしかった体験を皆に打ち明けたが、彼は評判のよい信頼できる人物である。

一九六一年七月十一日(二十三時)

カンティラナ(スペイン、セビリヤより五十キロのフエンテルエンガ近郊)

全身、ことに頭に、変にビリビリする感じにおそわれて眼をあげたホセ・G・ダルナウデは、南西の低空に輝く円盤を見た。その円盤は高速で回転しながら、白、赤、オレンジ、紫、また白と変光をくりかえした。他の目撃者の話では、円盤は数分後には垂直上昇して消えたという。この間、草むらの虫もすべて声をひそめていた。物体の直径は約五メートルで、皿を二枚合わせにしたような形をして、周辺部はぼんやりかすんで見え、構造物は何も認められなかった。光体が飛んだことは付近の人々も目撃している。

一九六三年十一月

コマルガ(スペイン、タラゴナ)

アンドラのミラドル・ホテルの支配人セスブルグスが夫人を車に乗せて

コマルガからトレデンバラをさして走行中、身長は人間くらいだが頭のない黒い生物が百五十メートル前方の路上を横切るのを目撃した。

一九六四年七月(十一時三十分)

ラス・ローサス(スペイン、マドリッド)

スペインの経済学者バルセロ博士がマドリッドからエル・エスコリアルに向け車を走らせていると、丘の上に金属製の円盤がいるのが見えた。その形は円錐形に近かったという。四キロほど走ってから二人の警官に出合った博士は、一緒に現場まで引き返し、円盤のいた地点に登ってみたところ、地面にも草木にも非常に重いものを押しつけたような痕跡が残っていた。物体は日光を反射してまぶしいほど輝いていたが、幅は約六メートル、高さは約九メートルもあったと思われる。

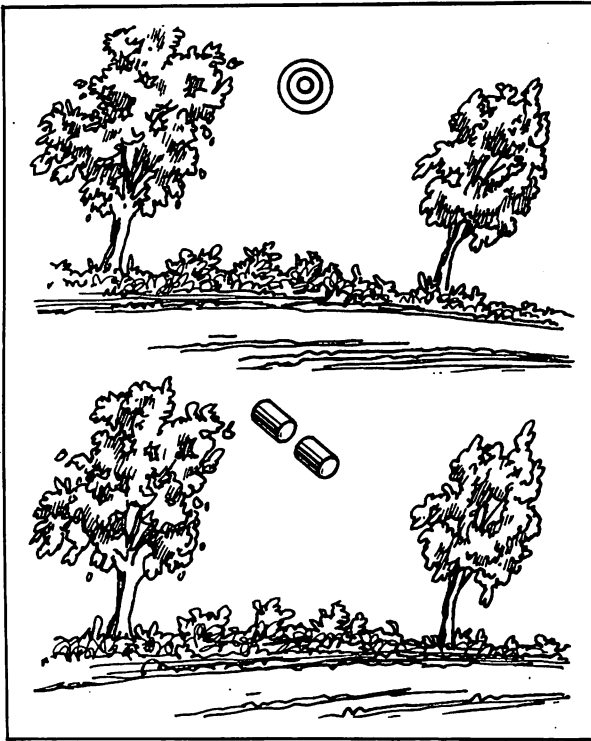
一九六五年三月十三日(早朝)

バルサナ・デ・キロス(アストゥリアス、バハレス付近)

金属製と思われる円形の物体が落下するのを住民たちが目撃した。しかし地上には何の証跡も見つけられなかった。

一九六六年二月六日(二十時)

アルーチェ(スペイン、マドリッド)



●システリャのUFO 1966年6月27日

「エル・レラハル」の地所内に直径十一メートルくらいで三本脚のあるオレンジ色の円盤が着陸し、ふたたび離陸するのを、ホルダン、オルトゥノ、ルイス、ヒメネスの四人が目撃した。

一九六六年五月十六日

コルドバ（スペイン、コルドバ）

マヌエル・エルナンデスが町の近くの畑から帰る途中、百メートルほど前方に円形の物体を発見した。「緑色の小鳥」のような小さな生物がチャリと姿を見せたが、物体はすぐ離陸してしまった。

一九六六年六月二十七日（四時）
システリャ（スペイン、ヘローナ）

ローザ・マツソ、フランシスコ・クローズ、パストル・ビセンテ・アラヒルの三人は、じつと動かない円盤を見て、最初は月かと思った。その円盤は急降下して、境界のハッキリした赤、緑、青色光を発し、「虹よりもうんときれい」でまるで夢を見ているように感じられた。目撃者たちは人工衛星が落下したのかと思ったが、六分後には第二、第三の物体が出現した。今度はどちらも円筒形で、濃い煙の尾をひいていた。三人は口と鼻がカラカラに乾

いたような感じをおぼえたが、この感じは一日中続いた。音は少しも聞こえなかったが、一人は「熱波」を感じたという。数日後の調査で空地に痕跡が発見された。目撃者の一人（フランシスコ）は、その事件いらい眠くてしかたがないということである。

一九六七年七月一日（二十一時）

サンタ・モニカ（スペイン、マドリド）

二十時二十分ごろ、巨大なレンズ形の物体が低空を飛んでいるのをサン・ホセ・デ・バルデラスの住民たちが目撃した。物体の上部には輝く丸屋根があり、下面には記事のようなものが見えて、黄色い光を噴射していた。写真を写した人もあるらしい。これと同じものと思われる物体がレストラン「ラ・ボンデローザ」の近くに着陸したのを、マヌエル・リベロとエウヘニア・アルビオル・デ・アロンゾの二人が目撃した。地上には一分もどまらなかつたが、アルビオル嬢はその物体が円形で窓もついていたことを確認している。地上には痕跡のみならず加工の跡のある奇妙な物質まで残されていた。

一九六七年七月（三時）

バルマ（スペイン、バレアレス）

内庭からさしこむ強烈な光に目をさましたデ・リバス伯爵令嬢は、窓際で

話しあっている二つの人影を見た。二人とも頭と眼だけが異様に大きかった。令嬢は電灯のスイッチをひねったけれども点灯しなかった。彼女がガウンをとり出てもどってきたときには、人影はすでに消え去り、窓のすぐ外に小さな足跡が二つ残っているだけであった。

一九六七年八月（二十一時）

イングリエス（スペイン、ウエスカ）

ペリト工業学校の学生フルナンド・アルカサル・アルバハルがバイクでウエスカとサビナニゴの間を走っていると、頭上約百五十米の上空に満月の倍ほどの大きさの円盤があらわれ、強烈な白光を放射しながら着陸した。その光が三度明滅するのを見て、彼は心の底から恐れた。他にも目撃者があった模様である。

一九六七年九月（二十一時三十分）

サン・フェリウ・デ・コディナス（スペイン、バルセロナ）

ウィーゼンタールとフォントの二人がモイアから自動車を運転してサン・フェリウ・デ・コディナスの四キロ手前まできたとき、身長約六十五センチばかりで肌は明るい緑色の、足は太くて短い生物がヘッドライトの光のなかに現われ、二人は息もとまるほど驚いた。

一九六七年十月一日(二十二時半)
ティビダボ(スペイン、バルセロナ)

通信技師のバレリアーノ・ルイス・
フォンテス(二十八歳)は奇妙な物体

を見た。最初は大型ジープかと思った
が、よく見ると長さは約四・五メー

トル、六つの長方形の窓からは明るい照
明がもれ、上部には地上約三メートル
の高さの塔がそびえていた。地面から
いくらか離れて浮いているように思わ
れる。周囲には黒い服にピカピカのヘ

ルメットをつけた四人の人影が見え、
塔の上では乗員二人が何か機械を操

作していた。下面にもライトが輝いて
いる。約三十分後、下面のライトは消え

て、明るいは窓からもれる光だけと
なった。物体は音もなく約百八十メー

トルの高度まで垂直上昇すると、前後
に二つの黄色いライトと、中央に赤黄

のライトを点灯した。まもなく青緑色
の丸い光が三個輝き始め、するどい金

属音が響くと、物体は海の方へ動き始
めた。見えなくなるまで三秒とかなか

なかった。

一九六七年十一月十七日(十三時)

ブレンシア(スペイン、ビスカヤ)

数隻のボートでコンチャ海域に出漁

していた漁夫約十人が、高速で降下し
てくる暗灰色の長円形の物体を目撃し

た。直径は約十メートルで、時には海
面にふれそうになるほど上下・左右に

うねりながら飛んでいた。物体は二キ
ロとへだたらぬ場所を約九分間飛びま
わって、やがて目にも止まらぬほどの
高速で上昇してしまった。

一九六七年十二月三日

バルセロナ(スペイン、バルセロナ)

四人の乗員の操縦するサボテンのよ
うな形の物体が地面に深い痕跡を残し
たとある婦人が報告してきた。彼女は
それ以上話したくないといっている。

一九六八年

エル・パドゥル(スペイン、グラナ

ダ)

母と一緒に旅行中のスペイン大学職
員(二十八歳)が、低空を東から西に

動いてゆく光る物体を見た。その物体
は、黄色からしだいに青くなり、また

しだいに黄色く変色していた。すこし
追跡してみたが見失って車を止めた二

人の頭上わずか数メートルの低空を突
然、目もくらむほど輝く長円形の物体

が高速で飛びすぎた。その形は上下に
ドームがあり、中間部は回転してい

た。母はノイローゼになって二週間も
寝込んでしまった。車のエンジンもそ

の後二度と動かなくなった。

一九六八年一月五日(八時十五分)

トレラス・デ・フォイ(スペイン、バ

ルセロナ)

ビラフランカ・ポントウス国道でバ
スを待っていたホセ・カルボ・マサゲ
(六十歳)とその連れは、サン・ホァ
ン山の頂上から四十五メートルほど上
空に直径十メートルくらいの円盤形の
物体が浮かんでいるのに気づいた。そ
の物体は明るく黄色に輝いていたが、
曲線をえがいて上昇し、山のむこうへ
姿を消した。

一九六八年一月十八日(十九時半)

ウンブレテ(スペイン、セビリヤ)

あるオリーブ栽培園で、ゴンサレス

・ポルア(五十四歳)とその息子(十
九歳)、それに北へ旅行の途中のカト

リック僧サラボ・ピカルドが、約三・
五キロむこうの上空三百メートルの高

度に長さ約一・二メートルの長円形の
物体を見た。その物体は旋回しながら

近寄って木のかげにかくれたが、ちょ
うどそのとき、近くの農場の家畜に牧

草を集めていたJ・アルコス・ローマ
ン(十三歳)は、上部に丸いものがつ

いたパイのようなオレンジ色の物体が
二・五キロほど離れたところを飛んで

いるのを見た。かなりの低空で、四、
五分後には南東の空に消えたという。

一九六八年三月二十二日(二十時)

カンタンチュ(スペイン、ウエスカ、
モンテ・タバソ近郊)

三百人以上の人たちが雪の上に丸屋

根のような物体がいるのを目撃して、
国境守備隊に届け出たが、調査隊が到
着しないうちに物体は飛び去ってしま
った。雪の上には六角形のとがハッ
キリ残っていた。

一九六八年四月

トサ・デ・マール(スペイン、ヘロー
ナ)

青少年旅行団のバスの運転手が、松
林の上空を降下してくる円形の光体を

目撃した。光体は着陸して、かなり背
の高い男が一人現われた。旅行団の連

中はみな、運転手だけを残して逃げて
しまった。乗員は手に輝くボールをも

って光体の周囲をぐるりとまわってか
らまた内部にはいり、光体は飛び去っ

た。運転手の時計は止まってしまっ
た。

一九六八年六月二十三日(〇時五分)

ビルバオ(スペイン、ビスカヤ)

退役軍人のホセ・レサガ・マルティ
ネス(五十八歳)が夫人と二人車庫か

ら出ると、円形の物体が高速で山の方
へ飛んで行ったが、三百メートルほど

離れたところに着陸して、赤、緑、黄
色の強烈な後光に包まれて輝いてい

た。直径は五メートルほどと見えた。
もう一人の目撃者フロレンティノ・ロ

ペス(二十五歳、学生)の話では、物
体は周囲五十メートル以内のすべてを

明るく照らしだしていたという。彼はこわくなって、こんな物を見たことはすっかり忘れてしまいたいと念じながら一目散に逃げだした。

一九六八年八月(夜)

アルカラ・デ・グアダラ(スペイン、セビリヤ)

ある医師の一家は、巨大な赤味がかったオレンジ色の物体が二夜も続けてまっしぐらに自宅の上空にやってきて、しばらく停止したのち音もなく飛び去るのを目撃した。この医師は匿名を希望している。

一九六八年八月二日(十八時)

バルデマンコ(スペイン、シウダド・レアル、ロス・ラソス)

カンディダ・バルナとR・アリセダ・バルバの二人は、長さ九メートル、幅三メートル、高さ四メートルほどの大きさで窓が二つある長方形の物体が地面すれすれに浮いているのを見た。その物体は音もなく上昇し、三十秒後には南東の地平線の彼方に姿を消した。彼女たちは恐ろしくてとても近寄ってみるどころではなかった。物体の前部には二本の「脚」があり、これが着陸装置の役を果たしていた。

一九六八年八月二日(二十三時四十四分)

モンテ・ガリカント(スペイン、タラゴナ、ロス・カステイレホス)

ペドロ・ブランカフォルト・ブラデバルは一人の兵隊が大声で注意したので振り向くと、山腹の木立すれすれに赤く光る輪郭のハッキリした不思議な物体が飛んでいるのが見えた。その物体は振子のように往復運動をくりかえし、物体のあちこちが十五秒から二十秒おきに暗くなった。八分あまり後にはどこかへ飛び去ったが、彼は兵舎警備の任務についていたので、その物体だけに注意しているわけにもゆかなかったのである。

一九六八年八月十五日(〇時三十分)

ビラベルデ・ブレネス(スペイン、セビリヤから二十キロ)

ビラベルデからブレネスに行く途中、目撃者の車のヘッドライトが、バスでもある長方形の物体を照らした。その物体は、丸窓だけがぼんやり明るく見えた。妻と息子がこねがってはいけなかった彼は何もいかなかったが、五歳になる息子もその物体をみつめて、「ごらん、ごらん、バスが事故を起こしたよ!」といった。目撃者も引き返してよく見ようと思ったが、妻の反対にあってそのまま走りさった。

一九六八年八月十六日(六時)

ティビサ(スペイン、タラゴナ、シエラ・デ・アルモス)

ティビサから七キロほどのところに住むマテウという男が家畜に飼料をやりに起き出ると、一キロほどむこうに車の窓ガラスの反射のような光が見えた。車がエンコしていると思った彼は妻に声をかけておいて、犬と一緒にそのほうへ行ってみた。ところが車と想ったのは半球形の物体で、地上二メートルの高さで静止し、強烈な光を放射していた。百メートルほどむこうから二人の「生物」が物体のほうへ走ってくるのが見えた。タコそっくりで身長は約一メートル、四本か五本の足があり、皮膚の色はうすいがまったく胸が悪くなりそうな生物だった。物体が停止していた場所の草は、かなりの広さにわたって焼けこげており、少し離れてやはり焼けこげた地面が二カ所発見された。この方はかなり以前に焼けたことは明らかであった。物体の停止していた地点に近寄ると時計が止まることが三度も起こった。ウィーンのハンス・フォルカート夫妻は付近でキャンブしていたおかげで地面の焼けこげも見たし、時計が止まることも体験した。

一九六八年八月二十八日(十九時三十分)

ウセロ(スペイン、ソリア)

ペドロ・アイラガスは畑から帰る途中七色に輝く太陽のように明るい光を目撃して、聖母マリアが出現するのではないかと思った。物体は降下して奇妙な運動をしながら、一条の光線で地上のあちこちを照らした。ペドロはその光をまともに受けて目がくらんだうえ、髪の毛は逆立ち、強い吸引力を感じて持っていたピンを落としてしまった。物体の動きはしだいに静まり、回転しながら降下して、回転が止まると着陸した。皿を二枚裏がえしに重ねたような形で、上部には大きい窓が四つ、小さな窓も四つあり、内部が明るく照明されているのが見えた。中心部から数個の黒い小さな物体が飛び出したが、一分後にはふたたび機内に帰って行った。やがて物体は強力な光線を上空に放射しながら離陸し、アッという間に姿を消した。目撃時間は七分間くらいだった。D・L・アルナンドと一人の僧侶もこの物体が飛行しているのを見た。

一九六八年八月二十九日(二十一時三十分)

サン・サドゥルニ・デ・オソモルト(スペイン、バルセロナ)

五十四才のソレ夫人をはじめ六人の男女がサン・イラリオ街道で二百メートル前方の地上二メートルくらいの高さには丸い物体が浮かんでいるのを目撃

した。その物体は金色に輝きながら紙風船のように上昇して、強烈な光を放射しながら西の空に消えた。十五秒間ぐらい見えていたという。

一九六八年八月二十九日(二十一時四十分)

カストレハナ(スペイン、ビスカヤ)

数名の目撃者の話によると、丸屋根らしいもののある四角な物体が明るく輝きながらコベタス山の上空を飛んでいたが、一分半後には見えなくなりました。

一九六八年八月三十日

コロト(スペイン、オビエドから五キロ)

きわめて明るく輝く洋傘のような物体が二人の男の頭上を飛んだ。二人とも地面に押し倒されそうな気分を感じ、一人はノイローゼになってしまった。二人とも嘲笑を受けるのがこわくて匿名を望んでいる。

一九六八年八月三十一日(二十時)

サントイボンセ(スペイン、セビリヤから十四キロ)

少女四人(四歳、五歳、五歳、八歳)がさまざまな色光を放つ奇妙な物体を見た。着陸地点にも痕跡が残っていた。現地におもむいた調査員たちは少女たちのうち三人に会うことができ

たが、物体は四形で緑と白の色光を発し、少女たちから五十メートルほど離れた村はずれの二本の木の間に着陸したという。付近には高圧線が通っている。二個の黒い車輪をもったその物体が着陸すると、機内から白いシャツと黒いズボンを身につけた背の高い男が一人現われた。五歳の少女の一人はそれほど背が高くなかったといっている。八才の少女の話では、その物体には、緑色の光が側面に数個、上部に白い光が一個、それに窓が二つついていたという。男は物体より背が低くて、シャツには茶色と黒の四角な模様があり、ズボンは黒く、別に常人と異なる点は認められなかった。少女たちがあまり興奮しているので両親たちも着陸地点まで出かけてみたが、そこには自転車に乗った男が一人じっとしているだけだった。十分後にはその男も自転車を百八十度グルリとまわして走り去ってしまった。物体が飛び去るところはだれも目撃していない。

一九六八年八月三十一日(二十時三十分)

ウンブレテ(スペイン、セビリヤ)

ウンブレテの町はずれで、コンスエロ・ペレホン・ガルシア(十六歳)、イサベル・マシアス(十六歳)、マノリ・ルナル・フロレス(五歳)の三人は、地上三メートルの高さで何か光るものが近づいてくるのに驚いて逃げ

だした。その数分前には、五キロほど離れたボルロスの町で自転車に乗った二人の男が、直径一・五メートル、上部ほど細くなった光体が地上二メートルの高さから上昇し、ウンブレテの方に飛び去るのを目撃したばかりだった。

一九六八年九月

バルベルデ・デ・レガネス(スペイン、バダホス)

二十八歳のS・G・Mがバイクで帰宅の途中、黄色に輝く丸い光が地上数メートルの高さに出現して、濃い青色に変化して彼の頭上を五分間にわたって飛び続けた。彼は気違いと思われたくなかったので、その体験をすぐに、人に打ち明けないでいた。

一九六八年九月(二十二時)

シェラ・ネバダ(スペイン、グラナダ)

四人家族の乗った車が故障して皆が路上に降り立ったとき、約百八十メートル前方の地上に不思議な物体が浮かんで、舞い落ちる木の葉のように揺れ動いていた。最初に発見した夫人が大声で注意したので夫と子供たちも、その物体が離陸して飛び去るのを見ることができた。

一九六八年九月一日(一時)

バレンサ(スペイン、バルマ)

ある四人家族がバレンサさしてドライブ中、建築材料工場の上空を黄色い球体が飛んでいるのを目撃したが、その物体はやはり黄色い光の輪につつまれて降下し、地上の木々を約十五秒間明るく照らしだした。その地点はこの付近でただ一カ所泉が湧き出ている場所である。

一九七〇年八月五日(二十二時四十五分)

カサラ・デ・ラ・シェラ(スペイン、セビリヤ)

犬二匹をつれた四人の男が十メートルという近距離に何ともえたいの知れない物体を見た。それは長さ二メートル、幅一メートルほどの長方形で、まぶしく輝いてはいたが厚さというものがまったくないように思われた。その長方形はバスの正面に突然現われ、数分後に痕跡も残さず音も立てずに消えた。目撃者の一人マヌエル・ロドリゲス・カンボスは物体に発砲してやろうかと思ったほどだった。犬たちはとてもおびえているように見えた。現地はエル・ビスカイノ農場から約三・五キロ、パンタノ・エル・ビンタド大貯水池からは約七キロの地点である。

一九七〇年八月十日(〇時三十分)

アスナルカサル・ピラス(スペイン、

セビリヤ

ホセ・サンチェス・イダルゴが妻と子供二人をつれてトーレ・ラ・イゲラから帰る途中、道の右側に白い霧のような物体がいたのを見た。その物体は地上二メートルの高さに浮いた濃い雲のように見えた。車を止めて徒歩で近づくと、物体は飛び去った。しばらくしてふたたび現れた物体は何度も車の上を飛びすぎ、そのたびにヘッドライトが暗くなった。

一九六八年九月一日(二十三日)

ノレナ(スペイン、オビエド)

工場主のホセ・アントニオ・ロドリゲスは、ノレナの町を出てオビエドの方角に八百メートルほど進んだとき、四百メートルばかり前方から強烈な光が近づいてくるのを見た。その光を放射しているのは、高さ一メートル、幅五十センチほどの大きさの、卵を立てたような黄色のいかにも固そうな物体で、道路の左側の地上約六メートルの高さを飛びでいた。物体はいきなり道路中央に飛びだし(目撃者は死ぬほど驚いた)、また左側に飛びかえったが、一分もたたぬうちに消滅した。

一九六八年九月七日(二十二時四十五分)

アリオンダス(スペイン、オビエド)

目撃者はアリオンダスから約四キロ

の、カリオとトペの中間地点にいた。そのとき、ノレナのように光るパイプが現われた。幅四・五メートルほどの長方形で、上部はすこし丸くなっており、今にも着陸しそうに見えた。一分後には姿を消したが、青白い光を放射して冷蔵庫のような低い音を立てたのである。

一九六八年九月十一日(二十三日四十五分)

サン・マルティン・デ・トウス(スペイン、バルセロナ)

目撃者(匿名希望)はある晴れた夜バルセロナからコロマ・デ・ケラルトへの山道をドライブしていた。突然、丸屋根のような形の黄色い光が現われ、丘の上の松林を明々と照らし出した。直線道路に出たので物体がよく見えるようになったとき、彼は自分で調べてやろうと思った。道路から五十メートルくらい上がると、金属のようにキラキラ光を反射する四つの人影(または物体)が見えた。身長は約八十センチだった。その人影が巨大な卵形の物体に乗りこむと、物体はさまざまな色光と耳をつんざくような轟音を発して上昇し、たちまちはるか彼方に見えなくなった。

一九六八年九月二十一日(早朝)

ラ・エスカラ(スペイン、ヘロナ)

ホアン・バレスタ(漁夫、五十二歳)はカルゴル島で十メートルもはなれていないところに二人の黄色い顔をした奇妙な人間を見た。プイによく似た形の物体から現われた二人は、体にビッターリあった黒い服を着て、黄色い恐ろしい顔をしていた。バレスタは力のかぎりボートをこいで命からがら本土に逃げ帰ると、居酒屋にかけこんで皆に報告した。調査隊が島に到着したときはもう何も残っていなかった。

一九六八年九月二十一日(二時)

ラ・ラゴスタ(スペイン、バルセロナ)

バルセロナ「ブイセルダ街道のグレベトンク工場の前であるトラック運転手が、卵を立てたような光体を目撃した。光体のそばには小さな人間のような生物が見えた。目撃者は車を止めようとせす村まで走りもどって、ガソリン・スタンドで自分の体験を報告した。

一九六八年九月二十四日(二十一時)

セデイラ(スペイン、ラ・コルナ)

ピネイロに住む五十六歳の婦人がセデイラにくる途中明るい光を目撃した。それからしばらくして彼女は、前方の路上を背の高い人が二人歩いてくるのに気づいた。二人の顔にはさまざまな色に変化する光が輝いていた。こ

わくなった婦人は近くの家に逃げこみ、船乗りであるその家の主人も様子を見に出たが、彼には何も怪しいものは見えなかった。しかし、怪人がいたあたりの地面には直径二メートルほどの焼けこげたあとが発見された。

一九六八年十月(二十一時)

アクラ(スペイン、グラナダ)

ホアン・マルドナド・ガルシアが家族四人を車に同乗させて、グラナダ「マラガ国道に出ようとしてアクラから二キロほど手前まできたとき、緑、白、青、赤と変化する強烈な光条を発する直径四メートルばかりの物体三個が編隊を組んで進んでくるのを見た。物体は彼らの近くに着陸すると光も消えて黒々とした色になった。青くなった一家はグラナダまで車を飛ばして、ローカル新聞に報告した。この事件は翌日の新聞に簡単に報道された。目撃者はみな信用のおける人たちである。

一九六八年十月十一日

セツト・カセス(スペイン、ヘロナ)

ラ・ベドレラ地区に一個の物体が着陸するのを登山者たちが目撃した。物体からは二つの小さな人影が現われたという。しかし登山者たちは偽名を使用したらしく、調査官も目撃者をつきとめることができなかった。

一九六八年十月十四日（四時）
サフラ（スペイン、バダホス）

直径十メートルもある半球形の赤い物体を五人の男たちが目撃した。その物体は両側から青い炎を噴射し、パッと姿を消してはまた別の場所に現われた。

一九六八年十月十五日（二十一時）
サンルカル・デ・バラメダ（スペイン、カディス）

カンディダ・スマリバという九歳の少女が「大きなトマトのような、赤く輝く光体を目撃し、爆音をきいた。光体はやがて上昇して見えなくなった。地面に痕跡が残されているのを民間警備隊が発見した。

一九六八年十月十七日（二十時）
セビリヤ（スペイン）

光るものが青、赤、オレンジと変光しながら降下して木のかげに消えるのを、サルードという婦人をはじめ四人の人たちが目撃した。調査員が来たが何の痕跡も見できなかった。

一九六八年十月十九日（四時四十五分）

サンタ・エウヘニア・デ・ベルガ（スペイン、バルセロナ）

数人の婦人がビクの工場に出動する途中、白い光球が道路の左側三十メー

トルの地点に着陸した。彼女らがそのことを報告すると何台かの車が現場にかけつけた。現場には直径約二メートルの円形の焼けあとが残っていたし、ある男はそのころ火の球がモントセニールの方角に飛んでゆくのを目撃していた。

一九六八年十月二十四日（十二時）
カリダ（スペイン、カステロン）

日付は推定。ビセンテ・ランブラが二人の息子と共に畑で仕事中、白い球体が地上二メートルほどの高さを飛んでいるのを見た。物体はやがて垂直に急上昇し、だれかが叫び声をあげた。その物体はまた降下してきて目撃者たちから五十メートルほど離れた場所に着陸したが、ふたたび離陸すると彼らの頭上をかすめて北の空に消えた。目撃者の一人は「不吉なものを見た」と感じたという。

一九六八年十一月二日（四時三十五分）

ビリャレアル・デ・エプロ（スペイン、サラゴサ）

フランシスコ・マルティ・グアストロという兵士が四人の友人とサラゴサへドライブ中、大きな黄色い円盤が出現した。皆太陽が昇ったのだと思ったが、よく考えてみるとその円盤が浮かんでいるのは西の空であった。その物

体は彼らの左側に着陸した。彼らが物体から五百メートルの地点にまで接近すると、ヘッドライトは消えてエンジンも止まってしまった。見た感じでは金属製らしく、屋内体育館ほどに大きく見えた。三分後には音もなく上昇をはじめ、急に加速して姿を消し、自動車もふたたび動きはじめた。空は曇っていたが、近くには高圧線もない。この事件はサラゴサの軍当局にも報告された。

一九六八年十一月十日（十七時四十分）

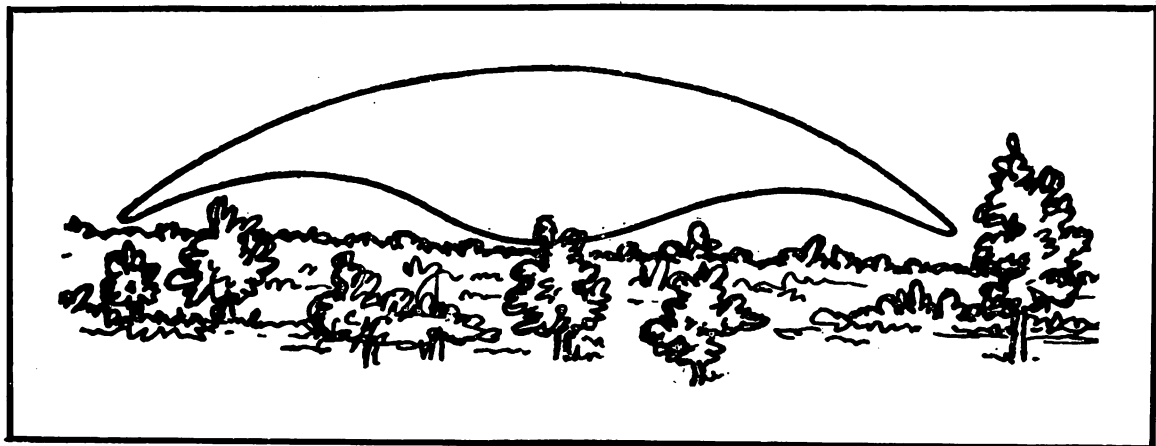
プエルト・デ・エスパダ（スペイン、カステロン）

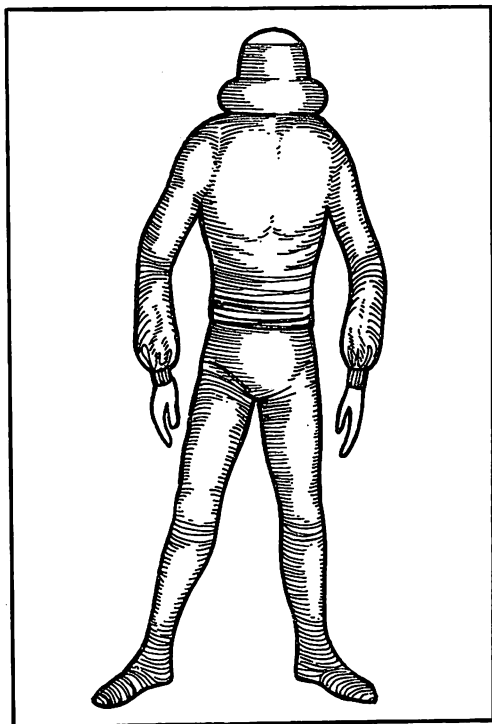
電話局長のマヌエル・バストル・カメナは、強力な青い光がすみわたった寒空を背景に松林のすぐ上空で輝いているのを目撃した。夫人も息子も一緒だった。なぜそんなところにそのような光が現われたのか、だれにもわからなかった。

一九六八年十一月十四日（二十二時四十五分）

サフラ（スペイン、バダホ

●ビリャレアルのUFO 1968年11月2日





●サフラの怪人 1968年11月14日

ス)

サフラ・ウエルバ国道で、目撃者の前方三十メートルの道路わきに、身長約二メートルもある人影がじっと立っていた。腕は並はずれて長く、衣服は緑色の燐光を発していた。黒い顔には目も口もなかった。

一九六八年十一月二十二日(十九時三十分)

ポアディリヤ・デル・カミノ(スペイン、バレンシア)

五十六歳になるトラクター運転手のメレシオ・ペレス・マンリケが仕事から帰る途中、何か光るものを見たので、トラックが故障しているのだと思い、手伝ってやろうと近寄ったところ

が、光の群は上昇してトラクターの周囲を飛び始めた。直径約三十センチの白い光が六個、直径約一メートルの赤い光が一個、一時間にわたって彼から五メートルほど離れてついできたのである。やっとある村にたどりついた彼は大声で村人を呼び集めた。村人たちが出てくると、光の群は上昇して消えた。

一九六八年十一月三十日

バレンシア(スペイン、バレンシア)

地元では名の売れた工場主が十メートルほどむこうに不思議な物体が着陸しているのを見た。驚いた彼はよく観察もせず車を飛ばして逃げたが、ABC放送は次のように述べている。「空

飛ぶ円盤を目撃したという報告が、ドライバーたちから殺到しています。ほとんどがバレンシア地方の南部での出来事です」工場主は嘲笑されるのがこわいので、匿名を希望している。

一九六八年十二月十日

オレロス・デ・ビスエルガ(スペイン、バレンシア)

ホセ・ディエス・マルティンはアギラルの近くで正体不明の物体が道路わきに着陸しているのを見た。その物体は三方にとがった星のような形をしており、黄と緑の強烈な光を放って輝いていた。マルティンは近くのバーにいた人を呼び集め、三十メートルほど離れたところから皆でながめていたが、彼らが近寄ろうとすると物体は消えてしまった。

一九六八年十二月三十一日(八時十五分)

ユステ(スペイン、カセレス)

生まれて以来ずっとユステに住んでいる「典型的なスペイン農夫」のF・モレノがラバに乗って畑に行こうとしたとき、クルス・ベルデ僧院から三百メートルも離れていない場所で、まぶしく光る三機編隊の円盤に追いかけられた。この円盤は数個ずつに分裂して地上をグルグル旋回しはじめ、あぐくの果てにガルガンタ・デ・ラ・オラの

方角へ飛び去った。あとになって彼が話したところでは、最初彼は三筋の雲を見て、飛行機雲だと思った。ところがその雲はバラバラに分解して、彼はたちまち数知れぬ七色の小さな光球にとりかこまれてしまったのである。光球の色は赤が多かった。

一九六九年一月(夜)

ヒネス・セビリヤ(スペイン、セビリヤ)

二人の銀行員が道ばたで身長三メートルもありそうな二本足の緑色の生物を目撃した。走行中の車から見たのだが、二人は恐怖でノイローゼになり、だれにもこの体験を話そうとはしない。二人とも評判のよい人である。

一九六九年一月二日(二十時)

アルバセーテ(スペイン、アルバセーテ)

イサイアス・ナバロ・セラノとフランシスコ・モルシロ・マルティンの二人は、四角な物体が地上すれすれの高さで黄色い強烈な光を放射しているのを見た。物体は垂直に上昇して、旋回すると東へ飛び去った。

一九六九年一月六日(二十一時)

ポンテホス(スペイン、サンタンデル)

ペドロサ療養所と道路をへだてて向

きあってゐる小さなカフェの台所に四人の男がいた。彼らは大きな窓越しに三十メートルほど離れた地上五メートルの高さに長方形の黄色の光体が浮かんでいるのを見た。その下では一つの人影が行ったり来たりしているのがハッキリ見えた。やがてもう何人かの人影が現われて行ったり来たりし始めたが、そのうちに一カ所に集まったかと思ふと消えてしまった。光も消えたが、皿にどんぶりを伏せたような形の巨大な灰色の物体の輪郭だけはなお見えていた。その物体は軽々と上昇し、草や木を明るく照らしだしてから、どこかへ飛び去った。

一九六九年一月十五日

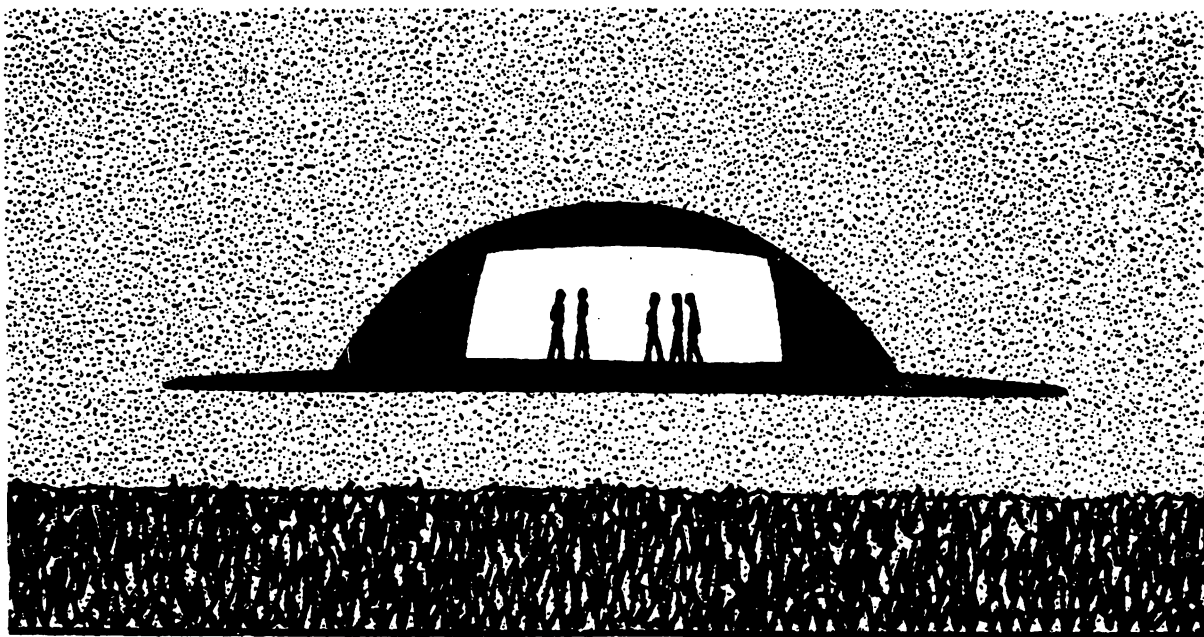
ピラフランカ・デ・ロス・バロス（スペイン、バダホス）

イエズス会神学校の二つの学級の学生が一人の巨人を見て、恐怖のあまり逃げだした。あとになって現場にもどった彼らは不思議な痕跡が残されているのを発見した。この事件は民間警備隊にも報告されたが、イエズス会の幹部たちは翌日になってからあれは学生たちの幻覚だったとして事件を葬り去った。

一九六九年一月十六日（夜ふけ）

ラス・パホノサス（スペイン、セビリヤ）

●ポンテホスの円盤と人影 1969年1月6日



ある男が車でエクストレマドゥラから帰る途中光る物を見つけ、車を止めてその方に歩み寄った。二百メートルほど手前までくると、その光は長方形の物体であることがわかった。物体の前には何人かの人影が見えた。なお近づくと一匹の犬が物体をにらみながら毛をさかだてて低くうなっていた。こわくなった目撃者はそのまま逃げだした。数日後その話を聞いた友人の機械技師が目撃者と共に現場に出かけたところ、地上には一・八メートルずつ離れた三個の痕跡が発見された。

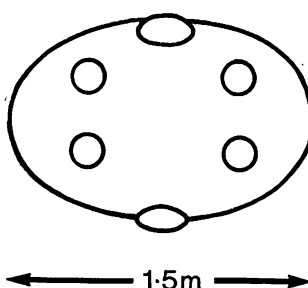
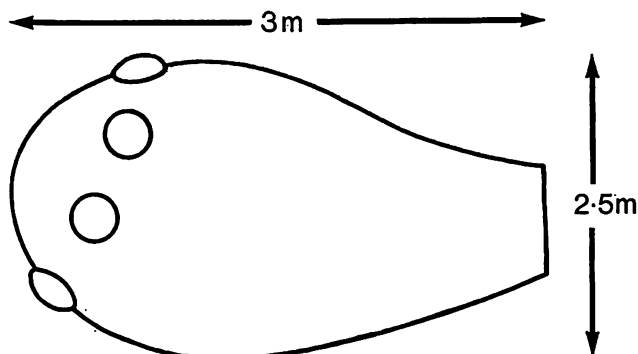
一九六九年一月二十八日（二十二時三十分）

サナルカル・デ・バラメダ（スペイン、カディス）

生まれて以来当地に住んでいる守衛のマヌエル・エスピナル・アニロ（四十一歳）は、強い光を見て道に迷った自動車だろうと思ったが、つづいて鍋のような形の物体が北から南へ音もなく飛ぶのを見た。その物体は地上を屋のように明るく照らしだした。馬は驚いたようなそぶりも見せなかったが、アニロは目がくらんで屋内に逃げこみ、恐怖がしずまるまで外に出ようとはしなかった。

一九六九年一月二十九日（十時）

マタデベラ（スペイン、バルセロナ、



●マタデベラUFO 1969年1月29日

サバデルから数キロ)

ある老婦人が丘陵地帯を歩いていると大きな音がした。見ると奇妙な形の飛行物体が高圧線に衝突しそうになって急旋回したところだった。物体は長さ三メートル、幅二・五メートル、高さ一・五メートルくらいのもので、金属製らしく、明るい光がたくさんついていた。タラサのほうへ飛び去ったが、着陸した跡ではないかと思われるような凹みが地面に残っていた。

一九六九年二月二日(二十一時)

アロチェ(スペイン、ウエルバ)

アロチェから七キロほど離れたバルデフアネガスで、輝く物体が地上一・五メートルの高さで静止しているのを、バスケス一家を含め七人もの人が目撃した。形は円形で大きさは自動車のタイヤくらいで、強烈な黄色光線を放っていた。彼らは近寄る勇氣はともななかったが、二時間ばかりながめていた。地面には何の痕跡も残ってはいなかった。この物体が出現する数分前には一個の火球があたりを昼のように照らして飛んだのを、付近の人々が目

撃している。

一九六九年二月二十八日(四時)

ミアハダス(スペイン、カセレス)

カセレス地方をおそった地震と同じ頃、あるトラック運転手とその助手が、不思議な航空機と発光する背の高いロボット五人を見た。わけのわからぬ恐怖を感じた二人は全速力で逃げた。

一九六九年三月六日

ブント(スペイン、アリカンテ)

三機のUFOがカベソ・ドール山に着陸するのを見たたん、ホアン・アレナス・ロベスの車の電気系統も故障してしまった。ロベス夫妻は動かぬ車の中にすわったまま、UFOが山腹を明々と照らすのを三分間も見守っていなければならなかった。

一九六九年三月九日(二十二時)

モンレアル・デ・カンポ(スペイン、テルエル)

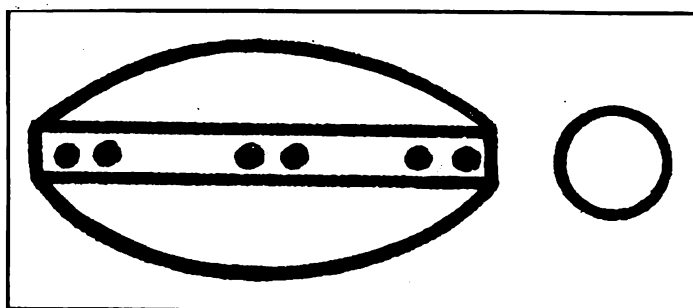
医学を勉強中のミラ夫妻がバレンシアからサラゴサへドライブの途中出来事である。二人は二キロほどむこうの千五百メートル上空に一個の白い光体の時速八十キロぐらいのスピードで道路沿いに飛んでいるのに気づいた。何かの錯覚かと思った二人は、確かめるために二度も停車したのだが、やがて

光体は垂直降下してさまざまな色に輝きながら着陸した。そのそばに、少し小さい白い円盤が見えた。二人は走り続けたが、しばらくしてまたもや同じような物体が飛んでいるのを見た。

一九六九年三月十二日(夜おそく)

メリダ(スペイン、バダホス)

アルメンドラレホとメリダ間の道路上で、太陽のように明るく輝く丸い物体が五人家族の自動車に衝突しそうな



●モンレアル・デ・カンポのUFO 1969年3月9日

勢いがかすめ去った。ヘッドライトはその瞬間消えた。物体は、彼らがメリダに到着するまで二十分も後からついてきて、車の上空を低く飛んだ。テレビの画面に原因不明の妨害がはいるので外に出たマカロ嬢が共同墓地の上空に見たのも同じ物体と思われる。彼女の話では、その物体はソンプレロ・ハットそっくりの形をしていたという。

一九六九年三月二十五日（二十二時三十分）

レネド・デ・バレタビア（スペイン、バレンシア）

八十歳の老婦人が、中心から強い赤光を発する物体を目撃した。高度は約五十メートルだったが、赤い光はまもなく降下して着陸し、ふたたび本体に帰って行った。本体は白く、形は四角だった。その物体は数日後ふたたび現われ、四月十二日にも出現した。彼女は何かの極秘実験を見してしまったのだと思ひこんで、軍隊と無用のトラブルを起さぬため名前は伏せておいてほしいと希望している。

一九六九年五月十一日

サンタ・カタリナ・デ・ソモサ（スペイン、レオン）

アストルガのタクシー運転手ブリミティボ・ゴンサレス・ロペスは、路上にオレンジのような形の物体を見た。

明るく輝いて、真赤に焼けた三角形の鉄板のようなものが上部についていた。ゴンサレスは友人のサカリアス・フルナンデス夫妻を徒歩で呼びに行き、三人一緒にこの物体を見物したのである。

一九六九年七月四日（十九時）

リバロハ・デ・エプロ（スペイン、タラゴナ）

自動車旅行中の五人の家族が、不思議な物体が信じられぬほどの高速で降下し、着陸寸前にふたたび上昇するのを目撃した。この輝く光球はぐんぐん上昇して見えなくなってしまうた。

一九六九年七月六日（二十二時五十分）

アラセナ（スペイン、ウエルバ）

セビリヤの上流婦人三人と、その家から七十メートルほど離れた家に住む小間使い二人は、停電のあと炎の尾をひいた光球が現われるのを見た。二人の小間使いの話では、テレビの画面が乱れると間もなく停電し、その停電は約十分間続いた。小間使いたちは上流婦人らから呼び出しを受けたので車で出かけようとしたが、ちょうどそのとき、強烈な白光を発するおわん形の物体が地平線上に現われ、音もなくゆっくりと降下してきた。上流婦人の一人は停電のさい階上で大きな音がしたの

を聞き、体に電撃を感じた。一緒になった五人は、明るい光が道路の上を飛んでいるのを見た。鉛筆のような青い光の尾をひいたその光体は二十分間も飛びまわり、接近したときには五人とも目がくらんだ。

一九六九年八月二十五日（二時）

アイトナ（スペイン、レリダ）

ロカ夫妻と一組の夫婦が、二メートルに四メートルくらいの大ささの壁のような物体が路上で白く輝いているのを見た。彼らが車を近づけるとその壁のような物体は消え、二度と現われなかった。

一九六九年九月十一日（十八時）

モロン・デ・ラ・フロンテラ（スペイン、セビリヤ）

セビリヤの北東二キロのエル・ソリチュ・バボでオリブ園を経営しているフランシスコ・ゴルディオ・モンタノは、東の方にえたいの知れぬ光を見た。地上で「丸いもの」が光っている。彼は手を眼の上にかざして小さい丘のすそをまわり、怪光がいるはずの場所から十五メートルの地点まで接近した。ところが、怪光はもうそこになかった。彼は勇気をふるい起こして怪光のいた場所まで進もうとしたが、何ともいえない悪臭のため立ち止まってしまった。眼も喉も痛み始め、呼吸

も困難になってきた彼はこわくなくて、帽子も道具も置きざりにしたまま逃げだした。物笑いの種になることを心配した彼は、この体験を六カ月も内緒にしていた。モンタノは地方では名士の一人で、息子もちょっとした事業家である。

一九六九年十月十一日（八時二十五分）

カボ・コベ（スペイン、ムルシア）

フランシスコ・シモ所有の漁船「アグスティン・ロハス」がカボ・コベの沖合五キロの海上で操業中、漁網が何物かにひっかかって、どうしても離せなくなった。スペイン海軍は警戒態勢にはいり、十三日には、その地点を明示するためにブイを使用したこと、ペリ提督がヘリコプター母艦「デダロ」上にあつてこの作戦に従事する駆逐艦「ホルヘ・ホアン」、「バルデス」、潜水艦S十三号と一機の軍艦の指揮をとっていることを発表した。

一九六九年十一月二十五日（二十二時）

エスバルサ（スペイン、パンプロナ）

パンプロナから八キロ、エスバルサとアルレグイの中間にあるラス・アルビアスで、博士号をもつある技師がボタサス・デ・ナバラ鋳業所さして車を走らせていた。そのとき、直径約八メ

ートル、厚さ二メートルの、黄色の燐光を発するレンズ形の物体が現われた。ふちのとがった、いかにも金属製といった感じのその物体は、着陸装置を出して二百メートルほど前方に着陸していた。しかし、その物体はものすごい高速で離陸したので、彼はよく観察するために車のスピードを遅くした。その間何の物音もしなかった。物体が着陸していた場所は泉の近くで、地上の痕跡は念入りに調査されたが、現場の雑草は炭化していた。

一九六九年十一月二十九日（七時十分）

ヒネス（スペイン、セビリヤ）

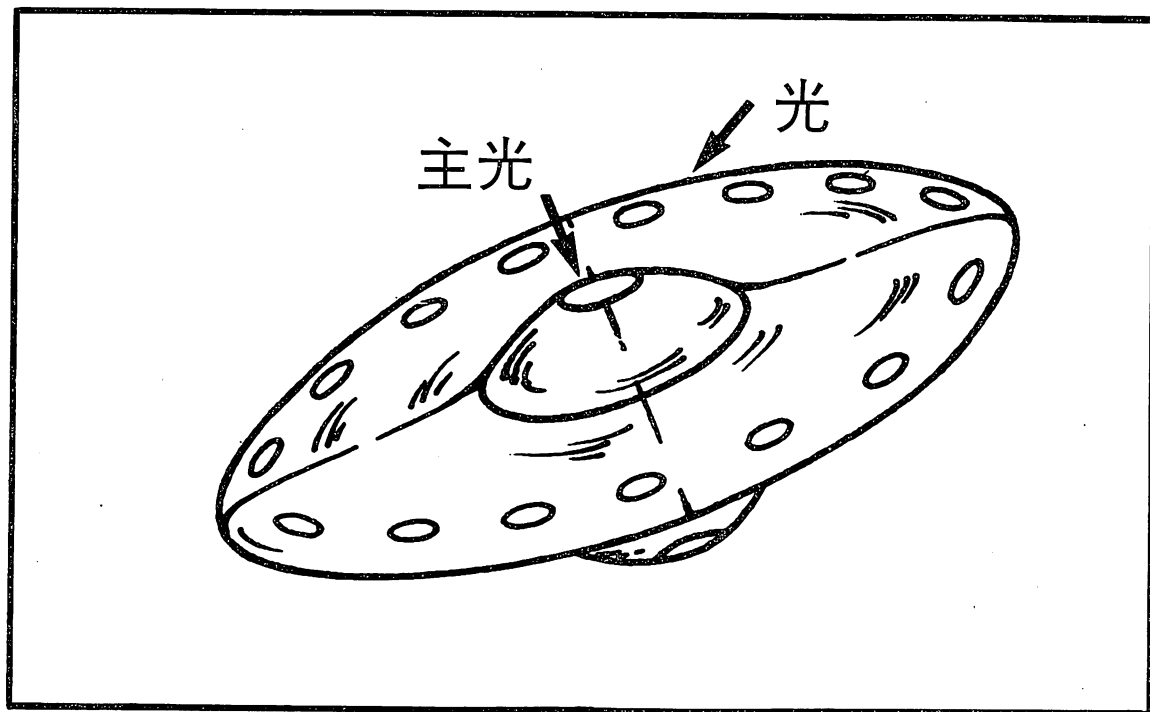
ラファエル・フリオ・ヒメネス（三十歳）とマヌエル・インファンテ・ペレス（十八歳）の二人がウンブレラからセビリヤさしてドライブしていた。エスバルティナスを二キロほどすぎた頃、奇妙な物体が飛行機くらいの速度で木立すれすれに飛んでいるのを見た。皿を二枚裏返しに合わせたような形で、周囲には赤い光や黄色い光が十二個も並んでおり、中央には丸屋根があつて青い光が明滅していた。

一九七〇年一月（四時）

ビートル（スペイン、アルメリア）

二十三歳になるある運転手が兵役に服することとなり、アルバレス・デ・

●ヒネスの円盤 1969年11月29日



ソトマヨルの兵營で歩哨に立っている
と、五百メートルほど前方の地上に光
るものが見えた。周囲は緑色がかつて
いるが、だいたい黄色っぽく、輪郭は
ハッキリしていた。その光はまっすぐ
東から西に移動して、三分後には木
のかげにかくれて見えなくなった。そ
のときの高度は約十メートルと推定され
た。

一九七〇年五月十一日（三時）

モロン・デ・ラ・フロンテラ（スベ
イン、セビリヤ）

五月十一日早朝、前日はなかったは
ずの痕跡が地上に残っているのが発見
された。発見者のゴルディオオは民間
警備隊に通報し、そのことはさらに上
層部に報告された。警察は現場を常時
（昼夜を通して）監視下においた。
地面も樹木も輻射熱で焼けこげたよう
になっていたが、放射能は検出されて
いない。付近のマイレナ・デ・アルコ
ルには（飛行中の物体の）目撃者もい
るということである。

増野 一郎訳

●世にも異常なコンタクト事件

円盤の中に連れこまれた男

(完)

南山 宏

地球人の時間観念は誤っているという

円盤の形はどこから見ても、典型的な円盤スタイルであった。ただ後尾から小さなアンテナが突き出しているところが、特に目をひいた。用途は教えてくれなかったが、むしろ一種の通信装置だろう、とシェアラは推測した。

彼がきよろししていると、「キャプテン（隊長）」が振り向いて、いま何時かと訊ねた。彼は腕時計を円盤の放つ光にかざしてみた。朝の一時四十七分だ。彼がそう教えると、隊長はふたたび訊ねた。

「君たちは、どんなタイプの時間を使っているのかね？」

奇妙な質問だったが、多分地球人がどのようにして時間を測るのか知りたいのだろう、と考えて、彼は日や年月のことを説明してやった。すると隊長はこう答えたのだ。

「君たちは時間の正しい扱い方を知るべきだ」

「それはどういう意味です？」

隊長の説明によると、こうだった。

時間というのは存在しない。彼らの仲間も、時間を加速、減速、停止など自在に歪める能力をもっている。われわれ人類も、そうすることによって、時間に関してもっている固定観念を意識の上から払拭する必要がある。たとえば、赤ん坊や幼児は時間の観念というものをもたない。彼らには一分が一時間にもなる。一日が永遠にも思える。実際その通りなのだ。地球人は成長するにつれて、時間の観念を意識するようになり、幼児の純粹さを失う。だから、彼らは地球に何度も来ているが、地球人は彼らを訪れることができない、というのだ。

「なぜわれわれは貴方がたを訪れることができないのです？」

「君たちの時間観念が邪魔するからだ」

「貴方がたの船はどの位の速さで飛ぶのです？」

「？」

「われわれの船は光速より早い。地球の大気の外へ出てから最高速度を出すのだ」

「今は何をやっているんです？」

円盤の中へはいる

この時間に、隊長はシェアラの肩に片手をおくと、じっと目をのぞきこんだ。「私といっしょに中へはいって、見てみたらどうだね？」彼はうなずいて、隊長の後にしがった。ところが、入口でちよっと揉め事がおきた。警備に立っていた男が、怒ったような顔つきで、隊長と押し問答を始めたのだ。明らかにシェアラを中へ入れたくないらしい。だが、隊長に二言三言いわれると、おとなしく傍へ退いた。

二人は梯子を登った。あたりが冷えびえとしているので、シェアラは身震いした。円盤の内部は思ったより大きい。

やがて彼は円形の室内に立った。隊長は彼をスクリーンのついた装置の前に立たせ、スイッチを入れたが、別に何事もおきなかった。次に六インチほどの長さの棒を持たせた。その末端からは、太い線が伸びていた。

隊長の説明によると、スクリーンは彼を撮影するためのもので、棒のほうは体温、脳波、体重、身長その他もろもろのことを記録するのだそうだ。

そのほか、円盤内でシェアラが気づいたこと、教えられたことをウォレン・スミスは次のようにまとめている。

円盤内部の奇妙な光景

〈円盤の内部〉

理由はわからなかったが、内部は非常に冷たかった。奇妙なことに、床は金属でできているにもかかわらず、その上を歩いているという感じがなく、足音もまったく立たなかった。

室内には寝床もベッドもなかった。代わりにコンピューターと思われる装置がぎっしりと並んでいたが、ただ地球上のそれとは似ても似つかなかった。

隊長は彼に小さな金属片を見せてくれたが、それを装置の一つに差し込んだだけで、自分たちの故郷へ自動的に帰れるのだとのことだった。

その他椅子やデスクがあったが、いずれも同じ金属からできていた。舷窓や窓に類するものは見当たらず、彼がその点を質問すると、外部を見るにはスクリーンを使うと説明されたが、その仕組みについては何も教えられなかった。

〈乗員たちの外観〉

乗員たちは背丈が五フィートから五フィート半、体重約一二五ないし一四〇ポンド。前にも説明したように、白い制服を着ているため、身体は直接見ることができなかったが、地球人の宇宙飛行士のようないい体格をしていた。

顔は面長で、平べったい感じがしたが、これはヘルメットを着用しているためかもしれない。その目はやや吊りあがり気味で、眉毛は細く、色が明るく、重いまぶたの上方に、これまたややねあがり気味についている。

唇は薄く、顔面の皮膚とほとんど同じ色を呈していた。全体の印象をシェアラはこう述べている。

「一番びっくりくる形容は、よく古代エジプトの本で見かける、あんな感じの顔つきです。古代エジプトの神々の顔のあるものは、それらの連中そっくりです。もともとエジプトの神々のほうが肌の色が暗いですが……」

〈円盤の推進力〉

彼らは重力コントロール型の装置を使用しているとのことだった。このコントロールには、プッシュ（圧進）とプル（牽引）の二通りがあり、まず重力がプッシュ効果を発揮するように、装置をセットする。地球を脱出する時は、こうして宇宙へ押し出される。地球の重力場から脱すると、そのプロセスを逆にして他の惑星のそれに連結し、それに向かって牽引されるのだ。

この操作はすべて機械が自動的に行なう。故

障が発生しない限り、彼らがコントロール装置に触れる必要はない。

特定の惑星、たとえば地球の場合には、電磁力推進を使って船を動かすという。シェアラはその仕組みがどうなっているのか聞いてみたが、答を理解することができなかった。しかし、隊長によると、われわれ人類も同じような装置をあと一步で完成するところまでできているそうだ。

原子力エネルギーを利用しているのかどうかも訊ねてみたが、隊長のいうには、原子力は宇宙旅行には適していないということだった。原子炉タイプのエンジンを内蔵した船で宇宙空間に出ることは、さまざまな「危険」を伴う。彼らも大昔には使ってみたことがあるが、多くの人命を失ったため、他の動力に切り替えたのだそうだ。

故郷の星では、動力エネルギーを水から取っているという。これは水を物質の究極の形まで分解して取る。水はきわめて強力なエネルギー源であって、地球の科学者もそのエネルギーの開発に努力を傾けるべきだと、隊長はいった。

〈円盤の安全保持〉

彼の種族はかつてある期間、光速の二乗の早さで飛ぶ飛行装置を実験したことがあるが、これにはいろいろと問題が起きた。第一に、乗員を純粋なエネルギーの形に変換してしまうことである。速度があまりに巨大なので、肉体が粒子に分解してしまうのだ。のちに、そのばらば

らになった粒子群を再統合する装置を備えるようになったが、今度はこのシステム自体にトラブルが発生した。

乗員たちはエネルギー体で存在する緊張に耐えきれずに、脳のプログラミングを失う者も出、再統合のプロセスにも欠陥があって、時おり原型に完全復元できずに、怪物化することがあった。

もう一つの問題は、乗員の中にエネルギー体のまま残ることを希望する者が出てきたことだ。彼らは何しろ純粋なエネルギーなので、心の欲するまま、宇宙のどこへでも自由におもむくことができるのだ。また、岩から動物までいかなる物体の中にも潜りこむことが可能だった。

しかし現在は、このシステムを改良したものがどの円盤にも積みこまれている。そしてこのシステムを使って、地球の大気中で透明化することができるといふ。

これまでもUFOがしばしば瞬間的に見えなくなったり、レーダーには写っているのに、現場に駆けつけた空軍のパイロットは何も発見できなかった、という報告が多いが、これで説明できるかもしれない。

シェアラーはこう述べる。「彼らは念には念をいれた安全装置を備えています。船内のスクリーンは遠距離に焦点を結べるし、地球大気内にいる時は通信チャンネルをモニターしていて、空軍のジェット機が緊急発進したとたん

に、透明化してしまうのだと思います」

〈円盤乗員の目的〉

地球を訪れている宇宙人には幾つかのタイプがあり、彼らは監視型ではなさそうだ。彼らよりももっと頻繁に地球を訪れている種族があり、その連中は地球と地球人類に関してもっと詳しい。

訪問の目的はいろいろあるが、彼らの場合は地球の物理的特性を調査する科学探険ではないか、とシェアラーは感じた。彼はいう。

「隊長はなぜここへ来たのか、はっきりとは知らないようでした。彼は命令で動いている軍人といった感じを受けました」

彼はまた、地球人が訪問者に対して強い敵意をもっていることを指摘された。地球に着陸した際、他の船の乗員がひどい目に合わされたこともあるという。過去には地球人に捕まって行方不明になった者もいたそうだが、ただしこれはだいたい以前のことで、恐らく今世紀のことではないようだった。

〈シェアラーを選んだ理由〉

彼らはシェアラーの「弁護士」という職業について、盛んに質問した。州間ハイウェイ上で彼をコンタクトの対象に選んだ理由は、そこにあるようだった。彼らには、地球人の職業を探知する方法があるらしい。

隊長の話では、彼らにはわれわれの生活に關してもっといろいろ発見しようという一種の計画があるという。彼らはわれわれを、多くの点

で進歩しているが、遅れた面も多々あると考えている。彼らの故郷もかつてはそうだったということだ。

シェアラーが自分の仕事は犯罪の容疑をかけられた人々を弁護することだというと、隊長は、彼らの世界でも大昔は人々をよく牢に入れた時代があったと答えた。だが現在では、規範から逸脱した者や法を破った者は、薬品と脳のエレクトロニクスの再構成とによって矯正されるという。

円錐型の装置をかぶせられる

そのあと、他の円盤乗員たちが帰ってくる、隊長はシェアラーに、円錐型の装置を頭に装置するよう指示した。彼は気が進まなかったが、拒否するだけの勇氣も自由もなかった。「もしそれをかぶれば、われわれやわれわれの世界や宇宙のことがいっぺんにわかる仕掛けになっているのだ」と、隊長はつけ加えた。

円錐装置が頭の上にかぶせられ、乗員の一人がコードを接続した。とたんにシェアラーは頭の中が引っかかり回されるような、これまで経験したこともない激しい苦痛を感じて、夢中で頭の装置をはずそうともがいたが、彼らに腕をとられて制止された。頭の中の苦痛が去ってから、ようやく円錐装置は取りはずされた。

乗員たちは別れの挨拶のように彼の腕をきつく握った。隊長が梯子を降りて送ってくれた

が、外に出る時彼の体は感電したようにびりびりした。車のところまで来ると、隊長は彼の肩をふたたびきつく握っていった。

「われわれが離陸するまで、車内にいるように。近いうちにまた会うことになるだろう」

「何かこの会見の記念になるようなものをいたしませんか」

だが、隊長は首を振り、だまって円盤に戻った。梯子が引っこめられ、唸るような音や回転音が湧きおこり、ライトが点滅を始めた。次の瞬間、船は斜行上昇してゆき、三〇秒後には姿を消した。シェアラーは車のエンジンを始動させた。ライトもラジオも元に戻っていた。彼は車をウターンさせると、狭い沼地の道を走らせて家路をめざしたのである。

洗脳操作が行なわれた？

この弁護士レイモンド・シェアラーの事件は、もうお気づきの方が多いと思うが、先に挙げた警官ハーバート・シャーマー事件と、内容が細部に至るまできわめて酷似している。

第一に、事件全体の発端から終了に至るまでの経過である。両者とも、その乗っていた車の異常から始まって、宇宙人に円盤内に連行され、釈放されるまでの扱われ方が共通しているし、さらにその後の一時的記憶喪失、身心の異常、精神分析医の催眠治療による記憶回復まで、まったく同じ経過をたどる。

第二に、円盤の形態と内部の様子。外観はもちろん、大きさ、定員数、内部の装置や調度品に至るまでよく似ている。

第三に、宇宙人の容貌、形態、行動。これまた目鼻立ちから制服のデザインまで、両者とも同一の宇宙人種族と遭遇したとしか考えられないほど共通している。

両者の体験でとりわけ慄然とさせられるのは、一種の「洗脳操作」が行なわれた形跡のあることだ。シャーマーは、円盤内で乗員が装置のボタンをいじっては、頭の中にいろいろと思念を植えつけていたと証言しているし、シェアラーは円錐型の装置を頭にかぶせられて、明らかに脳内に何らかの操作を加えられた。

シャーマーはいみじくもこう述べている。「彼らに捕まった連中の中には、洗脳されて手先（スパイ）になった人もいるのではないか。彼らなら望む期間だけ人間をコントロールできるはずだ」

後者の場合は、その上事件直後から人格転換がおこり、しかも本人がこれを、「洗脳」された結果だと証言している。

また、両者ともその体験を一時的に記憶喪失したが、これも宇宙人に故意に操作されたのだろうか。それとも単なる心理的^{メンタル}外傷の結果であろうか。

洗脳、人格転換、記憶喪失（あるいは消去）——この三つの要素がすべて事実だとした場合、さらに恐るべき一つの疑問が浮かびあが

る。それは、ひょっとしたらこの他にも宇宙人の手で「洗脳」され、「人格転換」され、「記憶喪失」させられた人間がたくさんいるのではないか、という疑問だ。しかも、当人はその事実にも少しも気づいていない、というケースで。

人里離れた路上で、UFOを夜空に目撃したたけという平凡な事件は、世界各地に無数に起こっている。UFOに追跡されたという事件も、きわめて多い。わが国では、幸いというのか、円盤内に連れこまれて、生体検査やそれに準ずる扱いを受けたという事件は、まだ報告されていないが、上に当てはまるケースならやはりたくさんあるだろう。

あまりセンセーショナルない方はしたくないが、もしもシャーマーやシェアラーの事件が真実の体験であるならば、そのような一見平凡な事件の内にもひょっとしたら同じような事件が幾つもあるのではないか、という可能性はあくまでも残るのだ。

●ヒル夫妻事件

この種の「異常コンタクト」事件に属するもので、科学者の手で充分な調査が施され、詳細な研究報告が公表されている——要するに、古典的ケースといっている事件は、少なくとも二つある。一つが一九五七年十月にブラジルで起こった有名なアントニオ・ピラス・ポアス事件



●バーニー・アンド・ベティ・ヒル夫妻

と、一九六一年五月にアメリカで起こったヒル夫妻事件である。

前者は、アメリカの世界的なUFO研究組織APPROのブラジル支部長だった医学者故オラポ・フォンテス博士が綿密な分析調査を行ない、宇宙人による人間支配実験という特異性で知られた事件であり、後者は、アメリカの著名なコラムニスト、ジョン・G・フラァーが、精神分析学者ベンジャミン・サイモン博士の研究に

基づいてレポートを書き、当時のベストセラーとなったことでよく知られている。

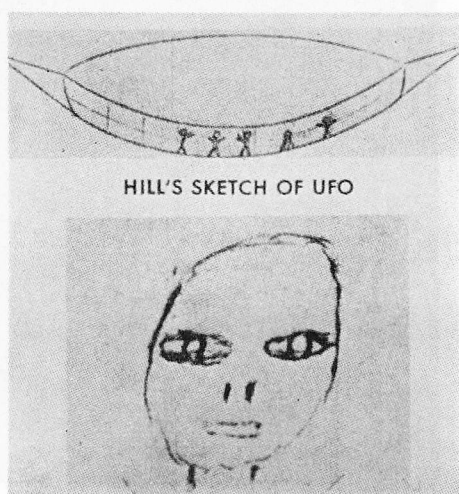
ここでは紙幅の制限もあり、どちらもある程度わが国にも紹介されている事件だから、くどくは再述しない。ただヒル夫妻の件は、「記憶喪失」がからんでいる点で本稿のテーマに沿う事件でもあり、また近年になって夫妻の体験の真实性をひょっとしたら裏づけるのではないかと思われる、きわめて有意義な研究が発表されているので、その研究を最後に紹介したい。ただ万一この事件についてまったくご存じない読者もおられるといけないから、まずヒル夫妻の体験談の概要を記しておくことにする。

一九六一年五月十九日の夜ふけ、カナダ旅行の帰途、ニューハンプシャー州ポーツマス の自宅まであと数時間という時、バーニーとベティ・ヒル夫妻はふと車を追ってくるUFOを発見した。降下するUFOの窓ごとに、人影が見えたことまでは覚えていたが、それ以後二時間の記憶がどうしても思い出せない。

身体に異常がおき、ノイローゼ状態になった二人は、とうとう思いあまってボストンの精神分析医サイモン博士を訪ねた。彼らは催眠治療で失った二時間の記憶を取り戻したが、その内容は円盤内に連行されて、裸にされ、二人別々に身体検査をされたという異常な体験であった。

彼らの出会った宇宙人は、黒い制服に身をかけた身長一・五メートル足らずの小人で、容

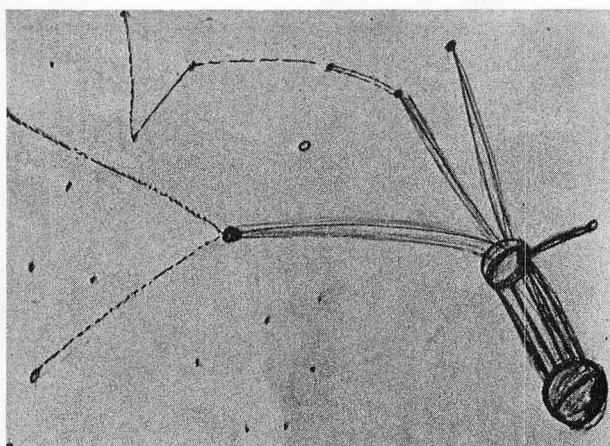
●ヒルが描いた円盤と宇宙人のリーダー



貌、行動などは後年のシャーマー、シェアラール両事件に登場する宇宙人たちとよく似ていた。また身体検査をされた点は、昨年十月に起こったミシシッピ州のヒクスン・パーカー事件を思い出させる。

検査が終わったあと、ベティはしばらく宇宙人のリーダーといろいろ話をしたが、その際とくに印象的だったのは、宇宙図を見せられたことだった。その宇宙図には、小さきまざまな点々が散らばり、幾つかの点と点の間には太さの異なる何本かの線が引かれていた。点はもちろん星で、太い実線は貿易ルート、細い実線は多少の文化交流のある段階、破線は探険隊の派遣された段階であることを示すものらしかった。

サイモン博士の催眠療法下で、彼女は宇宙図を思い出し、スケッチしてみせた。そしてその一見でたらしめな落書きとしか見えないスケ



●ベティが円盤内で見たという宇宙図

ツチから、六年後じつに驚くべき事実が明るみに出されたのである。

宇宙図は解読された！

この事件が発表された当時、サイモン博士の医学的記録の部分だけは容認できても、事件の内容はあまりにも荒唐無稽で、非科学的としか考えられない人々が多かった。

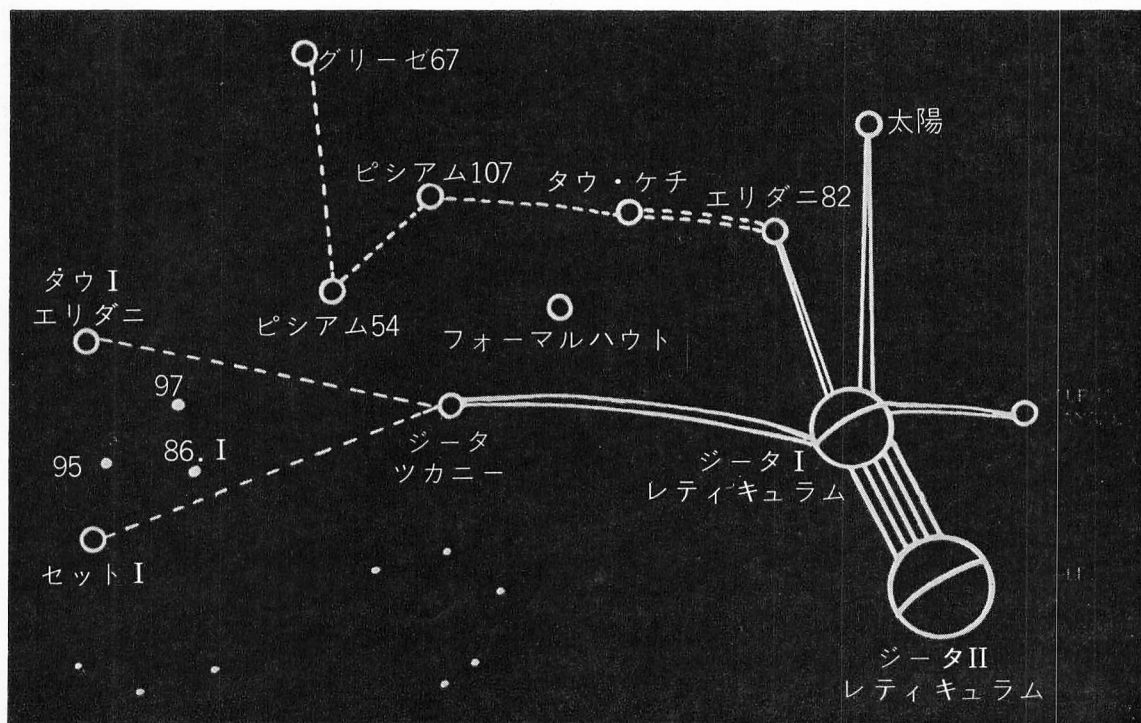
わずかにその事実であることを証明できる手がかりとなり得るものは、ベティの描いた一枚の宇宙図だけだった。もしこの宇宙図が解読できれば、それは同時に、その図を示したという宇

宙人の発進した星さえ判明するだろう。だがむろん、一千億以上を数える恒星を含む銀河系のどの部分に、その単純なスケッチ上の星々が当てはまるのか、捜し出そうとするのはいかなる天文学者にも不可能なことである。

ところが、ここにその宇宙図を解読する突破口を見出した想像力豊かな素人女性がいる。オハイオ州オーク・ハーバーに住む女性教師マージョリー・フィッシュである。

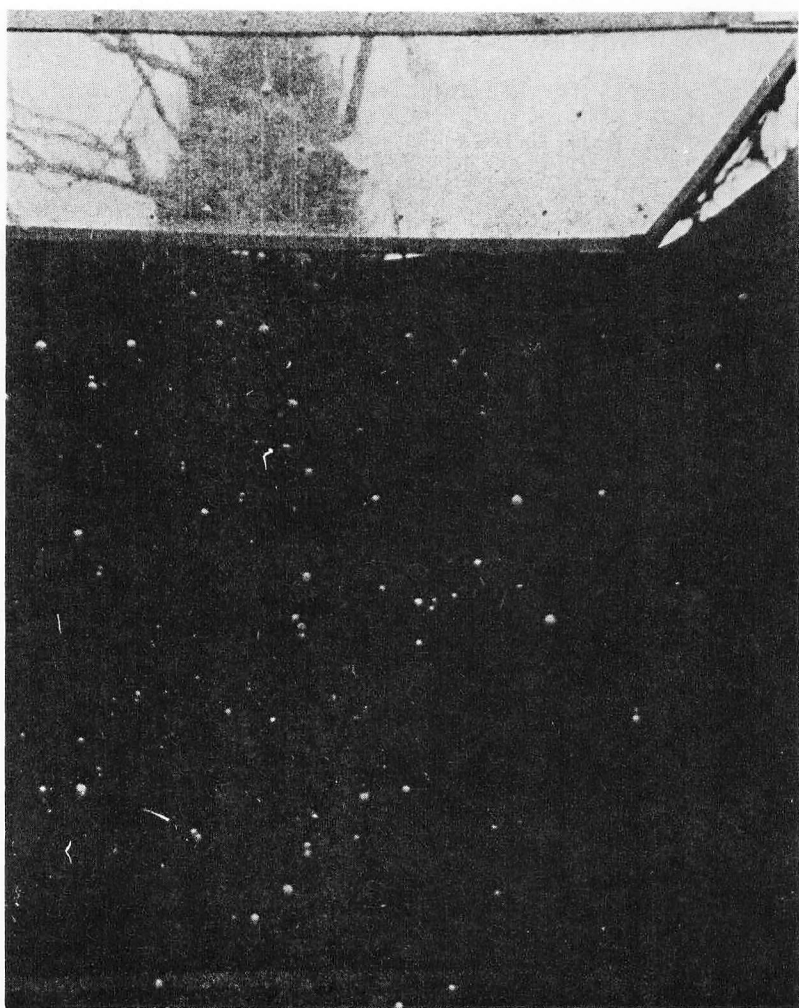
彼女は生物学と比較解剖学の知識から、宇宙生物は異なる環境に対応して異なる形態をとるのではないかと考えていたが、世界中から似たような人間型（ヒューマノイド）の宇宙人目撃報告がもたらされることから、その全てを幻覚とかでっちあげという説明で片づけられないのではない

●マージョリー・フィッシュが解読した宇宙図





●マージョリー・フィッシュ



●マージョリー・フィッシュが製作した立体星図

か、と思うようになった。

そしてベティの宇宙図が本物と立証できれば、円盤と宇宙人の実在をも裏づけられると考えついた。彼女は宇宙人がわざわざベティの天文知識を試すためにそれを見せた事実から、彼らの星がその図に含まれていること、その図がわれわれの太陽系に比較的近い宇宙を示すこと、しかも恐らく彼らの星と太陽とは線のいずれかで結ばれているだろうと推理したのである。

そこで彼女は、われわれの太陽を中心に全方

角の近宇宙に散在する星々を、立体的に縮尺表現して、ベティのスケッチに示されているのと正確に同じパターンを有する恒星群の発見にかかった。

立体的表現の方法としては、いろいろ試行錯誤を繰り返した挙句、とうとう最後に、十六種類のサイズと色で巨星、矮星、主系列星（太陽のような）、変光星などの星の種類に、見かけの色、光度を表わすビーズ玉と、それをつるすナイロン製の釣糸の使用によって解決した。

最初は太陽を中心に十六光年の距離の範囲内の恒星をマップしてみたが不成功に終わり、次には三十二・六光年の範囲に拡大した。

彼女がもう一つ頭を悩ませたのは、星間距離、座標、変移等を示す精密データの入手である。天文の専門家でない彼女にとっては、大変な難題だったが、その熱心さにほだされたパーキンス天文台の資料室員が、とうとう規則を破って彼女に必要なデータのコピーを許可してくれた。同じころ彼女はまた最も精密完全な天文資料である「フォン・W・グリーゼ・カタログ」の一九五七年版を入手することにも成功した。

しかし、マージョリーの苦勞は、むしろそれからだ。彼女は何度も計算値をチェックし直しては、より正確に、より詳細にと立体宇宙図の制作に打ちこみ、ついに半径三十二光年以内の宇宙空間に収まる、主要な二五六個の恒星を全部並べ終わった。その上さらに著名な天文学者との文通を重ねて、より精密なデータを加えて

は、写真や肉眼観察であらゆる角度から検討を続けたが、依然として問題のパターンは影すらも現われない。

ただその過程で、彼女はそれまで専門家でさえ気づかなかった銀河系の興味深い特徴の一つを発見するという副産物があつた。それはこのような立体図を作ってみて初めてわかつたのだが、同サイズ、同温度の恒星はまったく無秩序に散開しているのではなく、むしろある範囲で一団にかたまつていたり、ある平面上に並んでいたりする、ということであつた。

この頃になつてようやくマージョリーは、ただやみくもにあらゆる恒星を正確に配置しようとしては、かえつてパターンの発見を困難にするだけであることを実感した。

そしてベティの宇宙図が実用的なものであるなら、当然宇宙人たちは彼らにとって意味のある——すなわち彼らが探検する価値のある、生命の存在の可能な惑星をもつ恒星に限定して記載したのではないか、と思いついたのである。

この観点に立てば、生命惑星をもつ可能性の少ない比較的若い星、変光星、自転速度の早すぎる星などを消去できる。こうして彼女は、新しい発想に基づいて、立体図に含めていい星だけに絞つてゆき、ついでに太陽からの半径も六十五光年に広げた。

こうして必要不可欠な六十二個の恒星から成る、新たな立体宇宙図が完成した一九六九年の夏のある日、ついにマージョリーは、ベティの

宇宙図に描かれた星のパターンに瓜二つのものを、ある角度から発見したのだ！

パターンの中心をなす大きな恒星は、地球の赤道付近から望遠鏡で観測できるレティキュラム座という星座のジータIという星で、それと一番太い線で結ばれている星はジータIIと思われた。両星の距離はわずかに二〇分の一光年。生命をもつ最も近距離の恒星系にまず到着しようとするのはきわめて当然だから、両者の間が最も強く結ばれているのは妥当と考えられる。

こうしてパターン内の一つ一つの恒星が、タウ・ケチ、エリダニ82、ピシウム107と確認され、我が太陽ソルの位置も確定した。

その年の末、マージョリーは念のために、オハイオ州立大の天文学者でパーキス天文台員のウォルター・ミッチェル博士のもとへ、その苦心の立体図を運びこんで、彼女の計算値が正確なものかどうか再チェックを依頼し、不完全な箇所がないことを確認してもらつた。

しかし彼女の立体宇宙図の中で、依然として確認できない星がいくつか残つた。ところがそのうち三つの星が、一九六九年版の「グリーンゼ近隣恒星カタログ」を参照した結果、はじめて確認されたのだ。スケッチ中に86の1、95及び97と記入されている星がその三つで、どれもフオーナックスという星座に属する恒星である。

この事実こそ、ベティの宇宙図の真実性をますます高めるものと、マージョリーは考えている。なぜならその三個を含む宇宙図が催眠下の

ベティによって描かれたのは、一九六四年であり、その当時86の1はまったく未発見でどんな恒星カタログにも記載されていなかったし、また他の二星も、観測値の誤りから、まったく別の位置にあるものと考えられていたからだ。

したがって、一九六一年から六四年までの間、この三角形を成す三星が正しい位置にあることを知っていた地球の天文学者は一人もいるはずはなく、知っていたのは、レティキュラム座から地球を訪れた宇宙人たちと、彼らからその宇宙図を見せられた、天文学などほとんど何一つ知らぬベティ・ヒル（の潜在意識）だけであつたことは確実である。

だとしたならば、たとえいかに信じがたいことではあつても、ベティの異常なコンタクト体験は——そして恐らくそれとよく似た他のコンタクト事件も——真実起こつた出来事だという結論に至らざるを得ない。

もちろん、この結論に到達するためには、マージョリーの研究結果が偶然の一致で説明できないかどうか、その立体宇宙図そのものが真に正確であるかどうか、まだまだより一層の分析と検証が必要である。

しかし少なくとも確実にいえることは、円盤の研究にいま最も必要なものが感情ではなく理性であるかぎり、迷信でなく科学精神であるかぎり、たとえ感情的にはいかに信じがたくとも理性の上で認めざるを得ない事を勇敢に認める勇氣こそ必要だ、ということであろう。(完)



エドガー・ケイシーの予言による 世界の大変動

常岡理太郎

「一九九九年に天から恐るべき大王が舞い降りて来る」とは中世フランスの予言者ノストラダムスの有名な予言である。これについては多くの解釈があり、光化学スモッグ説、宇宙戦争説等、諸説紛々として、真意については全くキメ手がない。それほどにノストラダムスの予言類は難解で解釈にとまどうのだが、これは全編が詩の形式できわめて象徴的に書かれているからである。結局ほんとうの意味はノストラダムス自身しか知らないのかもしれない。ただ前記の予言に関するいずれの解説にしても、一九九九年に世界の全人類が何らかの理由で滅亡すると解釈している点では大体に一致している。(黒沼健氏の解釈は異なる) そうすると九九年までには滅亡らしい大悲惨事は発生しないというのか。局地的な災害はあるにしてもこのまま文明が繁栄し続けて人口が増加しながら九九年に一挙に全人類が死滅するというのだろうか。

●ケイシーの予言は明快

アメリカの生んだ予言者エドガー・ケイシーによればそうではない。彼は生前のリーディング(透視、予知等を意味する)で明快に次のように予言しているのである。

「地球上の大事件は一九三六年から始まる」

これは決して第二次大戦の如き人為的な変動を意味するのではなく、実は地球の物理的大変化を指しているのである。つまり地球の自転軸の傾きや地殻の変動等による地表の大異変を意味しているとケイシー研究者は解しているが、ケイシー自身もその具体的な模様を年月や場所等をあげて明確に述べているのだ。この点、ノストラダムスとは異なって、ケイシーの予言はすべてそのもののズバリの詳細な内容を述べているのである。ノストラダムスの如きわかりにくい抽象的な表現ではない。しかも百パーセントに近いすごい中率を示しているから、無視できないものがある。

●ケイシーは一大救済者であった

ノストラダムスと並んで双壁をなす偉大な超能力者エドガー・ケイシーは一八七七年三月に米ケンタッキー州の農村で生まれた。幼い頃から求道精神に富んでいた彼は聖書を読みふけていたが、八歳の頃のある日、白い服を着た不思議な人物が眼前に現われて「おまえの望みをかなえてやろう」といった。「私は他人を助けて苦しみを除いてやる力がほしい」と答えた彼の声にもいわないで不思議な人物は消えていった。おそらく一種の幻覚であったのだろうが、翌日またあの不思議な「声」が聞こえた。「眠れ。そうす

れば助けてやろう」

その後ケイシーは一種の催眠法によって深い睡眠におちいったまま、そばにいる人の質問に対して答えるようになったが、それらは主として病気の治療法に関するもので、しかも医師がサジを投げるような難病を治癒に導く的確な解答であった。ケイシーは睡眠中にしゃべるので、目覚めてから自分の語った内容については全然記憶がない。この神秘的な不思議な能力については科学的に全く不可解であるが、重視すべきは、彼の一万四千件以上にのぼるリーディングのほとんどが、他人の業苦を除き、人々を援助し、各民族の未来の運命を透視して一大警告を発しているという点である。しかも地球の大変化に関するリーディングはまさに全人類の、特に日本民族の遠からぬ将来の運命について重大きわまりない示唆を与えているのであるから、どだいスプーンを曲げて超能力だと騒がせているような段階とはまるで次元が異なるのである。

●アトランティス大陸が出現する

「バージニア・ビーチの賢人」と称されたこの眠れる大予言者は、死の五年前すなわち一九四〇年六月二十八日に驚くべき予言を行なった。

「アトランティス大陸(ケイシーはこれをボセイディアと表現した)がふた

たび海上に出現する。それは一九六八年と六九年ではないが、さほど先のことででもない」

もちろん彼は伝説のアトランティス大陸が実在したことを知っていたし、その詳細な光景を透視していた。また太平洋に存在したといわれるレムリア大陸についても透視している。紀元前約一万年に最後の大変動によって海中に消えたアトランティス大陸は、現代の文明をはるかにしのぐ大文明圏であり、エレベーター付きの高層建築、モノレールの交通機関、水陸両用の航空機などを有し、ラジオもテレビもあったと、ケイシーは透視の結果を述べている。人間の精神も高度に発達していた。また太陽エネルギーを自由に操作する「大結晶体」(とケイシーは名づけている)を用いて人間の若返り法を発見し、アトランティス人は数百年の青春を楽しんだという。

しかし精神的墮落とともにこの「大結晶体」の誤った使用により、地殻に大異変を起こしたアトランティスは伝説だけを残してついに海中に姿を消してしまった。

その大アトランティスがまた海上に隆起するというのである。しかも彼はこればかりでなく世界的な大異変により、諸大陸の沈下や新大陸の出現などが今世紀中に発生すると予言しているのだ。

●世界的大変化の発生の予言

一体、何がどのようなことになるのか。ケイシーの予言を概観すると、

(1) 南太平洋へ変動の前に南海の水位が変化してくる。この海底下の地震帯は地中海とつながり、シシリー島のエトナ地方に予言にあたる大地震が発生する。

(2) 太平洋へ多数の陸地が現われる。(これはかつて海に沈んだレムリア大陸を意味する)そして日本列島の大部分は海中に沈む。(この時期については後述)

(3) ヨーロッパへ一瞬の内にヨーロッパの北部は広い海と化す。

(4) 大西洋へかつてのアトランティス大陸が遠くない将来に姿を出す。

(5) アメリカへ大部分が変化する。ニューヨークは海中に没し、太平洋沿岸も同様である。サウスカロライナ州、ジョージア州の南部も消える。カナダの五大湖の水は枯れて泥の平野となる。

安全な土地として残るのは、バージニア州のノーフォークとバージニア・ビーチ、オハイオ州とインディアナ州及びイリノイ州中の小部分、カナダの東部地方だけ。

まだあるが、これらの大異変の原因は極の移動にあるとケイシーはいう。たしかに南北両極が移動して極地の温

度が上昇すれば、水が溶けて水と化しただけでも大きな影響を及ぼす。更に地殻の変動により、土地の隆起や陥没が発生することは当然考えられる。その前兆をなすものは火山の大噴火や地震などである。たとえばケイシーは一九六七年十二月に南極大陸の南シエラランド諸島の火山が大爆発すると生前に予言したが、果たしてその年月に爆発が実現した。その直前に島にある昔の湖の底が突然上昇したことを当時そこにいたチリの科学者が発見している。

「この世界的大異変の期間は一九五八年から一九九八年のあいだに始まるがこの時期の到来は主の光がふたたび雲の中に見えるときに広く示されるであろう」とケイシーはいっている。

この部分を筆者は重視している。というのは「主の光がふたたび雲の中に見えるとき」というのを「進化した偉大な惑星の人々が宇宙船で公然と地球上空に出現する」という意味に解したからだ。この個所はどう考えてもそれ以外に解釈の仕様がなない。すなわち地球上に大変動が発生する頃に異星人が大挙して何かの目的で公然と地球を訪問するようになると筆者は考えているのだが、如何なものだろう。

●日本列島は沈没する？

さて我々日本人にとって見逃せない

●好評発売中！ なぜ空飛ぶ円盤は来るのか

フレッド・ステックリング／久保田八郎訳

¥550 円80

●テレパシー ●生命の科学

ジョージ・アダムスキー／久保田八郎訳

¥400 円80 ¥480 円80

文久書林

東京都文京区白山1-29-12
振替・東京2521 Tel. (813)2495

◎円盤飛来の真相と
人間の真の生き方を示す名著3点。

のは「日本列島の大部分は海中に沈む」というケイシーの予言である。この時期についてケイシーは言及していない。従って、これを何万年先のものと解釈してもそれは自由だが、しかしこの予言は一九九八年までに始まる世界的大異変の一部分として述べられているところから察すると、あと二十四年以内に始まるという意味にとれる。何万年先どころではないのだ。しかもケイシーの伝記を書いたジェス・スターンはその著「未来へのドア」の中でこれについて「日本の大部分は一九五八年から一九八一年までのいつかに(sometime) 海中に沈む」と述べている。もちろんこれはスターンの個人的解釈にすぎないが、それにしても時期が早すぎるではないか、あますとこ

ろ七年間である。しかも「一九八一年に沈む」というのではなく、それまでの「いつか」であるから、もっと早まる可能性もあるということになる。

「そんな徴候を示す前兆らしい現象があるか」と問われれば、「アル」ともいえるし「ナイ」ともいえるが、最近の地殻変動や火山の爆発、海底の異常隆起などを見ると何か不気味なものを感しないわけにもゆかない。その実例を今ここに詳述する余裕はないが、科学的な裏付けになる資料は次第に増加する傾向にあると考えて差支えないような気がする。もちろんこれは筆者個人のフィーリングであって、科学者の傍証を得た上での断言ではない。第一、予言なるものを非科学的だと断ずる人はこの記事全体が全くのナンセンスであろうし、全然考慮の余地のないことであろう。そしてたしかにいかかわしい予言者も多数出現して人心を惑わせた例もあった。

●真の予言者も存在する

しかし筆者が知る限り、真の予言者も存在すると思う。有名どころではノストラダムス、エドガー・ケイシー、一八〇〇年代のアメリカで活躍した、ケイシーと比肩する「バキプシーの千里眼男」アンドルー・ジャクソン・デビス、ケネディー大統領の死を予言したアメリカのジーン・ディクソン女

史らがいる。百パーセントとまではゆかないにしても、この人々は不思議な能力を駆使して高度的な中率を示している。特にケイシーのそれは百パーセントに近く、信じられないほどの驚異的超能力を発揮している。その事実を否定はできない。本人に如何なる潜在能力があるのか、深層意識の如何なるメカニズムによるのかは不明だが、とにかく的中すればよいのだ。十件の予言の内、八件の中してもはや普通人ではない。何か異常な要素を有しているのである。「科学」の名のもとにこの「異常な要素」をあたまから無視してかかるのは容易だが、現実の世界はそう単純ではない。動物の生態を観察しただけでも神秘的現象が充満していることがわかる。まして万物の霊長たる人間の複雑きわまりない肉体の奥に如何なる未知の精神的機構がひそんでいるか、わかったものではない。すでに米ソではテレパシーの科学的研究を公的機関が行なっており、特にソ連の超心理研究は高度に進歩していると伝えられている。

●アカシック・レコード

しかし特定の人だけがもつ未来または過去の光景の透視能力は、おそらく科学では解決不可能だろう。こうした超能力者を我々研究者は「アカシック・レコードを読みとる人」と呼んでい

る。きわめて抽象的な表現だが、この三次元空間で発生した出来事のすべては一種の波動として空間に永遠に記録され、また人間や万物から発する波動も記録される。それら無数の波動が交錯するとパターンが出来上がる。この四次元的パターンの投影が現象の世界で発生する可視的な出来事である。普通人は三次元のレベルでしかこの現象を見ることはできないが、特殊な能力を持つ人は、すでに四次元の世界に存在するパターンを透視できる。これが未来の予知 (precognition) であり、空間に刻まれていた過去の波動をキャッチするとき過去を透視できるが、これは過去知 (past cognition) である。

以上の理論はもちろん仮説にすぎない。ここでも「非科学」の名がまかり通るだろうが、それはかまわない。だれでも自分自身の仮説を立てる自由があるのだ。誤りであることが判明したときに撤回すればよいのである。

●警告と受けとるべきか

ケイシーは死んだ。この「眠れる大予言者」は大戦の終わった一九四五年にほんとうの眠りについてしまった。しかし彼は世界の人々が遠からぬ将来に受けるかもしれない苛酷な試練と、母なる惑星地球の物理的大変化について、多くの不気味な言葉を残した。これが実現するか否かは、その時になっ

てみないとわからない。だが運命というものの不可思議さと、この世の神秘現象を考えると、やはり無視することはできないような気がする。これは警告なのだろうか……。

エドガー・ケイシーの伝記としては左の著書がある。詳細を知りたい方におすすめする。

★七人の予言者 黒沼 健著

★奇蹟の人 J・ミラード 新潮社
十菱 麟訳

★転生の秘密 ジナ・サーミナラ 霞ヶ関書房
★超能力の秘密 ジナ・サーミナラ 多賀 英訳
十菱 麟訳

たま出版

日本宇宙現象研究会

一会員募集のお知らせ一

- J.S.P.S.「日本宇宙現象研究会」は、日本、国内各地支部はもちろん、全世界へネットワークを持つ本格的UFO専門研究団体です。
- 当会はUFOに興味をお持ちの方なら、男女年齢の別なくどなたでも入会できます。
- 20円切手同封の上、下記までご連絡下さい。写真入のくわしい案内書をお送りします。

〒150 東京都渋谷区神山町5-2

日本宇宙現象研究会 (J.S.P.S.)

代表 並木伸一郎 (非営利団体)

〈天空と大地〉科学シリーズ(4)

地球自転速度が急変!

世界的異常気象が原因か?



昨年12月以来発生した地球自転速度の変化は
2月になっても続き、
変化量は昭和38年のそれを超過して、
1,000分の0.5秒早まった!

発見者はパリ大学のベナール ギノ博士と東大の飯島博士。
原因は異常気象か 地球の内部構造の異変か?
飯島博士がそのナゾを解明する……

東京大学東京天文台

理学博士 飯島重孝

●はじめに

今年一九七四年一月になって、地球の自転速度が少し上がってきたことがわかりました。これは昨年十二月始め頃に起きた速度変化がそのまま持続していることを示すものです。その変化量は〇・五ミリ秒毎日、比率にすると十億分の五弱で量的にはそれ程大きい変化ではないのですが、比較的静穏安定だった過去一二年の動きからみると、かなり急激なはっきりした変化といえそうです。

これとちょうど同じ時機に、全地球的な気象異常の起きていることが気象庁の発表からわかりました。たとえば一九七四年一月の地上気圧分布の偏差図をみると、高緯度帯に異常高気圧が、低緯度帯に異常低気圧が卓越しているのが目立っています。これに伴って偏西風の速度低下も起きているようです。この状況は丁度今から十一年前の一九六三年一月の全地球的気象異常およびこれに伴って起きた地球自転速度の急変とよく似ています。自転の変化もほとんど同じく、〇・五ミリ秒毎日の速度増でした。気象異常のデータから厳密に地球自転速度の異常変化を計算することはかなり困難です。それは南半球や赤道周辺の気象データが乏しいからです。高層の風速分布などについては尚更です。

●気象異常で自転速度が変わる

一九六三年の時は、北半球の気象データだけを利用して、地球自転速度の変化量の見積りを行ない、おおよその量的裏付けが出来ました。今回のこの変化も一九六三年一月とほとんど同じケースと思われます。気象庁の根本順吉さんほかの方々の御厚意により、気象データを集計して、目下計算をすすめているところです。ここでいえることは、地球自転速度の急変があった気象異常が起きたと考えるのは間違いで、何らかの原因で気象異常が起こり、これによって自転速度が変化したと考えるのが正しいということです。

気象異常と地球自転速度の急変の問題にはいる前に、地球自転はどのように測られるか、地球自転速度の変化にはどのような種類が知られているかなどについて、あらかじめお話ししておきたいと思います。今回のような自転速度の急変に関する正しい理解のために必要と思われるからです。

●地球自転の測り方

1 地球自転を測る

地球の自転速度は、モーターの速度をタコメーターで直接測るようにはゆきません。これには刻々の自転の角度、つまり平均太陽時を直接

測り、これを原子時に比べて、その変化率から間接に求められるのです。したがって、全地球的規模の気象異常が、たとえば二三日続いたぐらいでは平均太陽時の時刻変化量は観測データのバラツキの中に埋もれてしまいます。今回のように気象異常が一カ月前後居する時、初めて検出されるのです。たとえば、〇・五ミリ秒毎日の自転速度変化でも、このまま続けば一カ月後には一五ミリ秒の時刻変化に達し、一日当たりの観測精度 $\pm 4 \sim 5$ ミリ秒をはるかに越えるからです。昔にも、異常気象に伴う地球自転速度の急変は何度か起きていたこととされます。しかし当時の時刻観測精度は低く、なおそれにも増して、時計の精度が桁違いに低かったため見過ごされていたものです。今回の程度の自転速度の急変が検出されるようになったのは、観測精度の向上と原子時計の出現のお蔭といえるでしょう。

(a) 恒星時と世界時

さて、地球の自転角度はいくつかの恒星の位置を仲介として測られます。この際、地球上の基準線は本初子午線、つまりいわゆるグリニッジ子午線であり、地球上の基準は天の赤道と春分点です。図1で中側の小球が自転する地球を示しています。Gを通る子午線が本初子午線で、これより東経 λ 、北緯 ϕ の地点Aを、望遠鏡を据えて天文台の位置と考えます。一方、外側の地球が天球で、天体の動きはすべてこの天

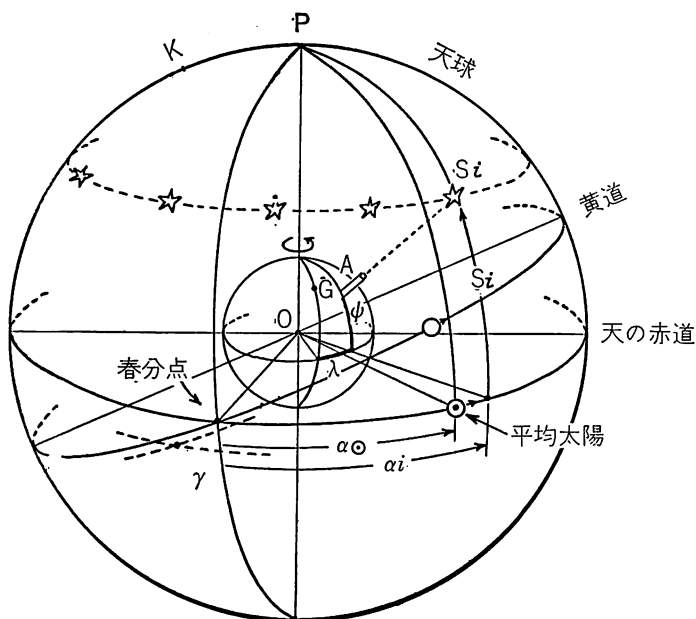


図1 恒星時と平均太陽時

地球上に投影して考えることが出来ます。地球の赤道の投影が天の赤道であり、太陽が恒星の間を縫って、一太陽年で天空を一周する道すじが黄道です。天の赤道と黄道の交点の一つが春分点(図の γ で示す)と呼ばれます。地球上の座標が、赤道と本初子午線に基づいて経度 λ 、緯度 ϕ で表わされるように、天体の位置は天の赤道と春分点に基づいて赤経 α と赤緯 δ で表わされます。

地球上のA点の子午線と春分点の間の角度を時間単位で表わしたものをA点の恒星時といい

ます。したがって、いま赤経が α の恒星が子午線上へ来た瞬間の恒星時は α で与えられるわけですから。現在、時刻を測るための最高精度の望遠鏡は写真天頂筒 (Photographic Zenith Tube = PZT) ですが、この PZT の直接の目標はこの恒星時を測ることにあるのです。図 1 の A 点に描いた筒がこれを意味しています。PZT は鉛直に据えた固定の望遠鏡で、この天頂帯の角度四〇分範囲の恒星を観測します。このための恒星は、図の鉢巻状のベルトに沿って約百四十星が選ばれています。(東京天文台の例)

天球上の真太陽(図の○印)は春分点を出発して黄道に沿って進み、一太陽年の後ふたたび春分点へ戻ります。いまこの真太陽と同時に春分点を出て、真太陽のもつ平均角速度で、天の赤道上を進む仮想の天体(図の●印)を考えます。これは「平均太陽」と呼ばれ、この平均太陽の赤経($\alpha^{\odot}$)は、地球の公転運動理論から導かれた数式で与えられています。

A点の子午線からこの平均太陽までの角度（時間表示）を西向きに測り、これに一二時を加えたものをA点での平均太陽時といいます。

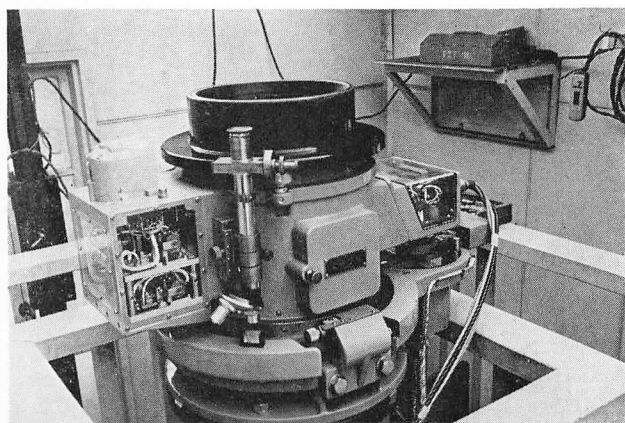
本初子午線に関する平均太陽時を特に世界時（UT）と呼んで、学術上もっぱら用いられています。図1からわかるように、A点の東経を λ （時間表示）、恒星時をSTと書きますと、世界時（UT）は

$$UT = ST - \alpha_{\odot} + 12^h - \lambda$$

の関係にあり、恒星時（ST）を測れば計算によって求められます。このUTは私達の標準時の基礎となっているものですが、一方ではこれを原子時（AT）に比べて、地球自転速度の変化が求められます。

(b) 写真天頂筒 (PZT)

図2はPZTの構造を示しています。恒星からの光はレンズを通過して後、直下にある水銀面で反射し、レンズ直下に下向きに装填された写真乾板に星像を結びます。一つの恒星に対して、子午線通過の前二回後二回、それぞれ一五秒間計四回の露光を行いますが、各露光中は写真乾板を星像と同じ速さで東西方向へ動かして点像を結ばせるのです。写真乾板は露光移動中に、視野の一定位置へくると電気接点 が働いてパルスが発生し、この瞬間が標準時計で読みとられます。第一回目の撮影が終わると、頭部を反転して東西を入れ換え、第二回目の撮影に移ります。この時は写真乾板は頭部に対しては逆行し、前回と同じ位置でまたパルスが発生するわけです。このように写真乾板は一星に対して二往復して合計四点像が撮影されます。



●写真天頂筒の回転筒部(東京天文台)

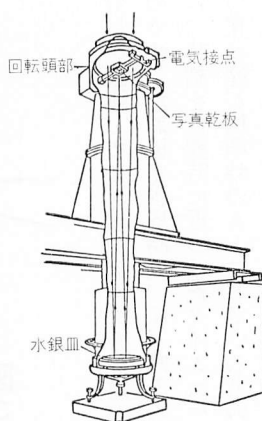
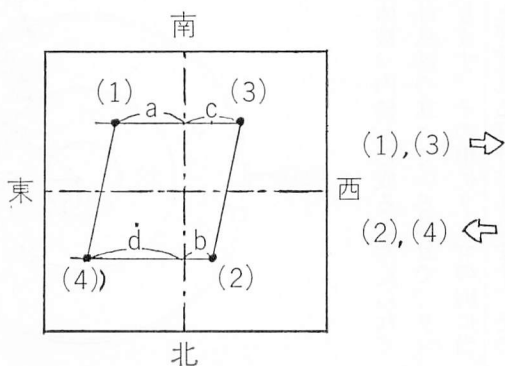
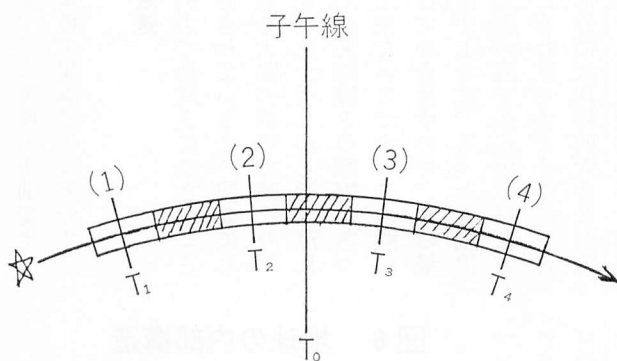


図2 写真天頂筒

図4 写真天頂筒の原理

- = シャッターをあける(露光15秒)
 乾板を移動
 = 乾板停止、頭部を180°まわす。



写真は東京天文台PZTの回転頭部を示しています。写真乾板の送り、電気接点、シャッター開閉、頭部反転などの諸機構が盛り込まれているものです。図4は一星に関するPZTの動作を図解しています。上図は東から西へ子午線

を通過する恒星の動きを示し、白ぬきの所は露光、斜線の所で頭部を反転して次の露光に備えます。(1)、(2)、(3)、(4)の露光中に発生したパルスの時刻を T_1 、 T_2 、 T_3 、 T_4 、またちょうど子午線通過の瞬間を T_0 と書いてあります。乾板上の四点像は同図下の図のような平行四辺形に撮影されるのです。

いま図の南北方向の中心線を子午線と考え、また乾板の移動速度を v と書きますと、

$$a = v(T_0 - T_1) \quad b = v(T_0 - T_2)$$

$$d = v(T_4 - T_0) \quad c = v(T_3 - T_0)$$

となるのですがすぐわかります。この式から

$$T_0 = \frac{1}{2}(T_1 + T_2 + T_3 + T_4) + \frac{1}{2}(a + b - c - d)$$

が得られ、現像された乾板をコンパレータにかけて、 a 、 b 、 c 、 d の長さを測れば T_0 の時刻が得られます。もちろん v の値は既知で、東京天文台の場合は毎秒0.21ミリメートルに当たります。標準時計の時刻が T_0 の瞬間の恒星時はこの恒星の赤経 α に等しいわけです。この結果を前出の(1)式で世界時へ換算すれば、協定世界時(UTC)または原子時(AT)に対する差とし、

$$(UT - UTC) \text{ または } (UT - AT)$$

10が得られます。天文台では、晴夜毎に約30の

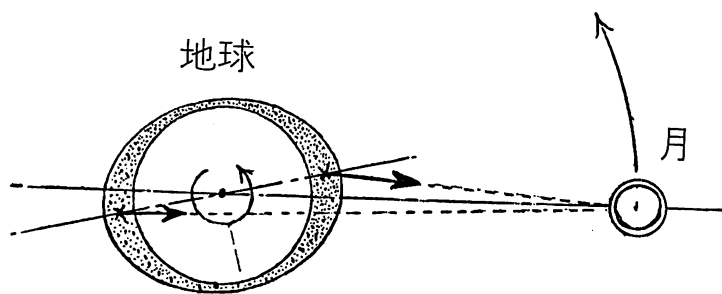


図5 月や太陽の引力による海洋潮汐。これによって地球は自転と逆向きの回転力を受ける。

恒星を観測してこれらのデータを追跡しているのです。なお協定世界時は、原子時計の秒を刻み、時刻を世界時に近づけたタイムスケールで現在私達が標準時のもとにしているものです。このような写真天頂筒は、現在世界の一流天文台で合計一二台が活躍しています。

2 自転速度変化のいろいろ

地球自転速度の変化としてはすでにいくつかの種類が知られています。それらの主なものは

- (a) ゆるやかな一様減速、(b) 大規模不規則変化、(c) 周期的変化、(d) 小規模不規則変化などです。

(a) ゆるやかな一様減速

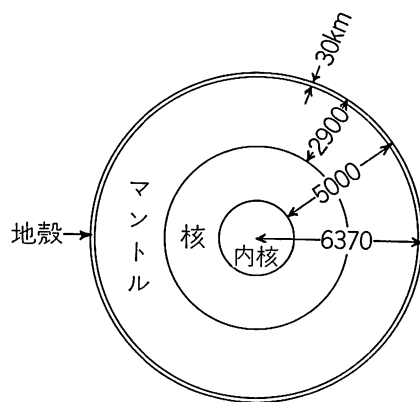
これは月や太陽の引力で地球上にひき起こされる海洋潮汐が原因とされています。図5にみるように、海の潮は月や太陽の直下で高まり、その直角方向で低くなります。しかし潮の流れは浅い海底や入りくんだ海岸線との摩擦があったてすぐこの形に即応出来ないので、潮の間にも地球は自転をつづけてゆきますので、潮の最終的な形は、図5に示すように、もっとも潮位の高い位置が、月や太陽の直下から少し自転方向にずれた位置で起こるわけです。そこで、月や太陽に近い大潮部分には比較的大きな引力が、その裏側の大潮部分には比較的小さな引力が作用することになります。一方、地球中心では、この2力の平均値が、月の公転を保つための求心力の一部として逆向きに作用していますので、結局、地球は時計方向、つまり自転と逆向きの回転力を絶えず受けているのです。

こうして地球の自転速度はゆっくりと減少してゆきます。現在のところ、この減速率は、一〇〇年毎に一・六四ミリ秒毎日、つまり一日の長さが一・六四ミリ秒長くなる割合とされています。

(b) 大規模不規則変化

地球の内部構造は図6に示すように、地殻、

図6 地球の内部構造



マントル、流体核、内核から成ると考えられています。地殻は私達の立っている部分で、リングの皮に当たります。その中にリングの肉に当たるマントルと呼ばれる部分があります。その内側にある核は、高温で電気伝導率も高く、流体的な運動をする部分です。一番中心にはまた固体的な内核が存在するようです。

● なぜ自転が変化するか

地球自転の大規模不規則変化は、この流体核の複雑な運動が、マントルとの境界層の摩擦による結合を介して、地殻やマントルの相対運動に反映したものと考えられています。しかし地球内部の流体核の相対運動が地球磁場の変化を通して辛うじて推測されるに過ぎません。した

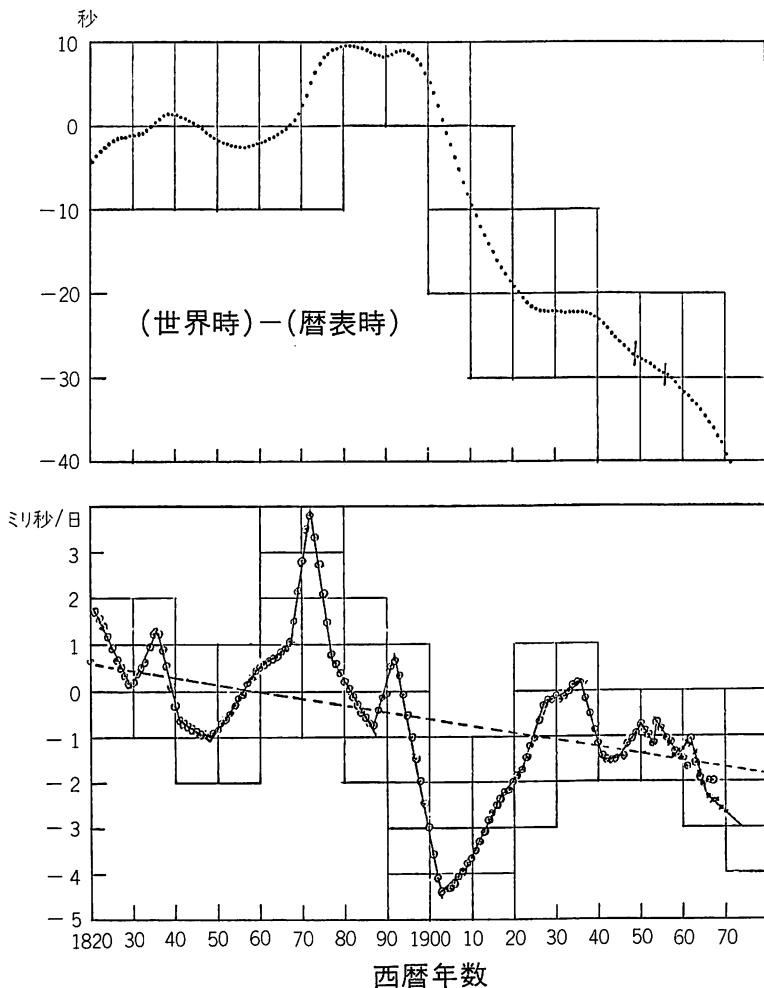
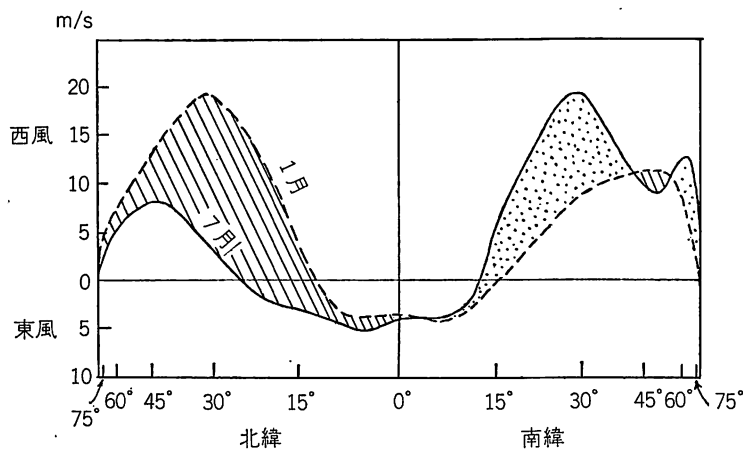


図7 地球自転の永年減速と不規則変化

図8 偏西風の季節的变化



がってこの不規則変化の原因は、まだ量的に実証されたわけではないのです。

さて、地球の自転速度はいろいろな原因で変動しますので、これに基づく世界時は一樣なタイムスケールとはいえないのですが、地球の公転運動は天体力学に沿って変動のない動きを続けていることが実証されています。そこで、公転軌道上の地球の位置を観測から定め、これを

天体力学理論に照らして均質なタイムスケールを割り出すことが出来ます。これを暦表時（ET）と呼びます。現実の暦表時は月の位置観測を用いて決められています。過去の月の観測結果を用いれば世界時と暦表時の差をさかのぼって計算出来るわけです。図7はこのようにして計算された結果です。上の図は世界時の時刻の進み遅れを示し、各点は年平均値に当たります。

す。下の図はこれを一日当たりの変化に換算したものです。これによると、地球の自転速度は、大体においてプラス四ミリ秒毎日からマイナス四ミリ秒毎日の範囲で、かなり大幅に変動してきたことがわかります。下の図の右下りの点線は前項でお話しした自転の永年減速に当たるものです。つまり自転速度はこの点線のまわりに、ガタガタと変動しながら、平均的にはしだいに減速してきていることを示しています。

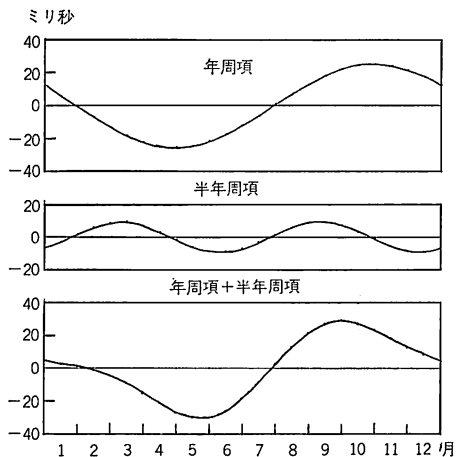


図9 地球自転の季節的变化(時刻)

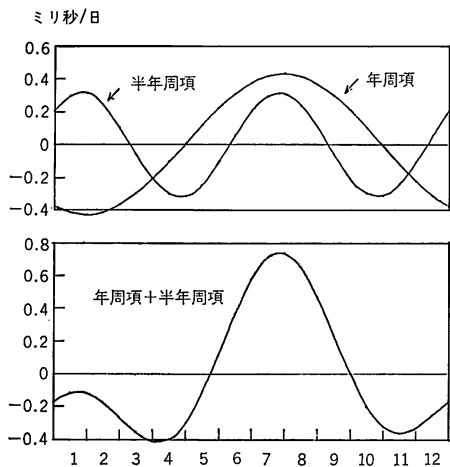


図10 地球自転の季節的变化(速度)

(c) 周期的変化

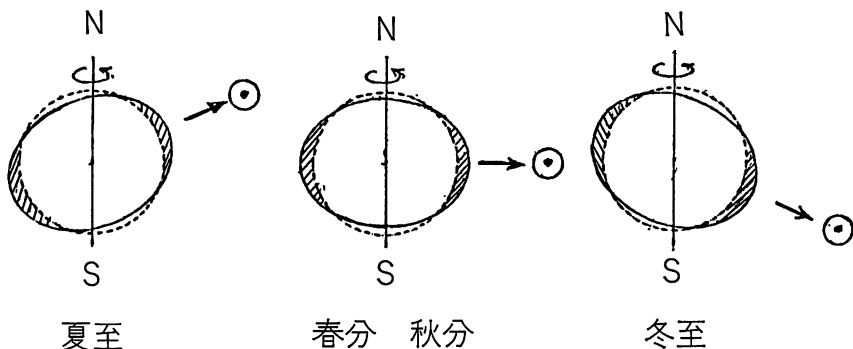
これは規則正しく繰り返される変化で、主なものとしては(i)年周変化、(ii)半年周変化および(iii)準二年(二十六カ月)周変化などがよく知られています。

(i)の年周変化は偏西風速度の季節的变化によって解釈されているものです。図8は南北両半球にわたる偏西風の緯度別分布を示したもので、1月は北半球の冬、南半球の夏に当たり、偏西風は北半球で強く南半球で弱まっているのがわかります。7月はこの関係が南北入れ替わっています。したがって南北全く対称であれば、地球全体として季節による変化は起こらないはずですが、しかし現実の地球では、南北半球で、陸や海の分布が全く違ってしますので、図8でわかるように、1月の分布と7月の分布で

はかなり形が違ってきます。この図では、風速0の横軸と各グラフの間の面積が偏西風の角運動量に比例するように描かれていますので、斜線域は1月の偏西風角運動量の勝っている領域、斑点域は7月のその勝っている領域に当たります。結局、地球全体としては、偏西風の角運動量は1月に最大、7月に最小となるのです。偏西風の角運動量は摩擦を介して地球本体からもらい受けたもので、偏西風の角運動量の増減は、地球本体の角運動量の減増、つまり自転速度の減増につながっています。大気の運動まで含めた地球全体の角運動量は保存されるからです。

図9の上図には、この年周変化を世界時刻の進み遅れで示しています。図10の上図はこれを変化率、つまり自転速度に換算したもので

図11 太陽の引力による地球潮汐。自転軸のまわりの慣性モーメントが変わる。



す。変化の振幅は約0・四ミリ秒毎日ですが、1月頃に速度の最低が、7月頃に最高が現われているのがわかります。

(ii)の半年周変化は太陽の引力による地球潮汐のためと解釈されています。潮汐現象は海洋だけとは限らず、弾性体としての地球本体もまた潮汐作用により変形します。これが地球潮汐

です。図11は太陽引力による地球潮汐の変形を示したもので、太陽の方向に引き伸ばされた形となります。太陽が赤道上で、つまり春分と秋分の頃に自転軸に関する慣性モーメントは最大となり、太陽が赤道からもっとも離れた時期、つまり夏至や冬至の頃に慣性モーメントは最小になることが図から理解できます。慣性モーメントが増加すれば、地球は胴太となって自転速度が下がり、慣性モーメントが減少すればこの逆です。こうして地球自転の半年周変化が起きると解釈されます。しかしこの計算結果は現実の半年周変化の約半分しか説明づけることができないようです。残りの原因は風速の半年周変化であろうといわれています。

図9の中図に、世界時刻の進み遅れで表わした半年周変化を、また図10の上図にはこれを変化率に換算したものを示しています。なお図9および図10の下図は前述の年周変化とこの半年周変化の合計です。世界時は、図9の示すような合計振幅約三〇ミリの季節的変化を内蔵しているわけで、この変化率は夏頃に最大で、約〇・七ミリ秒毎日に達することが図10からおわかりいただけると思います。

(iii)の準二年周変化は最近になって発見されたもので、振幅は半年周変化と同程度ですが、年周変化や半年周変化ほど安定ではなく、数年のスケールで振幅の消長があるようです。この原因は赤道帯上の成層圏の下層で吹いている東風の強弱変化によって解釈されています。

(d) 小規模不規則変化

ここで、世界時の内容についてももう少し立入ったお話をしておきたいと思っています。それはこの項の説明に直接関連するからです。地球の回転運動の変化は、自転速度ばかりでなくこの他に自転軸が地表を貫く点、つまり北極位置が刻々地上を移ってゆく現象があります。これを極運動と呼びます。これによって、地上に据えた望遠鏡の向きが天球に対してわずかながら変わることはおわかりいただけるでしょう。したがって、観測によって得られた緯度や時刻の結果にこの影響が現われます。前者を緯度変化、後者を経度変化と呼びますが、これらは天文台の場所によって違った量となります。

観測から得られた生の世界時へ、天文台毎に経度変化を補正して、初めて本来の正しい世界時が得られるのです。これをUT1世界時と呼んでいます。前に述べた季節変化は、このUT1世界時を原子時計に比べて得られたもので、これが図9の下図に示した値です。この季節変化をさらにUT1世界時へ補正すると、一応周期変化の主なものとは除去され、なめらかな世界時が得られるはずです。これをUT2世界時と呼んでいます。

しかしこのUT2世界時を原子時計に比べてみると、なおこまかな不規則変化が残っています。これは当然のことで、補正したはずの周期項は長い間の平均値として得られたものです。た

えば、気象条件が全世界的にその平均的な分布からはなだしくかたよれば、当然UT2世界時の変化として現われてくるでしょう。ここに掲げた小規模不規則変化はこの類のものを指しています。今回の主題である自転速度の急変も当然、この範疇にはいる変化と考えられます。

● 異常気象が重大な原因

3 異常気象と地球自転

(a) 自転急変と異常気象のデータ ここではまず、昨年一九七三年十二月頃に始まったUT2世界時の突然の折れ、つまり地球自転速度の急上昇についての実際のデータをご紹介します。図12がこれです。この図はUT2世界時と協定世界時(UTC)の差で表わしています。UTCは既に述べたように、原子時計の秒を刻み、時刻をUT1世界時になるべく近づけるように管理されたタイムスケールで現用の標準時の基となっているものです。したがってこのグラフの変化率、つまり傾斜に関する限り、原子時に比べたUT2世界時の動きとみてよいでしょう。

このデータは東京天文台のPZTによる観測結果で、各点は1夜の平均値に当たります。六月頃は雨期で観測数が非常に少なくなっていますが、一九七三年末から一九七四年一月にかけて、記録的な晴天がつづいたため、この付近の観測数は大変密になっていることがわかりま

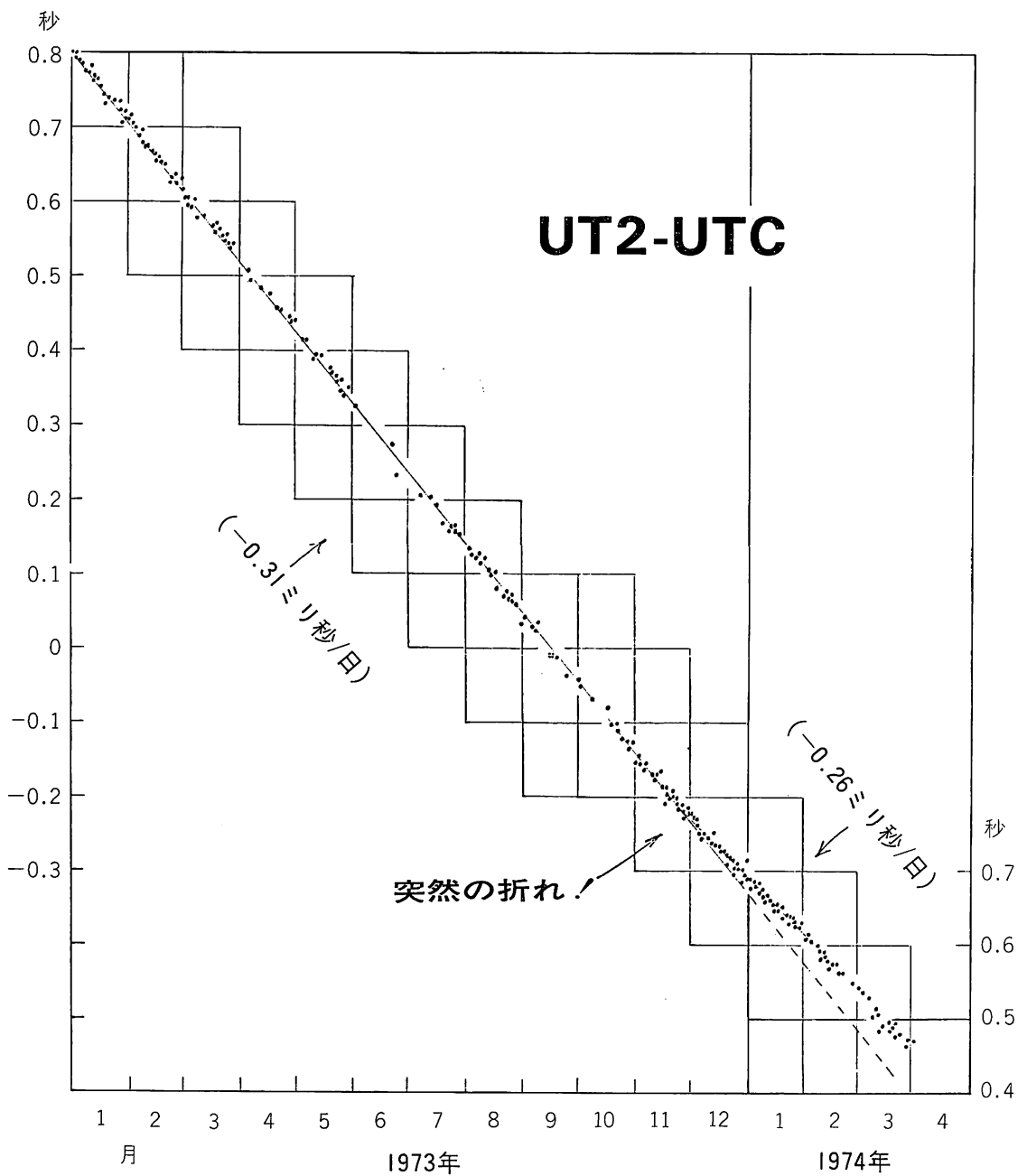
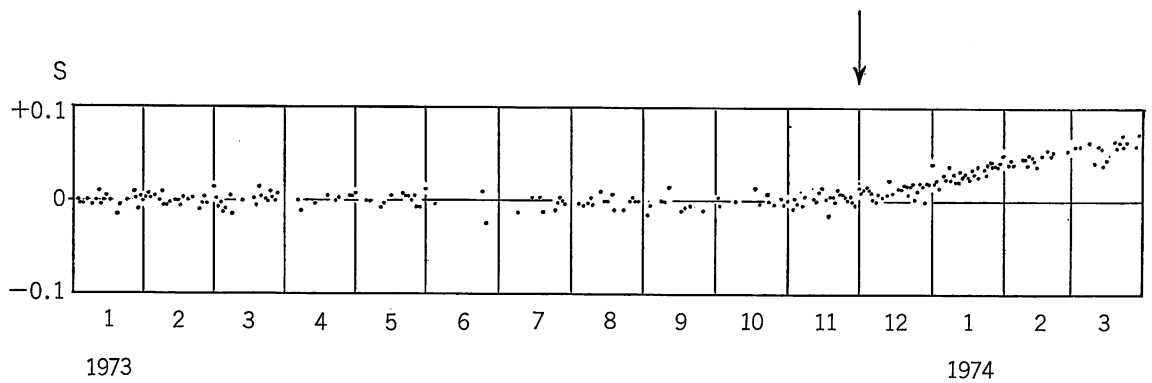


図12 1973年末に起きたUT 2世界時の折れ— 1 —

図13 1973年末に起きたUT 2世界時の折れ— 2 —



す。このことが幸いして、今回の突然変化がかなりの確につかめる結果となったのです。このようなUT2世界時の変化は、東京天文台のデータに限らず、グリニッジ天文台やアメリカ海軍天文台のデータにも同じように現われています。

このグラフから原子時に対するUT2世界時の変化率を算定してみますと、一九七三年十二月以前ではマイナス〇・三ミリ秒毎日、それ以後ではマイナス〇・二六ミリ秒毎日程度となります。つまり地球自転速度が差し引きプラス〇・五ミリ秒毎日だけ増加したことを示すものです。

いまこの図のUT2世界時の折れをもう少しはっきりさせるために、図12のデータから一定の傾斜とレベルを引き去って示したのが図13のグラフです。図中の各点はもちろん図12の中のそれと同じく一夜平均ですが、これらの点のバラツキから、同時に世界時の観測精度の現状もおわかりいただけると思います。

次はこの時期の異常気象の概況をご紹介しますことにします。ここでは一九七四年一月の例をとりました。図14は気象庁からいただいたもので、北半球の地上気圧分布の偏差図を示しています。つまりこれは、一九七四年一月の地上気圧分布から過去二〇年の一月平均値のそれを引き去った残りで、今年一月平均の異常値だけを示しているのです。図中の(－)符号は低気圧の中心、(＋)は高気圧の中心をそれぞれ示してい

ます。

この図からわかることは、北極近くに高気圧域が集まり、緯度の比較的低い所で低気圧域が優勢なことです。このことは、低緯度帯の大気が高緯度帯へ平均的に移動したことを示すものです。これによって地球は比較的胴細となり、自転速度が増加するという定性的な説明につながるわけです。

ここには掲げませんが、五〇〇ミリバール層の一九七四年一月高度分布偏差図をみますと、やはり図14と同じ傾向が現われています。つまりこの一月は、過去の平均に比べて高緯度帯に異常高気圧域が、低緯度帯に異常低気圧域があるのです。後でお話するように、偏西風は北に低く南に高い気圧差に比例して吹くわけですが、この異常気圧配置は、この南高の気圧差を弱めることとなります。このことから、偏西風の強度が低下し、定性的にはこの分だけ地球本体の自転速度が上がることとなります。

(b) 地上気圧分布の影響

いままで述べてきたことをもう少し定量的に取扱ってみることにします。私達は一気圧の大気圧力の下で生活しています。一気圧といえば水銀柱で七六センチ、これを水柱に換算すると約一〇メートルとなります。空気自体は大変軽いようですが、この全質量はちょうど地上から水深約一〇メートルの水の総量と等価なわけですから、結局地球上の大気的全質量(M_a)は約

$$M_a = 5.15 \times 10^{21} \text{ グラム (g)}$$

と計算されます。一方、地球の全質量(M)は

$$M = 5.977 \times 10^{27} \text{ g}$$

ですから大気質量は地球質量の約百万分の〇・八六に当たります。

いま地球上の一小部分を考え、この部分の質量とそこから自転軸までの距離の2乗を掛け合わせて、これを全地球に関して寄せ集めたものを慣性モーメントとします。地球の慣性モーメント(C)は $C = 8.04 \times 10^{44} \text{ g cm}^2$ ですが、静止大気の慣性モーメント(C_a)を計算してみますと約 $C_a = 1.39 \times 10^{38} \text{ g cm}^2$ となり、地球の慣性モーメントに対する比率は百万分の一・七三に当たります。

この慣性モーメントに角速度をかけたものを角運動量といいます。地球本体の角運動量と大気を持つ角運動量の合計はいつも一定という性質があるのです。いま地球の角速度を ω で表しますと、

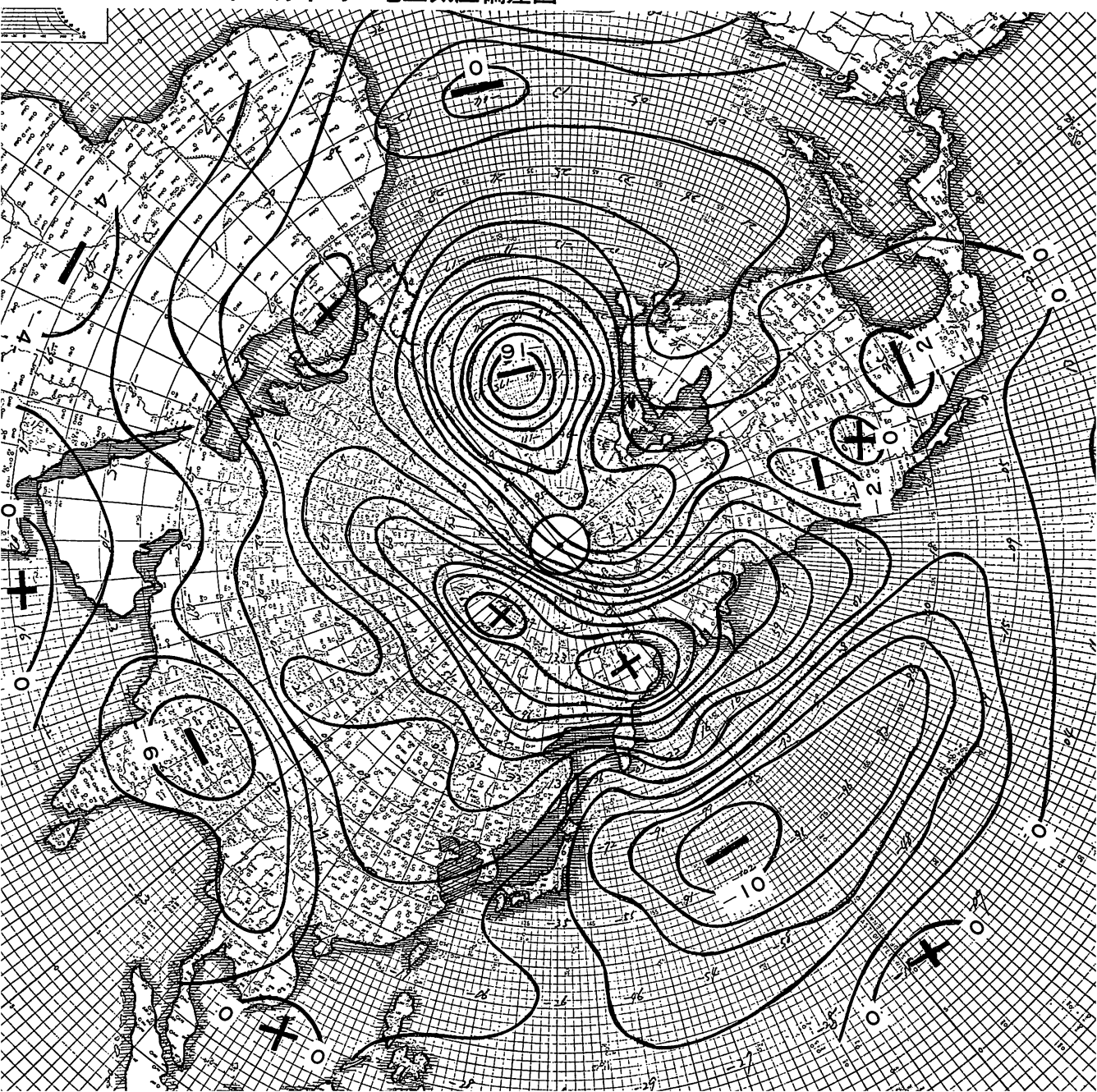
$$s(C + C_a) = I \omega$$

となります。したがって、大気の慣性モーメント(C_a)が減少したとしますと、この減量が全体の慣性モーメントに対する比率だけ自転速度は上がることになります。いま地表上の平均気圧が一樣に1ミリバールだけ減ったと仮定してみましよう。地上平均気圧を一〇〇〇ミリバールとすると、この減少比率は一〇〇〇分の一で、静止大気の慣性モーメントもこの比率で減り、全地球の慣性モーメントに対する減少率は

明らかに一〇億分の一・七三になります。これによる自転速度の増加は同じ比率で起こり、これは〇・一五ミリ秒毎日に相当するのです。

もう少し現実的な例を取り上げてみます。いま地球を緯度四五度線で南北に分けて考えると、図15に示すように、表面積比は〇・七一対〇・二九、また一様分布の静止大気圧の慣性モーメントの比は〇・八八対〇・一二となります。そこで、四五度線以南で地上大気圧が三ミリバールだけ一様に減少したとしましょう。この減少大気は四五度線以北へ移り、ここでは約七ミリバールの一様気圧増加となるはずですが。こうして慣性モーメントは四五度以南で減少し、四五度以北で増加するわけですが、南北の慣性モーメントの置き方を考慮すると、結局全体として一・七六ミリバールの大気圧の一様減少と等価になってしまいます。これによる地球自転速度の増加比率は〇・二六ミリ秒毎日に当たります。この例はかなり大雑把ですが、図14に示

図14 1974年1月平均 地上気圧偏差図



(c) 偏西風の風速変化の影響
 気圧五〇〇ミリバールの層は対流圏のほぼ中程の高さにあり、対流圏全般の気象状態を代表するといわれます。図16は北半球の五〇〇ミリバール層の年平均高度（メートル）の緯度に対する関係を四季別に示したもので、過去二〇年間の平均的な値です。これらのグラフは五〇〇ミリバールの等高線に当たるわけですが、ある係数をかければ、一定高度に対する気圧分布

したような異常気圧分布の場合に実質的に近いといえるものです。

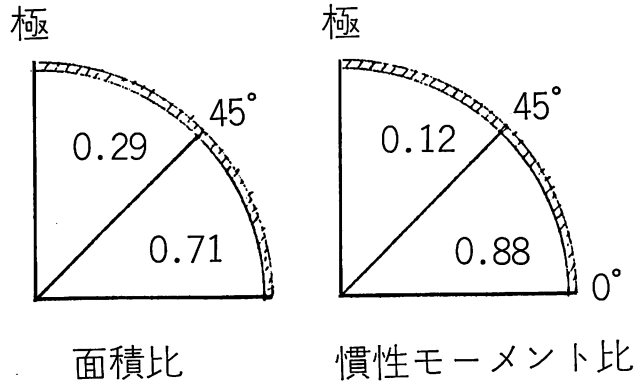
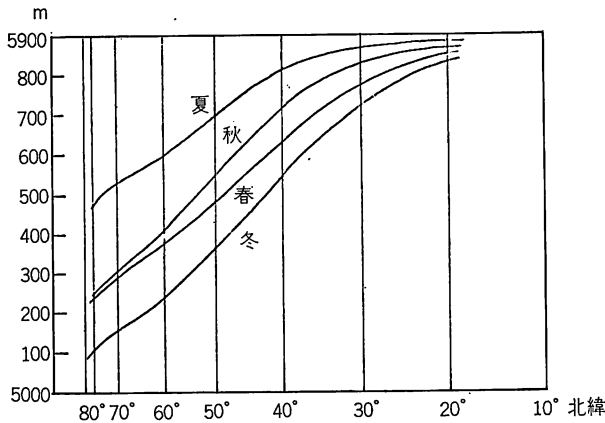


図15 北緯45°線で分割された2地域の面積比と、慣性モーメント（大気）の比。

図16 気圧500mb層の平均高度の緯度による分布（北半球）



（ミリバール）と読みかえることもできます。この図でみるように、四季を通じて、赤道から極にかけて下りの気圧傾配が存在していることがわかります。この傾配は冬にもっとも急で、夏にもっともゆるやかになっています。このような極に向かって下りの気圧傾配が、コリオリ力と競合して、南北両半球の緯度二〇度から四〇度を中心とする偏西風を常時吹かせているわけです。コリオリ力は自転する地球上の風の運動に対して、北半球では右向き、南半球では左向きに、みかけ上作用する力のことです。この力は風速に比例し、緯度の正弦に反比例しています。図16から偏西風強度が冬に最

大、夏に最小となることが推論されますが、このことは既に図8に示した通りです。

図16のグラフは長年にわたる平均的なもので、月々の値は、その時の気圧分布に応じて変化します。たとえば、図14に示したタイプの異常気象の際は、五〇〇ミリバール層付近でも、やはり高緯度に高気圧、低緯度に低気圧気味となり、赤道から極へかけての気圧の下り傾配はかなり打消されてしまうことになります。こうして偏西風は弱まり、この角運動量が地球本体へ還元されて自転速度が上昇するという定性的な説明につながります。

地球の慣性モーメント（ C ）に角速度（ ω ）を掛け合わせたものが角運動量であることは前項で述べたばかりです。角運動量（ ωC ）は結局 $\omega C = 5.86 \times 10^{40} \text{ g cm}^2/\text{s}$ となります。

一方、地球上の偏西風の一小部分を考え、この質量へ、東向きの対地風速と、そこから自転軸までの距離を掛け合わせ、この計算を風の全域についてよせ集めたものが、偏西風の相対角運動量となります。一月平均の偏西風の全相対角運動量（ L ）は $L = 16 \times 10^{42} \text{ g cm}^2/\text{s}$ と見積もられています。これは現実の気象データから算出されたものです。そこで偏西風の全相対角運動量の地球の角運動量に対する比率は一億分の二・七三となるわけです。この場合にも角運動量の総計は保存されます、つまり

$$\omega C + L = \text{一定}$$

したがって偏西風の角運動量が減少すれば、この減少量の総角運動量に対する比率だけ、地球の自転速度は上がるわけです。

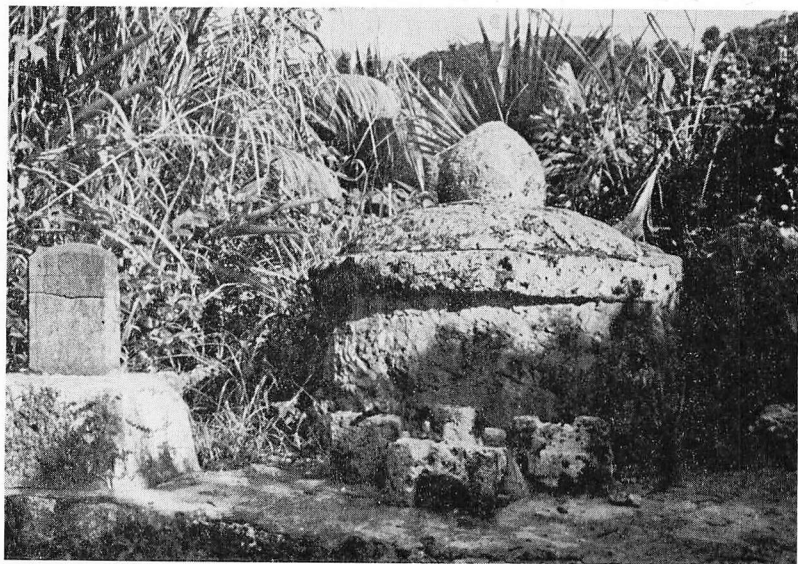
いま仮りに偏西風の速度が平均的に一割だけ低下したと考えてみましょう。これにより相対角運動量も一割低下するわけですから、自転速度上昇率は十億分の二・七三、つまり約〇・二四ミリ秒毎日に達します。現実の偏西風の速度異常はこのような一様な起り方ではなく、ある所では平常値の半分以下に、またある所では倍以上という大幅な変化をします。しかし図14に示したタイプの異常気象では、偏西風の卓越する緯度帯で大幅な速度減が起り、その他の緯度帯で速度増が起りますが、全体としては偏西風の相対角運動量の低下となるわけです。

最後に蛇足をつけ加えますと、慣性モーメントの減少が自転速度の増加につながる事実は、たとえばクルクルとスピン運動をしているフィギュアスケートの選手を思い出せばよいでしょう。この選手がスピン速度を上げるには、その肢体を細めてゆくのです。また偏西風の速度増加が自転速度の減少につながる事実は、回転する円板の上を、その縁に沿って回転方向へ走る場合を想像してみましょう。円板上をもっと早く走るには、円板をもっと後に蹴って進まなければなりません。こうして円板自体の地面に対する回転速度は遅くなるのです。

●ここにもSky People(天空人)の伝説が……

天孫民の伝説は世界中に案外多く残っている。ここ沖縄那覇市から数キロ東南の大里村の山中にひっそりと埋もれている円盤型の奇妙な墓。これこそ2〜3千年昔(?)に天空からこの土地へ「降臨」したという天空人の乗物にかたどって彼らを祀ったという由緒ある墓なのである。一般世間にはほとんど知られていない。

撮影は九州大学農学部教授・塩谷勉農学博士。この墓を探し出すのにずいぶん苦労されたという。



沖縄の「天空人の墓」?

私はライティング・ライツを撮影した

横町 昭



74年4月号が偶然、書店にて目にとまりページをめくって見たところ、ライティング・ライツの写真記事を見てびっくりしました。さっそく購入してきて家で良く読ませていただきました。というのも実は小生の写したネガの中にまったく同じ物が1枚あったからです。

私が昨年末より正月12日頃までに撮影したコホーテクすい星の観測写真ネガの中に、ほとんど同じ物があったからです。これはカラーネガによるものです(サクラカラーN100、12枚撮り)。昨年来のコホーテク熱に浮かされて私もすい星のきれいなカラー写真を撮って、あわせて双眼鏡(8×30)による観測をしようと機会の許すかぎりおこないました。73年12月18日、24日、74年1月3日、6日、9日、11日、12日の7日間です。ところが1月6日夕方撮影のカラーネガの中の始めの1枚の中にまったく同様な美しいカーブをもった多数の断続光跡が写っています。実は貴重なカラーフィルムですのでわりと慎重にすい星に向けてバルブで長時間露光していたので、現像したときには、この得体の知れない光跡に腹を立てたものです。(失敗したと思い)

原因はまったく不明です。同時刻にキャノンRP50mm、F1.8、開放(カラーネガ)と、ミランダEV、トキナー135mmレンズ、F2.8、(カラーネガ)の2台使用していますが、ミランダで撮った3枚の中の始めの1枚が問題のネガであります。キャノンの方では1枚はわりときれいにコホーテクすい星が写っていましたし、ミランダの方も2枚目3枚目はブレはありますが、ようやくみとめられるくらいにコホーテクが写っておりました。(すべて三脚に固定して写す)

これは不思議な複雑な曲線です。多数の多色からなる光跡がランダムに走っており、中には鋭く屈曲したものもあり飛び離れて異なった径路に走っているのも数本あります。貴誌のそれと同じく複雑に断続しておりますね。この時点では小生、カメラに気をとられ、熱中していたのでまったくこの光体に気付いておりません。いつ写ったかもわかりませんでした。

時刻はだいたい午後5時40分頃と思います。露光は30〜50秒でしょう。カメラの方向はだいたい天空、西方より少し南寄り、(250度付近)と考えます。2枚目、3枚目はそれぞれ、40秒、60秒ぐらい、キャノンの方は2枚共60秒ぐらいの露光です。(すべて開放)。曲線のピントはたいへんずるどく鮮明です。しかし、地物、星像らしきものはわかりません。光色はいろいろあるようできれいな赤色も何本かあります。これはネガでも判別できません。この光条に対して光学的な作為は全く無いことを保証いたします。

(当日のすい星の位置はカメラの向いていた方向西南西20度ぐらい、高度5〜6度ぐらい。新聞発表による)

当日は正月来の(12月頃より引きつづいて)好天でした。風はこの場所では(北風)けっこうあり、冷たく、えりまきとオーバー、手袋をしていました。特に暗くなつてから風は強くなりました。西方、南方には、この時刻、雲はまったく無く、富士のシルエットがきれいでした。周囲には人はおりませんでした。

ところで光条は、カメラのブレからきたり、多重露光によるものではありません。小生のカメラは2台共普通では多重露光できませんから。光条の方向は全くランダムですから、特定の光点をカメラレンズが偶然に走査したためのもとは考えられません。全く偶然に写ったとしか考えられません。この時刻、航空機が西方の空を飛んだ様子はありません。ここからですと、夜間でも航空機のライトは良く見えるはずですが。小生天文観測の方はまだかけだしです。大きなテレスコープも持っておらず、わずかに8×30プリズムで星野を眺めたりする程度です。天文には興味がありますし、視力の点でも観察力の点でもある程度自信はあります。特にコホーテクすい星には熱中した方です。



科学トピックス

宇宙に生物が？ 電波を

オーストラリアで観測

オーストラリア連邦科学産業研究機構の宇宙電波部（部長B・J・ロビンソン博士）が最近、宇宙空間からの電波から有機化合物の存在を示すデータをキャッチしたことを3月19日にあきらかにしました。

銀河系の中心部に位置している電波源である射手座B2と、オリオン座Aの方向からくる電波を、シドニー郊外パークスにある直径63mの電波望遠鏡で観測し、波長を調べたところ、メチルアミンとチ

オホルムアルデヒド特有のスペクトル線が検出され、これらの有機化合物はたんにく質の存在を推測させるわけではなく、宇宙に生命体が存在することを暗示しているのではないかとされます。

本年1月、米航空宇宙局（NASA）が流星ジン中から脂肪酸を検出したという発表（本誌4月号科学トピックス参照）とともに、地球以外に生命体が存在することをさらに濃く裏づけたことになりました。

無重力状態は

代謝に影響を与える

●ソ連生物実験衛星の成果

73年秋に衛星軌道に打ち上げた生物実験衛星コスモス605号は、10匹ものネズミ、カメ、昆虫、キノコ、バクテリアなどを乗せて約3週間後の11月22日に回収されました。

この実験は、生体にたいする宇宙空間のいろいろの影響を綿密に調べることをねらったものであり、衛星内は完全に自動化されていました。比較対照のため地上でも同じ種

類の同じ数の生物を同じ容器に入れて育てました。回収地点では移動生物実験室が用意されており、帰ってきた生物を検査し、あるグループについて帰還後25日間にわたって観察したり、また、もう一つのグループはもっと長期間にわたって宇宙生活の後遺症が調査されました。

その結果、長期間の無重力状態は代謝にかなりの影響をおよぼすことが確かめられたようです。たとえば、動物では組織の呼吸作用が衰え、体温が下がり、いくつかの組織では機能が低下して脚の骨などはもろくなり、脾臓、腎臓、副腎、甲状腺などの器官や内分泌腺には重さの変化がみられるものもあったということです。これらは比較的軽度のもので病理的な変化はみつからず、帰還後3〜4週間もすると対照群の動物とほとんど違いがなくなったといわれます。そして、無重力状態で生まれたショウジョウバエの一代目と二代目の間には、大きさや遺伝情報の性質にも差がなかったようです。また、キノコの場合は地上のキノ

ノコと対照的に、ヒョロヒョロの柄にどっしりしたカサをつけた奇妙なかつこうだったそうです。

このコスモス衛星の成果とあわせて、アメリカのスカイラブの実験観測結果が期待されます。

水素ガスの巨大なかけ橋！ 銀河系宇宙マゼラン星雲

オーストラリアのキャンベラにあるマウント・ストロムロ天文台のドンアルド・マシューソン博士の研究チームは、73年後半にパークスの電波物理研究所の直径18m電波望遠鏡を使い、水素ガスから放射される電波源を宇宙地図に描き込んでゆき、その存在を確認したものです。

この「かけ橋」は『マゼラン・ストリーム』と名付けられ、マシューソン博士らの推算によれば長さは16万4千光年にもおよんでいて、水素ガスの総量は太陽質量の10億倍近くもあり、毎秒200kmのスピードでマゼラン星雲からこの銀河系宇宙に向かって「噴出」しているというこ

とです。

「約5億年前にマゼラン星雲が銀河系の近くを通過した際に、重力の作用で噴流が生じたらしい」と同博士は述べました。

なお、写真撮影を試みましたが、視界が悪いことなどもあり成功していません。

火星大気は

水蒸気を多く含む？

●ソ連火星6号の観測結果

ソ連の自動惑星間ステーション火星6号はこの3月、火星への軟着陸には成功しなかったようですが、それでも大気の成分、土壌の構造、温度や表面の起伏などの新しいデータを送ってきたといわれます。特に火星大気中に含まれている水蒸気は、従来から考えられていたより数倍多いことがわかったということが注目されています。また、火星表面近くでの磁場は、惑星間空間におけるよりも7〜10倍の強い磁気を記録したといわれます。65年、アメリカのマリナー4号が火星からの距離9800kmを通過した際、史

上初の火星表面の大写真写真22枚を送ってきたときの磁場の観測では、弱い磁場のため

か検出できなかったといわれ、同4号は火星について表面の大気圧は地球の0.8%（地球上空30kmとほぼ同じ気圧）で、その組成は炭酸ガスがほとんどであり、わずかな窒素と水蒸気（地球の砂漠くらい）であって、酸素はまったく発見されませんでした。気温については、赤道地方の正午で20〜25℃夜間でマイナス85℃くらいであり、また火山活動の証拠が見られないので構造地質学的に不活発であるという考え方が生まれ、クレターターの発見とあいまってそれまで生命体の存在を感じさせた運河説がしりぞけられました。さらにまた、その後続いたマリナー6号、7号は極冠がドライアイス（CO₂）からできていることをつきとめました。こうして生命はおろか、水までも無い死の世界であるという考えが定着したかにみえましたが、71年11月に火星の衛星軌道へ乗ることに成功したマリナー9号が、まったく新しいデータを提供し

たことでマリナー4号のときの考え方を根本的に改定させることになりました。

特に9号の多くの写真は4つの大きな火山脈の存在を示し、流水によってつくられたように見える峡谷や、くねくねとうねった水路状の支流があることをあきらかにしたのです。

今回のソ連火星6号のデータを研究していたソ連の科学者がのちに火星表面の白い不思議な斑点について、奇妙な白い斑点は水蒸気の爆発的な噴出によるものかもしれないと述べました。ソ連科学アカデミーの研究員であるV・ペトロフスキーは、3月16日のタス通信記者会見で大気中の水分を満たす水源があるらしいと語り、この水は火星地下に水結している巨大な水源ではないかということです。地表が地震、またはイン石などで割れると大気中にすさまじい蒸気の爆発が起こるかもしれないといっています。この地下の水源が火星表面の大きな穴を満たし、これが直径2千kmのなめらかな地帯に相当するのではないかとペトロフ

スキーは述べています。

今後、火星6号の詳しい観測データが公表され、マリナー1探査機のデータを加えて検討された場合、まったく新しい事実が発見される可能性があります。

コンドン博士、死去

66年に米空軍の委嘱を受けて、いわゆる「コンドン委員会」を組織し、2カ年の歳月と60万ドルの費用をかけてUFO問題を調査した結果、UFOは存在しないという声明を出して世界のUFO研究界から総攻撃を受けたエドワード・コンドン博士は、3月25日の夜、米国コロラド州ボルダーのボルダー・コミュニティ病院で心臓病のため72歳で亡くなりました。

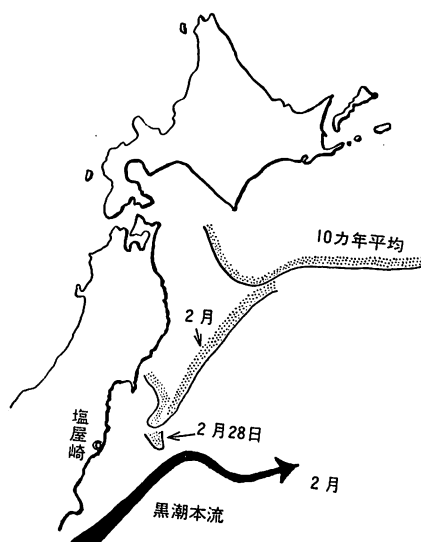
博士は第2次世界大戦の初期に米政府の依頼により原子爆弾の開発研究を始めた科学者グループの一人で、マイクロウェーブ・レーダーの研究を行っていた頃、友人のロバート・オッペンハイマーのすすめによりニューメキシコ州ロスアラモスの秘密原子力

研究所の次長となり、その後

カリフォルニア大学へ移ってウランウム235の生産を援助しましたが、45年から51年までは米商務省標準局長となりました。しかし、非米活動委員会と当時の同会代表であったリチャード・ニクソンらの圧力により、局長を辞任しています。54年にはミサイルの円錐形弾頭を開発し、これが宇宙ロケットの大気圏突入に際して宇宙飛行士を安全に帰還させるのに絶大な効果をあげました。

異常に南下した冷水域

3月4日の海上保安庁の調査によると寒流である親潮の一部分と思われる表面水温が3℃以下の冷水域が、本州の東岸で異常に南下しており、その南端は例年より450kmも南の福島県塩屋崎沖にまで達していることがわかりました。表日本の雨なし記録や日本海岸の豪雪などと同様に、異常気象の一つと同庁ではみているようですが、水産庁の調査によりますが、アジ、サバ、メバルが仮死状態で岩手県の海岸に打ち上げられたり、冷水に強いスケソウダラの漁獲が例年の5倍にもなったりしており、また、岩手県のワカメ、



ホタテ貝の養殖に悪い影響を与えるのではないかとみられています。

東北区水産研究所海洋部、関係県の水産試験場とともに調査船を出して冷水域の動きをさぐるということです。原因はまったく不明です。

日本列島の

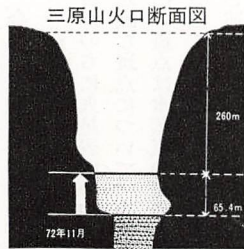
地底に異常あり?!

●三原山火口底が上昇!

この2月28日噴火した伊豆大島の三原山火口底が、異常に上昇していることを関東圏地震予知調査グループ(代表木村政昭理学博士、通産省地質調査所第一研究室長)が明らかにしました。そして、この異常な上昇は近く三原山の大爆発と相模湾周辺に大地震(M7以上)が起る前兆であると警告しています。

三原山の火口調査で火口底が、2月28日の噴火をはさんでこの1年4カ月のあいだに65~70mも上昇していることを確認したわけです。この火口底の上昇が大地震に関係があるというのは、東大地震研究所の中村一明助教授の学説

で、関東地方の大地震に先立って三原山が必ず噴火していること、噴火の前には火口底が盛り上がっているというものです。「大正12年の関東大地震(M7.9)の8カ月前に三原山が大噴火している。そして昭和28年の房総沖地震(M7.5)のときには3年ほど前から噴火が続き、この2回とも噴火の前には上昇していた火口底が地震後下がっている」と同助教授は述べています。



70年9月の秋田県駒ヶ岳の噴火、そのあとの浅間山、

73年4月の小笠原諸島西之島新島、74年3月1日の鳥海山、それに続く桜島、三原山の噴火などがありました。火山列島の日本のことですからこれらは最近になってとみに増えたとはいえないにしても、活動中の西之島新島と鳥海山、三原山、桜島がほぼ同時期を同じくして活動を活性化さ

せたことが重要なことだろうと思われます。

●東海地方の地震観測強化!

そしてこの2月28日に開かれた地震予知連絡会(会長・萩原尊礼氏)は、東京を囲む東海地方を観測強化地域に指定して精密観測することになったということです。東京直下型の地震はいつ起きても不思議ではない状況下にあるといわれ、東海地方でも地殻変動が続いている状態であり、特に東京では震度5(強震)以上の地震が昭和4年を最後に40年間も起きていないので、今回の観測網の強化ということになったように、大変に注目されることです。

“水星の素顔” マリナー

10号近接撮影に成功

●水星に月?! ナゾを深める

3月25日午後(アメリカ西部時間)、無人探査機マリナー10号は水星のテレビ映像を初めて送ってきました。

水星から360万km離れたところで撮影したもので、赤道付近に明るい斑点があるこ

とを映し出していました。さらに184万kmに近づいた写真ではクレイターが多数写っており、月面を思わせる素顔を見せてくれました。8万8千、3万5千、6千kmと近づきながら送られてくる写真は月にあまりにも似ているため素人目には区別がつけにくいほどです。ただ、月面の海(暗く見える低地)や山脈のような地形構造は写しだされなかったようです。

これらの写真を分析していたアメリカの科学者、アリゾナ州キットピーク国立天文台のブロードフット博士は3月31日に、水星を回る物体があつてこれが水星の“月”であるかも知れないと発表しました。「水星とは離れて、その周囲を動いている強力な放射源があることは明らかで、それが水星の周囲を回っているのか、水星の側を通り過ぎたものにすぎないのかを決めるだけの資料はまだないが……」と述べました。このマリナー10号の紫外線測定資料が水星の周囲を動くおそろく太陽系33番目の衛星だろうと発表した翌日に、ブロードフット

ト博士が前日の発表を取り消して間違いであったことを認め、マリナー10号がキャッチしたのは水星の月ではなく遠い星から反射してきたもので、それが動いて見えたのはマリナー10号自体が動いていたためであると述べました。ところがこの重要な写真はすぐには公表されず、ナゾを深めたようです。

原子配列も鮮明に!

超高性能電子顕微鏡完成

●分解能1.4オングストローム 京都大学化学研究所で世界にまったく前例のない、原子像をキャッチできる電子顕微鏡が株式会社日本電子との共同研究により開発され、各方面から注目を集めています。光学レンズにたとえと球体に近いレンズにあたる磁界レンズを用い、加速電圧50万ボルト、波長0.014オングストロームの電子ビーム、精度を高めるため試料は液体(ヘリウム(-269℃)で固定するなどの特徴があります。

● 連載科学記事

宇宙・引力・空飛ぶ円盤

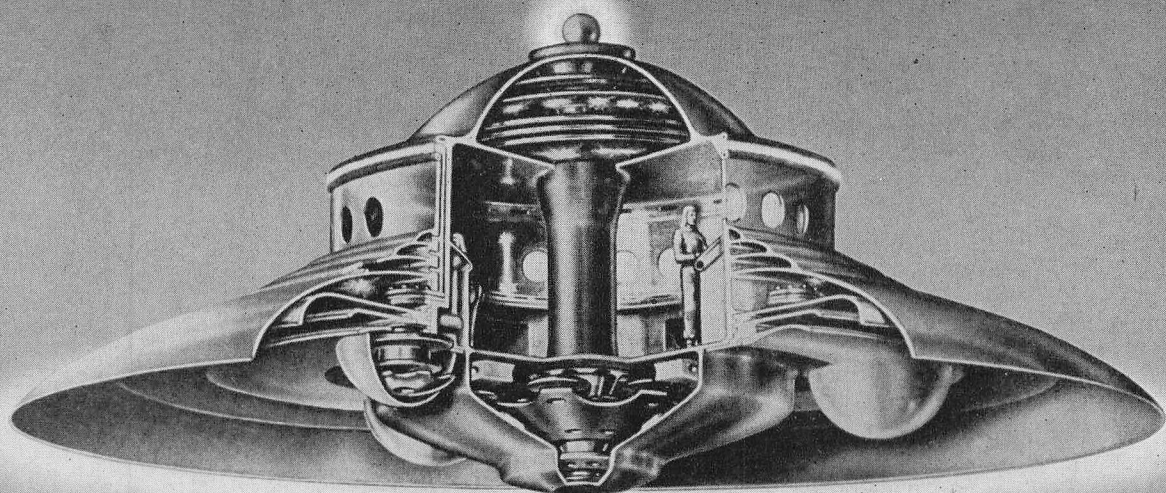
イギリス工業デザイン協会会員

レナード・クランプ

(1)

- 序
- 著者はしがき

- A 宇宙飛行の限界
- B 円盤型航空機の航空力学
- C 空飛ぶ円盤の分析



序

一九五四年二月十五日の朝、十三才になる少年ステイヴン・ダービシャーはなぜかそわそわし始めた。そして落ち着かない気分がずっと続いて家の裏山へ登りたくなってきた。英国ランカシャーのコンストーンという町の丘である。なぜ登りたくなったのかわからない。ただそうしなければならなかったただけだ。そこで八才になる従弟のエイドリアン・マイヤーを連れて小さなかわいしい山を登って行った。小鳥の写真でも撮ろうと思って小型のコダック・カメラを手に入れている。小鳥を観察するのが少年の大好きな趣味の一つなのである。

やがて二人は頂上へ着いて、ステイヴンはカメラのレンズを「無限遠」にセットした。そして細長くきらめいているコンストーン湖の方へ向けた。これは谷間を約十九キロ離れた所にある湖で、ここで有名な「ブルーバード」スピードボートが世界記録を樹立したことがある。その日は寒くて曇ったり照ったりしていた。丘のむこうのコンストーン・オールドマン山（海拔七三メートル）の峰が雲の中にかくれている。午前十一時にエイドリアンがその山の方を見ており、ステイヴンは反対側を見ていた。突然エイドリアンがステイヴンの肩をたたいて

叫んだ。「おい、あれを見ろ！」

太陽の方向から下方へ奇妙な丸い物体が降下しているのだ。それは約九〇メートル彼方の地面まで降りて、少し盛り上がりつつある土のむこう側へ消えたが、数秒後にまた現われてきた。すると急に物体は縦に倒れて、にぶいヒューツという音をたてながら空中を急上昇したが、それまでは完全な無音であった。数秒後にそれは雲の中に消えてしまった。

物体が地面のむこう側へ降りる直前にステイヴンは写真を撮ることに成功した。そして再度出現したときにもう一枚撮影した。だが具合のわるいことに、彼はカメラを正しくセットしていなかったため、写真がボケたのである。しかし綿密な検査をするのに差支えない程度には写っていた。

ステイヴンの話によると、物体は銀色のなめらかな外観を呈していて、「光は通過するが内部を見透すことはできない」ような金属またはプラスチックらしい物だという。（彼が探していた言葉は「半透明」だった）最初それは日光を受けてすぐく輝いていた。しかし上昇するにつれて雲が直射日光をさえぎったので、少年たちはもっと明瞭に見ることができたのであ

る。「それは固い金属のような物体で、ドーム、丸窓（複数）があり、底には三個の球がついていた。底の中心は黒っぽくてコーンのように突き出ていた。始めは三つの丸窓が見えたが、物体が少し回転したので四つ見えた。キャビン・ドームの頂上にはハッチのような物があつた」興奮しきった二人の少年は山を走り下りて、リトル・アロウ・ファームと呼ばれるステイヴンの家へ帰った。そして息を切らしながらステイヴンの父親のダービシャー博士に伝えたが、博士は最初信じなかった。しかし知的で寛容の精神に富んだ博士は息子をすわらせて、目撃したとおりを文章に書かせ、記憶どおりにスケッチさせたのである。

撮影フィルムはコンストーン村（二・四キロ離れている）で写真スタジオを経営しているパティソン氏の所へ持って行って現像してもらうことにきめた。だが何かが写っているようとはだれも思わなかった。しかし後日パティソン氏が息をきき切って走り込んで来た。「何か写っています。どうやら空飛ぶ円盤らしい」

少しぼけてはいるけれども、たしかにネガには一定の円盤型物体が写っている。三個の球体すなわち「着陸ドーム」がはっきりと識別でき

るし、黒い丸窓群とおぼしき物、それに底部には黒いコーン型の部分までがはっきりと見えるのだ。

だがこのことを声明する前にダービシャー博士はステイーヴンとエイドリアンに徹底的に詰問した。ウソをつけば自分や家族にどんなトラブルが発生するかがよくわかっていたからだ。

しかし兩名ともその話が真実であることを主張し続けた。あとで博士は言っている。「私はステイーヴンをよく知っているのですが、あれがウソをついていないことがわかったのです」それにあの年齢の子供があんなネガを偽造するとは私にも考えられないことである。家族で相談し合ったあと、何事が起ころうと、この事件はあまりに重要なので隠しておくわけにはゆかないことになった。そこでダービシャー博士は電話をかけたのである。

最初に反応を示した新聞社はデーリー・メールで、一名の記者をよこしてきた。この記者は他社の記者連すべてと同様に、その写真が本物であることにすっかり満足した。メール紙がそれをけなしたのは科学記者のJ・スタブズ・ウォーカー（彼は個人的にコンistonへ調査に行ったわけではない）の解説を載せたことぐらいのものである。それによると、ある条件下では雲

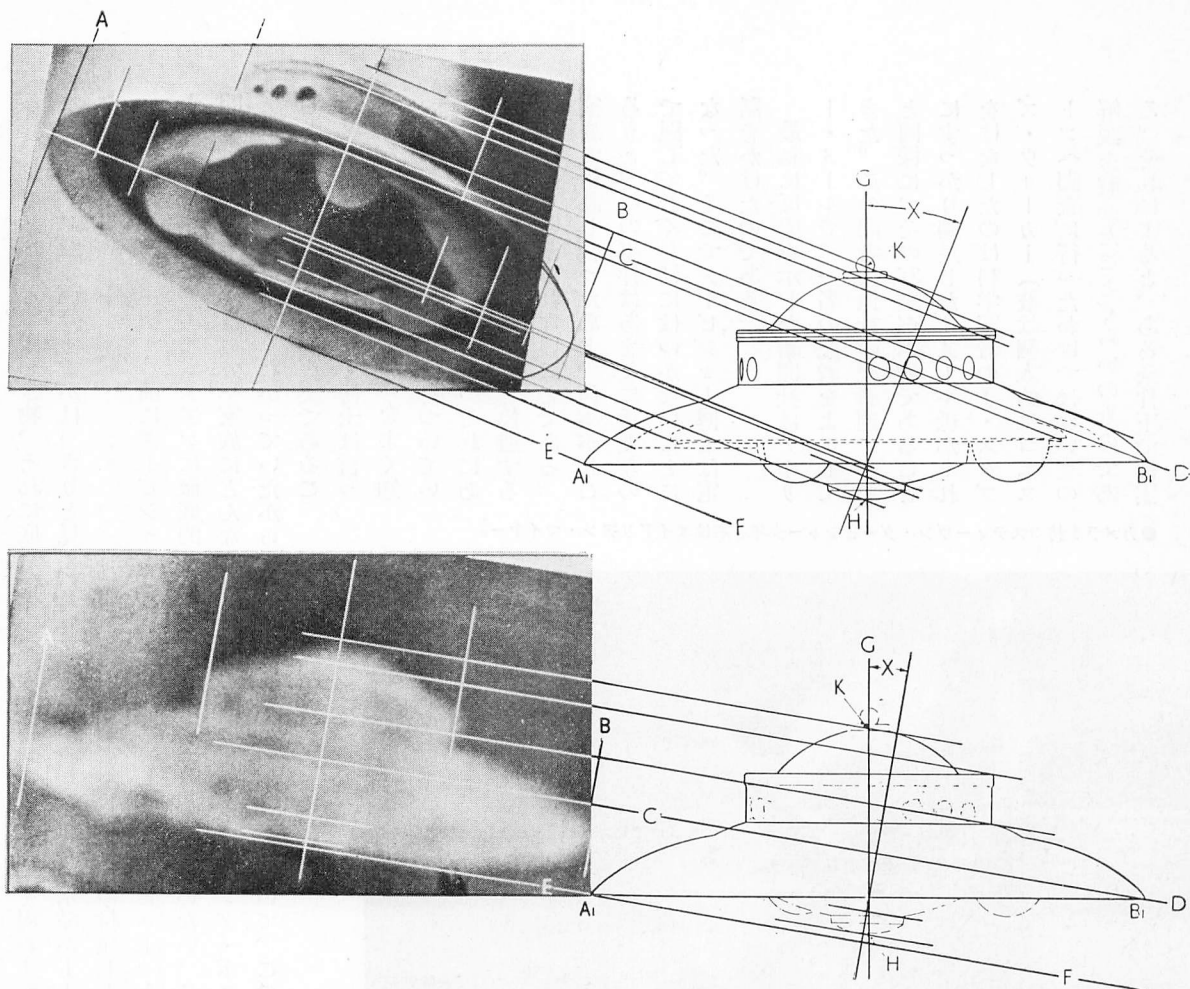
●カメラを持つステイーヴン・ダービシャー少年。右はエイドリアン・マイヤー。



の氷の結晶が一定の形を現わすかもしれないという。しかしどうして氷晶がドーム、丸窓、三個の球型着陸装置などの付属した円盤の正確な像を作り出し、しかもヒューツという音までたてるのかは説明されていない。その少し後にランカシャー・イーヴニング・ポスト紙のアル・グリフィンが一頁をさいて、この事件の長文の

知的な解説記事を掲載し、比較用にステイーヴンとアダムスキーの円盤写真をかかげた。

私は二月二十三日にコンistonへ行って、二日半ほどダービシャー家の世話になった。その間、精神的な意味で青年期の段階をとつくのむかしに通過してしまったこの知的な信頼のける家族を徹底的に調査することができた。ステ



●ジョージ・アダムスキー撮影の円盤（上）とスティーヴン・ダービシャー少年撮影の円盤とをレナード・クランプが正射影法によって比較した図。両方共同型物体であることを証明した。

イーヴンに案内されて山にも登り、事件当時の模様が再演され、正確な位置もわかったし、カメラも綿密に調べてみた。まもなく明らかにあったのは、円盤の位置はわずか九〇メートル彼方にすぎなかったことである。というのは例の一部分の高台のすぐむこう側は地面が少し低くなっていて、それからオールドマン山の頂上の方へまっすぐに登り坂となつて続いているからである。

私はスティーヴンがカメラをセットする際にどんな誤りをやったかを見きわめようとした。彼は円盤が視野にはいる少し前にレンズを正しく「無限遠」にしたと確信しているからだ。彼は二つの動作の内、二つをやったと思われる。ジャバラを十分に引っ張り出さなかったために写真がボケたか、二五分の一秒にセットしないでバルブにして露出したかのいずれかである（注Ⅱバルブというのはシャッターボタンを押している間だけ露出する機構）。後者ならばきわめて容易にやれたことだろう。この安物カメラは一個のレバーのちょっとした操作だけでT、B、二五分の一秒、五〇分の一秒の順にセッティングできるからだ。Bと二五分の一秒の間のレバーの動きは約八分の一インチ（約三ミリ）で、コニストン湖の写真を撮ろうとかまえたときにシャッターを正しくセットしていたにしても、興奮しきっていた彼はレバーをうっかり動かしたかもしれないのだ。発生した事件の真相を究明しようとして私は同じ場所でのカメラ

を用いて、シャッタースピードやジャバラの状態を次々と変えながら数回の露出を試みた。そしてその結果をステイヴンのオリジナル・ネガと比較してみたのである。露出結果と像の出具合でオリジナルに最もよく似ていたのは、バルブと無限遠で約一秒間露出して撮った写真である。したがってこのカメラは正しくピントが合わされ、ジャバラも十分に引き出されていたにもかかわらず、ステイヴンはうっかりして二五分の一秒のかわりにバルブで撮影したと考えてよいと思う。この種の安物カメラなら容易に起こりやすいミスである。

私はステイヴンと一緒に山上をくまなく歩きまわった。難儀な山道を車で行き、道のまったくない所は徒歩で調べて歩いた。全体に銅の鉱坑、廃坑になった縦坑、水のたまったトンネルなどが散在している。こうした銅の廃坑が関係しているかもしれないが、今は何ともいえない。だがこれから先の記述にそなえてちょっと記しておく。

二日間私はダービシャー家に滞在したが、ステイヴンのいうことは一貫してスジが通っていた。好きなようにさせて思いきりしゃべらせだが、ウソやインチキらしい気配はなかった。また私は四人の新聞記者がステイヴンの話を少しでも変えさせたり食い違いを起こさせたりしようと巧みに誘導尋問したあいだ、その場に居合わせた、彼の話には矛盾はなかった。

これは両親からも確証されたことだが彼は

Flying Saucers Have Landed (注＝邦訳版「空飛ぶ円盤実見記」高文社刊)を全然読んだことはないし、アダムスキーの体験の要約すら読んだことはないという。ただし一九五三年九月三十日付のイラストレーテッド紙に掲載されたアダムスキー円盤の写真を見たことは認めた。彼がいうには、この円盤写真には三個の丸窓が一列に並んでいる円盤が写っているが、彼が見た円盤は一列に四個あったという。彼のスケッチには三個だけしか描いてないが、円盤が去って行くとき少し回転したために四個の丸窓が見えたのである。これは異なるタイプの円盤ではないかと彼は考えている。

しかし「未公開」のアダムスキーの写真類の一枚(写真版にするために右端を少しカットしなければならなかった「空飛ぶ円盤実見記」の口絵写真の原写真)には四個の丸窓が一列に並んでいるのがはっきりと見える。ステイヴンはこんなことを知らないのだ！

このことは他の証拠とともに彼が真実を語っているばかりかアダムスキーと同じ円盤(または同じ型の円盤)を見たのだということを私に確信させたのである。

私は円盤に関するこの刺激的な新しい書物の序文を書くにあたり、以上の件について詳述するように依頼された。昨年は円盤問題に関する仕事が増えた。これは主として古代ローマの年代記のような古記録からペンタゴン(注＝米国防省)の秘密ファイルに至るあらゆる記録類

からとった目撃報告の長いリストの作成の仕事である。これらは記録または参考として興味深く価値はあるけれども、単なる事件の羅列だけではさほど研究の進歩にはならない。今必要なのはこれらすべての資料の科学的研究であり、もっと知的な物理学者に受け入れられるような説明を出すことである。

このことにクランプ氏は成功したと思う。氏は明快な言葉を用いてわれわれに科学的探求の新しい展望を開いてくれたのだ。その探求においてささやかながらも粘り強い研究を行なえば報いとして宇宙旅行の秘密が解き明かされるかもしれない。私は宇宙旅行に関心のある人のすべてにこの書をおすすめる。現在ごく小さいロケット開発に費されている資金の一部分がクランプ氏の説の研究開発用の研究所設立資金にまわされれば、現在考えられている費用のかかる不便な方法によるよりもはるかに早く月世界へ到達できるだろう。

デスモンド・レスリー

(注)デスモンド・レスリーはジョージ・アダムスキーとの共著 Flying Saucers Have Landed の第一部を書いた人で、故チャーチル首相の甥にあたる英国の名門出身。本来は考古学を専門とするジャーナリストであるが、円盤研究家としても有名である)

●著者はしがき

本書は宇宙飛行の推進法に関する一つの理論を示そうという試みで書かれたものである。それは噴射推進法ではなく、いわゆる空飛ぶ円盤の運動からヒントを得たもので、私自身の多年にわたる観察によって裏付けられている。問題の取り上げ方は新しいかもしれないが、私の理論には奇妙な憶測などは含まれていない。むしろここで述べる話は討論に供し得るものであり、しかもきわめて古い、見なれた現象の別な一面を提示するものである。

空飛ぶ円盤についてはいろいろいわれてきたので、このような飛行体の存在についてはまず証拠を見つけ出すことが当を得ていると思われるが、本書は不必要な目撃報告類までは載せなかった。それらは円盤関係の多数の書物に出ているからである。読者はそれを読めばよい。そこで本書には私の理論に直接関係のある目撃例だけを引用することにした。

この書に述べる推進理論はもとと第二次大戦以前に考へつゝたものゝ、*『Flying Saucer (空飛ぶ円盤)』*という言葉が一般に用いられるようになった時よりもはるか以前のことである。そうすると、私は多くの目撃例の意義について並々ならぬ関心を持っていたのかとお考え

になるだろう。たしかにそのとおりで、入手できる情報を精査すればするほど、このような飛行体が存在するという確信は深まりゆき、私の理論に対しては正当性以上のものがあると確信するようになった。世界中の一般人から出てくる報告類が、私が夢想していた一現象の証拠を提供したのである。

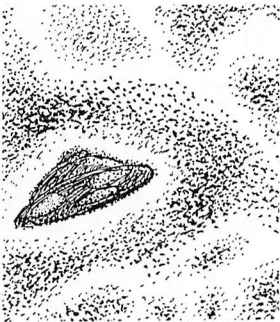
ロケットに熱中している人は当然のことながら宇宙飛行の全く異なる概念を認めるのに抵抗を感じるだろう。そして惑星間を円盤が飛んでいるという仮説に対して懐疑的な態度をとるだろう。しかし円盤に関する報告類は宇宙飛行の別な、もっと魅惑的な方法を暗示しているということを本書は示すものと思う。われわれは物理学の一層の進歩を待つ必要はない。先駆者というものは自分が新しいアイデアを思いついたとき他人のあとをついて走ったりしないものである。

この書は宇宙開発の専門家とアマチュア円盤ファンのために書かれた。そこで私は科学的精神を持つ読者に対しては忍耐力を要求したい。私のアイデアの難解な部分をはっきりさせるために簡単な類推法を用いて説明した箇所は特にそうである。読者のなかには円盤の存在を信じ

ない人もあるだろう。だが円盤の存在が認められなくても、本書は地球人が宇宙飛行の夢を達成するのに新しいより良い方法の可能性があるということをも、信じる人にも信じない人にも暗示するものと思う。われわれの時代においてすら、人間は周囲に存在する一つの「力」を解明するカギを発見し、それをすべての産業に、輸送に、そしてついには宇宙飛行に応用するようになるといっても差支えないだろう。

ブリケット・ウッドにて

レナード・クランプ



A 宇宙飛行の限界

ロケットによる宇宙飛行の可能性について多くの書物が書かれている。イギリス宇宙旅行協会会長アーサー・クラーク氏は、J・D・バーナル教授が人間は結局宇宙空間に都市群を建設するだろうと述べた様子を伝えている。これは小さな自給自足の世界に似ており、この太陽系から宇宙旅行に出かけて遠い銀河系の未知の惑星を探索しようとする数千人の人々を住まわせるものである。その旅行は数世紀かかるだろうから、もと出発した人たちの子孫だけが到着するだろうという。また作家のなかには、こうした植民団の子孫は宇宙旅行の本来の目的を忘れて、地球に関する物語を神話にすぎないと思うかもしれないと書いているものもある。彼らは休みなしに宇宙空間を進行し続ける。それでわれわれは絶えまなしに惑星から惑星へ、太陽系から太陽系へと、まるでわれわれが夜間にシヨップ・ウインドーをのぞき込むような調子で渡り歩き、その間に生涯を終えるような人間がいるかどうかと考えさせられる。それとも、はるか遠方の銀河空間といえども人間の到達範囲内にあり、地球上の一生涯の期間よりも短いと考えの方がもっと合理的だろうか。相対論者によればこのようなことは不可能ではないだろうとい

う。アインシュタイン博士は、人間が光速に近づくとき奇妙な事が起こるといつている。時間は次第に遅くなり、質量が増大して、ついに光速に達すると質量は無限大となって、そのためにそれを（質量を）動かすには無限大の力が必要となるという。相対論者によれば、一〇〇光年彼方の星へ光速の九九・九パーセントの速度で宇宙船により帰還飛行するには二〇〇年ほど要するが、船内の乗組員は自分の時計で計ってわずか九年しか経過しなかったというだろう。このような奇妙な現象はローレンツ収縮と呼ばれる自然現象に一部分属するもので、これは光速に近づく速度で進行する固体のすべてに発生するのである。

もちろん実際には、もっと低い速度でも、ごくわずかに（無視してよいほどに）同じ現象が起こるのだが、収縮と質量の増大はニュートンの測定法では検出できない。これは必ずしもニュートンの諸法則が不正確だというわけではない。ただ、日常のいろいろな物理現象や時速数千マイルまでの速度に対しては一組の測定器具があつて、その記録は全く正確であるが、光速に近づくにつれて以前は考える必要のなかった新しい要素を考慮に入れねばならないというに

すぎない。

アインシュタインは多くのいろいろな方法で理論を証明しているのので、それに関して議論の必要はまずないが、忘れてならないのは、アインシュタインの理論がニュートンの法則の限界を説いているのと同様に、光速に関して、もっと進んだ法則を求める必要があつてもよいということだ。私にはよくわからないが、光速限界説は結局もう一つの「通り抜けられない音速障壁」となるかもしれない。とにかく観測所の報告類がより所とするべき物ならば、空飛ぶ円盤は光速限界説で妨げられることにはなるまい。

アインシュタインは光速に関してもっと重要な知識をわれわれに提供するかもしれない。いかなる理論といえども必ず進歩があるからだ。たとえば一個の物体が光速を超えて運動しているとしよう。そうするとその物体はもとの物理的な状態のままにあるだろうか。ある意味では、速度というものは物体の質量を増大させる効果を持つのみならず、その物理的な状態を変える効果をも持つといえないだろうか。光速で運動する一物体が運動するには無限大の力を必要とする、とアインシュタインがいうとき、彼が間違っていないことはほぼ確かである。だが

実際は、その速度のために物体はもとの物理的状態にはないだろう。したがってこの公式はもう応用できないのであって、新しい状態にある物体の速度を計るには別な計測器機を必要とするのである。

後の各章で理論を展開してゆくにつれて、光速に近づく物体がこのような物理的状態の変化を受ける可能性のあることがわかるだろう。更に私の理論は、もし物体が（人工宇宙船のような物が）正しい方法で運動をするならば、宇宙には究極のスピードは存在しないことも示している。超光速などというものは数千年前に宇宙

飛行を征服した人々にとっては全く陳腐なことかもしれない。もっとも、われわれがこれ認めるのはきわめて困難なのだが――。

ロケットによる宇宙飛行とそれに付随した境界のすべてを考えると、空飛ぶ円盤といわれる乗物での宇宙飛行を考えることは別物であって、後者がはるかに異なった考え方を含んでいる。われわれは物体の速度の限界について独断的になりすぎてはいけない。まだ気付かれていない多くの要素があるからだ。われわれがいかなる科学の分野を研究しようとも同じことである。やらねばならない調査研究が常に存在し

ているし、長い時代を通じて認められ^{つづ}た概念で、捨てねばならないものもある。この体験にかんがみていうと、今や事情は変わってしまったと考えることにするか、それともわれわれの研究や学識は多くの事を伝えてくれるけれども、次の高度な発達段階においては既成の法則は適用できないという賢明な見方をするにしようか。これ以外の態度をとることは自分たちを偏見に縛りつけ、自身の破壊を早めることにもなるのだ。われわれは円盤に関する知識情報を考察しながら、こうした事を心に留めることにしようではないか。

B 円盤型航空機の航空力学

空飛ぶ円盤についてまじめに考えた人のなかにも、円盤の宇宙空間飛行説に反対する航空力学者がいる。だが彼らはその円盤型飛行体の航空力学的特性を無視しているのである。数年前に、円盤型航空機が建造され飛ばされたといわれているが、少しは成功したらしい。もっと最近ではカナダで円盤型の航空機が開発されているというニュースを新聞が流している。この航空機はまだ実験段階にあり、直径は一二メートル近くあるという（図1）。この画期的な特徴は翼そのものの型というよりもタービン発動機

にあった。これは固定翼の内部にあり、操縦者の中央座席の周囲で回転し、それにより機体に対してジャイロスコープに似た作用をして安定性を与えるとともに、垂直に離陸することも可能になるという。カナダ・A・V・ロウ社の会長ロイ・ドブソン卿は、このような航空機をほぼ垂直に上昇させる実験がイギリスで行なわれて成功したと述べている。「この線に沿った航空機が完成されねばならぬ。われわれはとてつもなく長い滑走路を無限に建設し続けるわけにはゆかないのだ」ともいっている。どのようにし

てこの航空機がほぼ垂直に上昇するのは少々漠然としているが、機体を傾ける必要があることはまず確かである。着陸についてはまだ何ともいわれていないようだ。その機体の基本的なデザインは大体に円盤型である。「翼」の先端と尾端は空気入口と排気口になっている。空気は先端の入口から吸い込まれ、その大部分は普通の方法で内燃システムに送られる。残りの空気はエンジンを迂回して排気ガスと混合し、排気口中の中心翼を通して出て行く。

この航空機は時速二四〇〇キロまで出すこと

が可能だといわれ、「姿勢を変えないで」一八〇度のターンをすることもできるといわれている。これは何を意味するのか全くわからないのだが――。

もう一つわからないのは、正常な飛行中に回転エンジンがジャイロスコープに似た安定性を与えながら、しかも高速の曲技飛行中にジャイロスコープの偶力により機体が粉々にならないという説明である。実際は、中心軸の周りを回転しながらそんな急激な運動を行なうのは、本物の空飛ぶ円盤の能力なのである。これは航空力学やニュートン力学の分野からはずれるものののだ。

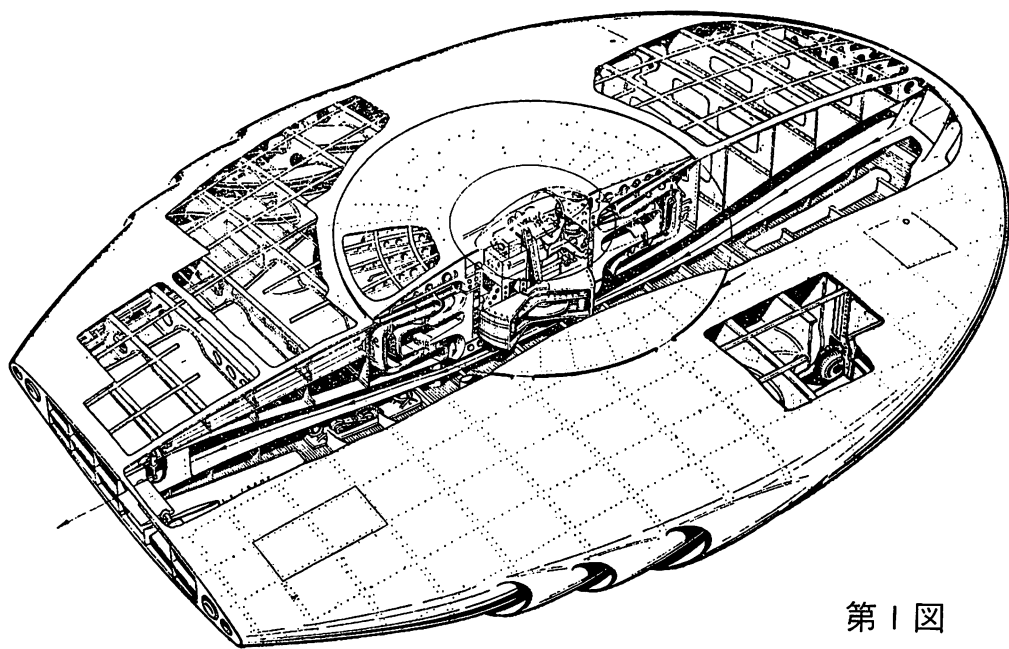
まず間違いないのは、アメリカだけが円盤型航空機のデザインに関心を示しているのではないということである。ソ連もこの成功を先取りしようと激しい競争をやっているにちがいない。最近円盤がベオグラードの民家の屋根をかすめ去ったが、それはユーゴスラビア空軍が作った実験機だといわれている。この小型円盤は直径一メートル、重量一・八キロ、最高時速四九・六キロで、無線操縦機であるという。

アームストロング・ホイットワース社の技師長W・Fヒルトン博士は、バーミンガムでイギリス宇宙旅行協会に対して講演したとき、大気圏外から帰還する宇宙船を地上へ着陸させることの困難さについて、次のように語った。

「宇宙飛行から帰ってくる宇宙船はマッハ三五のスピードで大気上層部に突入するだろう。こ

の状態なら数分間で燃え上がるだろう」

これを克服する一つの方法は、宇宙船がある角度で地球に接近し、それによって大気上層部をかすめることである。こうすれば宇宙船が耐え得る熱をすべてビックアップして大気圏外へ飛び去り、この熱を放つのである。船体が大気中にあるあいだは航空力学的なコントロールが応用され、そのコースは楕円に変えられて宇宙船は地球周囲の楕円軌道を飛ぶのである。ヒルトン博士の推定によると、この楕円軌道を一周するには四時間かかり、その内二分間は大気中で費されるという。速度が落ちるにつれて楕円軌道は次第に小さくなり、速度がマッハ五ぐらいになるとコースは変えられて着陸用となる。ヒルトン博士は宇宙船がこんなふうに操作される際の最良の形を研究した。これは熱を最少限に抑えるために、できるだけ表面積を小さくするが、効果的なブレーキの役



第1図

目をさせるためにできるだけ大きなバラシュートを装備する。博士は、平円形の物体が二〇度ないし三〇度の角度で飛ぶと、最上の結果が出ることを発見している。このタイプの航空機は少し不安定だけれども、中心軸を中心にして回転すれば容易に安定性が得られる。発生する衝撃波が船体から熱をそらしてしまうだろうが、平らな表面はまだかなりの熱を帯びるだろう。そこは鋼と石綿のシートをはさめばよいかもしれない。

私は最近の円形翼の復活が円盤現象と符合し

C 空飛ぶ円盤の分析

だれかが言ったことだが、工場内で行なわれている事を知ろうとすれば、その外側も調べねばならないという。これは円盤にもあてはまるだろう。同様にしてみれば円盤内部の印象を形成することができるかもしれないのだ。おそらく正確な印象ではないかもしれないが、一つの理論を公式化するのに役立つだろう。円盤の特徴の多くは報告されているので、円盤の最も共通な型に固執するならば、私の仕事は簡単

になってくる。

ここに種々の事実がある。これらは確認され徹底的に調査されたもので、それを認める

ているというわけではない。航空力学者の諸見解は疑いの余地はないが、円盤が惑星間を飛ぶという説を認める人々のなかには、円盤の構造を航空力学的なものだと考える人もあるという事実を見のがすわけにはゆかない。また彼らはそう考えたからといって非難される理由もない。結局、それはきわめて自然な考え方なのだが、それにもかかわらず、大変狭い考え方であることは、円盤目撃の綿密な調査が示すところである。

円盤型翼はきわめてすぐれた航空力学的な特

に躊躇する^{ちゆうちゆう}必要はない。躊躇すればわれわれの研究の妨げとなる。

以下は一般に知られている事実である。

- a. 円盤は一体に円形であり、コーヒー茶碗用の台皿^{たいし}をさかさにして、その中心部に小さなカップをのせた形に似ている。そこで「フライング・ソーサー」という言葉が生まれた。
- b. 円盤は青灰色の物質で建造されているらしい。
- c. 大体に円盤は中心軸を中心にして回転し

性を発揮することは事実だが、いわゆる空飛ぶ円盤については同じ事がいえないのである。一体に円盤の形は流線型とはほど遠く、その断面図を子細に検討すると、航空力学的な形に関係のある事を何も洩らしてはいない。

さて、円形翼の航空力学について少し考察したからには、各種の報告によって示される主な特徴を分析してみることになろう。そうすれば空飛ぶ円盤は航空力学よりも別なものと考えるべき理由があることがわかるだろう。

ているのがよく見られる。

- d. その多くは昼夜を問わず、強烈な光を帯びているのが見られる。

- e. 驚くべき加速と減速が可能で、空中に停止したり横トンを返りを打ったり垂直に上昇したりして、意のままに運動ができる。

- f. 数度の機会に円盤が音を出していたことが報告された。これは例外であるらしい。

大体に円盤は無音である。

次に円盤の主な特徴をあげることになろう。一見したところではこれらの特徴は故意の計画

の結果であるようには見えないが、よく考えてみると興味深い種々の可能性を示している。

(1) 大体に円盤は二つの主要部分から成っていると考えられる。外部の皿型の部分（これは回転しているらしい）と、内部の球根状部分（これは回転していないと思われる）である。これはどうやら中央部（球根状部分）が一種の船室または操縦室であることを意味するらしい。これが正しいとすれば、外側の部分は発動機の一部または全体を収容していることになる。

(2) 外観は金属のようで、その色は青味がかった灰色によく見えるけれども、高度に磨かれた金属の鏡のように日光を受けてきらめく光景がよく見られる。円盤によっては半透明だといわれているものもある。

(3) 完全な静止状態で空中に停止している円盤が見られることがある。次に中心軸を中心に自転し始めてから急速に飛び去る。ゆえにこの自転が「上昇」に対する必要条件だと仮定はできないにしても、外からは見えない何かの部分が自転し続けているということとは全く考えられることである。またこの自転部分是一種の起電力を作り出す巨大な発電機として役立っているとも考えられている。しかし後述において、円盤の自転はこれよりもはるかに重要な意義を帯びていることがわかるだろう。

(4) 船体の輝きは円盤の特徴のなかで最も不可

解なものの一つであろう。色は青から緑、黄、オレンジ、赤などに変化するのが見られるが、赤が最もよく見られる。

円盤は一種の半透明な金属で作られており、その輝きは乗組員の人工的な「照明」にすぎないのだといわれている。チャイルズ機長の事件でこの確証らしきものがある。その長い葉巻型の船体はキャビンからマグネシウムの閃光に似た強烈な光を放っており、これと同種類の不気味な光は他の円盤類にも共通して見られる。この説は一応もっともだと思われるが、他の色についてはどうのように説明すればよいのか。それらの色はどの部分にあてはまるのか。矛盾を示してはいないか。そうかもしれないが、重要な事実が一つある。白、オレンジ、赤などに光る円盤の多くは地上から見られており、その際、円盤の底部も見られたのである。空中から見られたと報告されたかなりの数の円盤は、青灰色の外観を呈していた。そうすると一つ推論できることがある。人工照明説が正しいとしても、円盤の下半分は何かの理由で色に変化しやすいということである。だがもっと重要な可能性は、さまざまな色光は本来全く表面的なものであるという点、すなわちそれらの色は円盤をとりまいている空間で発生するのかもしれないということである。たぶんもっと重要なのは、円盤によって示される各種の色光は、われわれの研究所で見られる、よく知られた電気現象に似てい

るという事実である。

(5) この不気味な光が円盤の最も神秘的な特徴であるとすれば、驚くべき加速度は最も不可解な事である。このすさまじい加速度は経緯儀とレーダーで測定されている。それが後の各章で示される理論の主な理由の一つである。円盤が空中に停止したり垂直に上昇したりする性能は、ヘリコプタータイプの翼すなわちローターに属するものであるが、ちょっと考えればこれは違うことがわかる。アディックス機長が目撃した事件のように、円盤がまるで巨大な車輪のように空中に縦になって旅客機と並行したという場合、その推力の中心線が地表と平行しているのに、航空力学的浮揚理論で円盤自体を空間に浮かべることができなくなる。飛行機が高速で低空を飛ぶ場合は、かなりの音を発するのが普通である。しかるに音がしなかったとすれば何か異常な物が動いていたと考えてもおかしくない。私は例外的な解釈を見つけたと思う。しかも問題はまさに空飛ぶ円盤なのである。少数の例を除いて円盤は全くの無音であった。そこで考えられるのは、円盤がいかなる動力を用いているにせよ、可聴帯域以外の周波数の波動を放射しているにちがいないこと、その性質は電氣的なものか、それともわれわれには全く未知な何かにかが

ないということである。私か他のだれかが完全無音のガスタービンを作るのは困難である。音を立てないようにするだけでも、このようなアイデアをだめにしてしまう要素が別にあるからだ。したがって揚力を発生するために円盤の外側のリング状部分に何が仕掛けてあるにせよ、それはわれわれが知らないような物であろう。

円盤は一体に無音であるというのは本当だがたまに音を出すことが知られている。ついでは、音を出す。蜃気楼を想像するのはむづかしい。かりに想像したいと思っても、そんな現象を書いた報告があればインチキとして無視されるだろう。ちょうどこうした事件が米国アイダホ州サモン・ダムと呼ばれる場所で起こった。二人の鉱夫が清涼飲料を飲んでいたとき、空中に奇妙な聞きなれぬ音がしたのである。それは急速に大きな唸り音に変わってきた。

空中から二人の方へ二機の円盤が飛来してきたのだ。美しい物体である。完全な鏡のようにピカピカと輝き、その光は驚くべきスピードとよく似合っていた。これは円盤が音を立てるようになる条件があることを意味する。

たぶん重要なのは、円盤が音を立てることにきめたとき、明るい日に太陽光を反射する鏡の表面に似た強烈な輝きを見せたことにある。さほど認められていない別な説としては、円盤のなかには用途に応じて各種のタイプの動力発生

装置を持っているのがある、というのがあ

● 各種の型の要約

円盤の簡単な分析結果を考えると、次のように要約すれば、これから先の研究にガイドとして役立つかもしれない。これは十九世紀から現在までに及ぶ報告類のなかの、すぐれた部分からとったものである。もっと詳細な知識を得たい方は他の著書類を参考されたい。

第2図

(a) このタイプの円盤は目撃報告のなかに出てくるものとして最も普通のタイプで、大きさや型にやや相違はあるにしても、このタイプのものはスカウト・シップ（偵察機）として役立つと思われる。

(b) あらゆる円盤のなかで最も単調なこのタイプは、特徴ある形を示していないように見える。普通は円形で、高さは直径の三分の一程度。無人操縦機であることにまず間違いない。直径は三〇センチから数メートルに及ぶ。その主な機能はおそらく「遠隔測定」または「精査」であろう。

(c) カカト型の円盤が世界各地で非常によく見られる。この特殊な型は普通の円盤の尾部の「ケバ」で起きる幻影なのだという推測は全く正しくないようだ。もっとも、よく知られている「光輪」現象は中心部に見ら

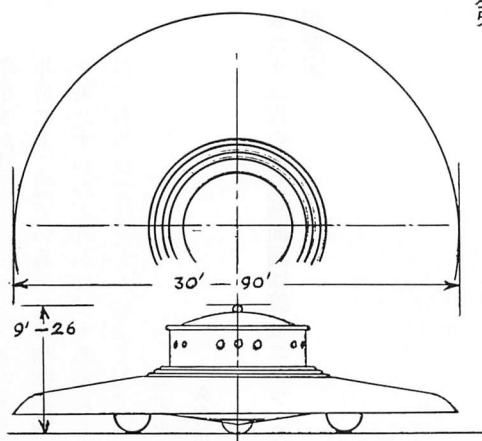
れることがあり、船体に何かの「穴」があるという印象を与える。

(d) 火のような光景を示す円スライ型の円盤は、アイスクリームのコーンがさかさになったようだと言われたりする。普通は全体が巨大で、大きなたい松みために空中に無音で停止してから消え去って行くらしい。実際にはこの現象はフォースフィールドの可視的な効果であり、コーンの頂上部が円盤なのだと考えられている。これにはある程度の正当性がある。数度の機会に円盤がこうしたコーン現象目撃地域を離れるのが見られている。

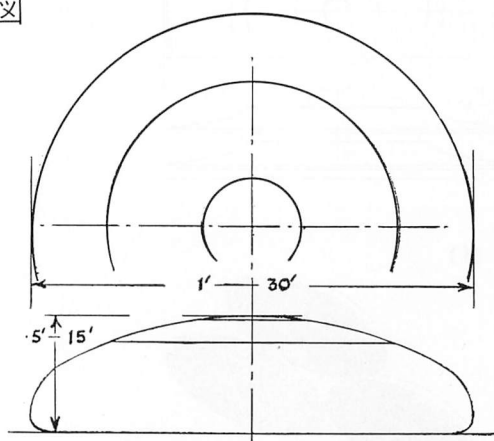
(e) 二重デッキの円盤が見られている。ただしシングル・タイプの円盤ほどにひんばんではない。この二重デッキ構造の理由は全く明らかではない。これは二機の円盤が重なったのかもしれないが、よく調べてみると、上部と下部の両面を持っているように思われる。収容力の問題でこういう構造になったのかもしれない。

(f) この「フライング・クラブ（トランプの記号に似ているためにこう呼ばれる）」は三機編隊の円盤であり、実際には接触している。非常な高空でこんな三機の円盤が見ら

第2図



(a)



(b)

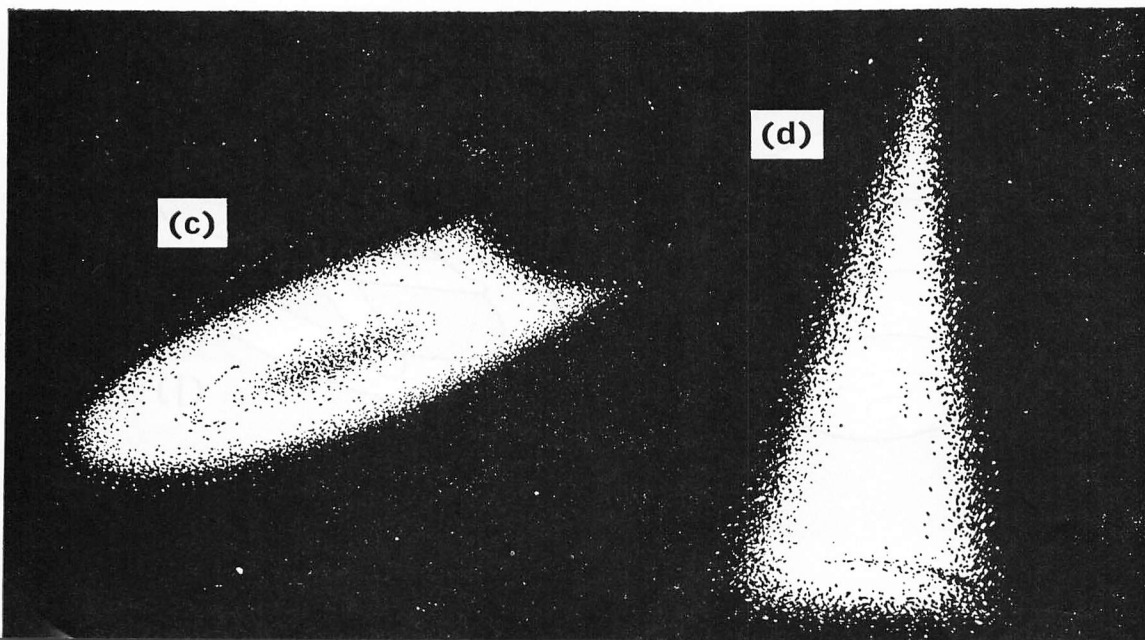
れると、こういう印象を受けやすいとも考えられる。

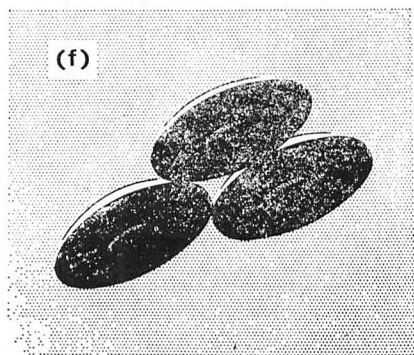
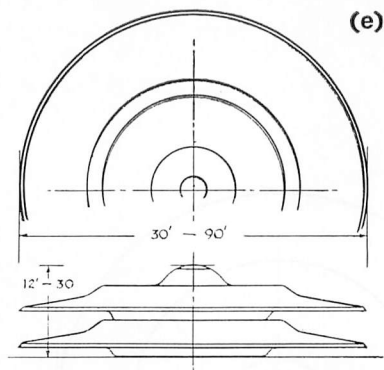
(g) 普通の円盤とほとんど同じほどに知られるようになった葉巻型または潜水艦型「円盤」は、常にかかなりの大きさをもつ。この巨大な宇宙船は形が葉巻にさほど似ておらず、しかも全然流線型ではない。その主な機能は円盤に対する母船の役目であることにまず間違いないようだ。惑星間を飛行する際の大部分はおそらくこの大母船で行なわれるのであろう。

(h) 星型の「円盤」は特殊な種類のものである。この型についてはほとんど何もいわれていない。主な機能は精査であるように思われる。この物体は円盤とは別な惑星から来るのかもしれない。それゆえ外観はやや異なる形をしているが、その機能的な各部分はよく似ているのだろう。もちろん同じ推理は他の円盤のあるものにもあてはまるだろう。ただしこの方は葉巻型または母船と共に見られるものである。

(i) 多数の球型物体が報告されているが、これを縦になった皿型円盤とは別な物と認める理由はほとんどないようだ。つまり観測者に頂上部または底部を見せているのである。だがこのタイプの円盤が存在し、大量輸送に使用される可能性はある。

(j) 更にもう一つの見なれぬ訪問者は、スポークのついた車輪型の円盤である。通常きわ

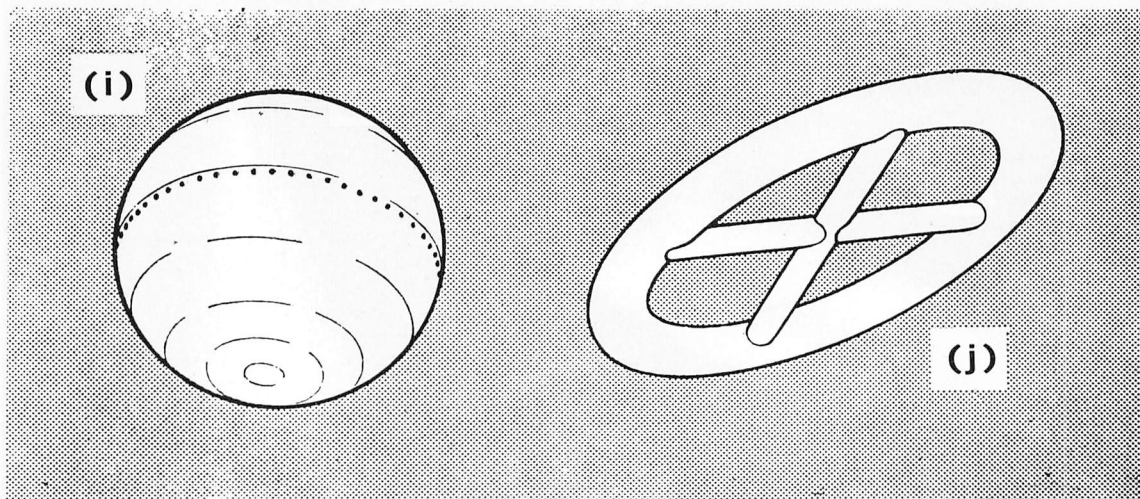
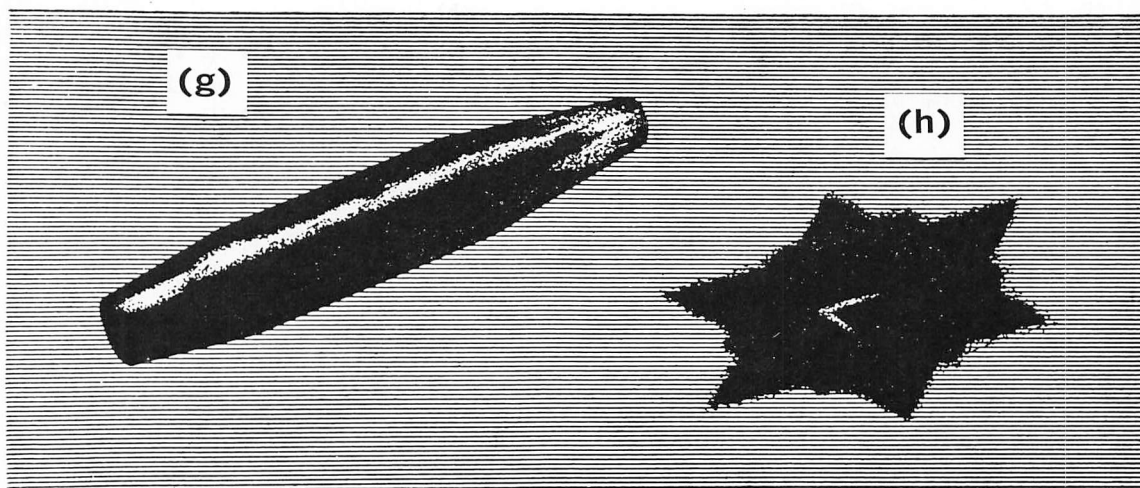




● 六十三頁の円盤断面図は筆者クランプによる想像図。

(以下次号)
久保田八郎 訳

めて大きくて、はるかな高空を飛ぶ。人工衛星または宇宙ステーションのデザインと非常によく似ている。この物体が同じ機能を果たすのかどうかは、もちろんわからぬが、ある点ではたしかによく似ている。



国内UFO目撃報告



① 江端陽子 (17)

富山県立泊高校普通科2年

② 一九七三年10月23日午後6時頃

③ 富山県下新川郡朝日町大屋海岸付近

④ 晴のち曇り、途中で雨が降りだす。

⑤ 5〜6分

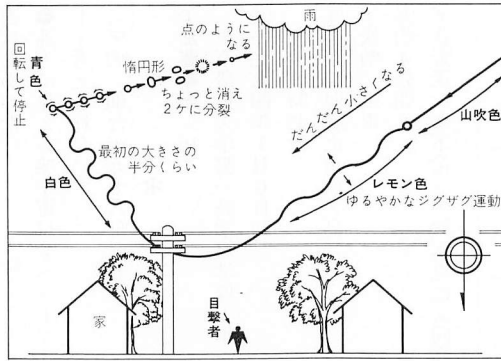
⑥ クラスメイト含め2名

⑦ 肉眼

⑧ 円形で、定規を普通にみて4mmほどの直径に見える大きさであった。物体の色は最初山吹色をしていたが、ジグザグ運動をして降下してゆくにつれてレモン色に変わっていった。そして上昇しはじめると白色になり、停止したときには青色に変わっていた。そのあと色の明るい部分と暗い部分が分離した。仰角70°、40°、南から東へ飛行。

⑨ 上方から直線的に降下してきて途中で上下運動をし、そのあと上昇しはじめた。物体が停止するとき回転しているように見えた。大きくなったり小さくなったり見え、もと来た方向へ回転しながら上昇していった。物体は一瞬間縦長に見えてから消え、またすぐ現われて2つの物体に分かれたかとおも

うとすぐさま合体して上昇していった。ちょうど雨が降りだして見失った。



(〒938-01 富山県下新川郡朝日町殿)

町一三八九

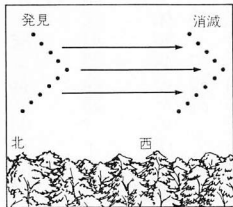
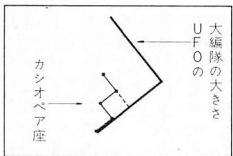
* * *

① 林 卓司 (14)

瀬戸市立祖東中学校2年

② 昭和48年10月下旬午後8時頃

③ 瀬戸市西一里塚町69の自宅裏の山



④ 快晴
⑤ 約2秒
⑥ なし
⑦ 肉眼
⑧ 夜、星を見ていると北東の空に約10個の光体がV字型に編隊を組み、右方向に移動してゆきました。南東の方角まで約2秒という速度で飛んでいって消えてしまいました。光体の大きさ、明るさ、色などはちょうど3等星ぐらいで、編隊の大きさはカシオペア座のWをVにしたものの2倍くらいありました。終始無音、飛行高度は約60°でした。あれはやはりUFOの大編隊だったのでしょか。

▼凡例▲

① 氏名 (年齢 職業・学校名)
② 目撃日時
③ 目撃地点
④ 天候
⑤ 目撃継続時間
⑥ 同時目撃者
⑦ 観測機器・方法
⑧ 物体について
⑨ 飛行状態その他
(内は目撃者の住所)

(〒489 愛知県瀬戸市西一里塚町69)

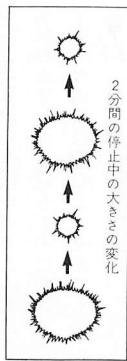
* * *

① 門脇圭志郎 (18)

私立新田高校3年

② 昭和49年2月10日

午前11時5分頃



③ 羽田国際空港付近
④ 快晴
⑤ 2分間ほど
⑥ 友人の隅田貞元君と付近にいた数名
⑦ 目視
⑧ レモン型、銀白色、仰角45°

⑨ 銀白色にかがやく円盤状の物体が地上約1000mのところまで、発光体が大きくなったり小さくなったりを数回くりかえしながら、西の空に2分間ほど停止していた。そして突如として上昇をはじめ消えてしまった。そのスピードから考えて飛行機だとは考えられ

ない。発光体の大きさは横10m、高さ6mほどと思われた。

(千91-01 愛媛県松山市溝辺町二

〇〇四)

①坂上香織 (16)

②一九七三年11月

29日午後6時

21~24分

③宮城県仙台市南

鍛冶町から五十

人町にかけて。

④風が強く南東方

面から吹いてい

た。東方には雲

はなかった。

⑤約3分

⑥母

⑦肉眼

⑧色は裸電球のよ

うな感じだったが

それほど明るく感

じなかった。また

物体の大きさは、

かなり遠くのほら

だったのでよくわ

からない。

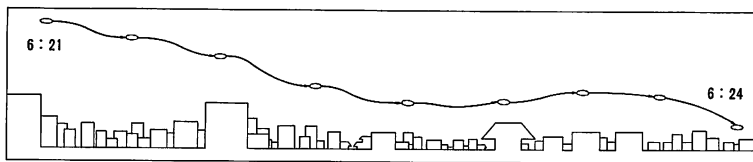
⑨当日はかなり風が強かったがその風

にさからってフワフワという感じで、

北北西から南東へ飛行していた。

●気球・風船・気象観測用のバルーン

ではなかった。風にさからって飛んで



いたから。

●雲? 間違えるような雲はなかった。

●流星? そうではない。ゆっくりり降下

していたから。

●飛行機? 不規則な飛びかたで、飛行

場もないところ。

●地上のヘッドライトが雲に反射?

雲はなかった。

●遠方に見える壊中電灯やヘッドライ

ト? 考えられない。

(千92 仙台市五十人町五五)

①加藤孝志 (16)

東京農業大学第一高等学校1年

②一九七四年1月6日(日)

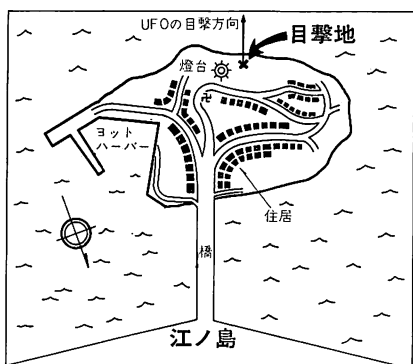
午後8時45分

③神奈川県藤沢市江ノ島

④快晴、弱風

⑤約4分間

⑥荻野茂・木下竜一・鈴木克己(同高



校1年16才) 石出 聡 (都立明正高校

1年16才) の4名

⑦高橋製1型10cm反射望遠鏡、オルソ

25mm (x40)

⑧⑨私は友人と天体観測のため江ノ島

へ行きキャンプを張って観測していま

した。8時45分、私は南西の低い位置

に2等星ほどの明るさをもつ火星のよ

うな色をした光体を発見しました。最

初まったく動くようすもなく明るさも

一定していたので、名のある星とおも

いスターマップで調べましたが、その

ような星などないことがわかり、もし

やUFOではないかと急いで友人に10

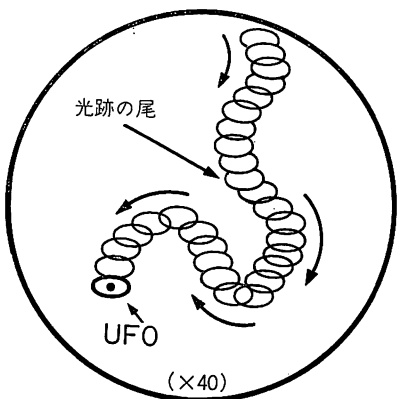
cm反射望遠鏡をむけてもらった。その

光体は速いスピード(旅客機の3倍ほ

ど)で、左の方向へ上下にこまかくゆ

れながら動き出した。友人がファイ

ダーで必死に追ってくれたので私は急



いで望遠鏡をのぞきこみ、激しく移動

し光跡の尾を引く楕円形の光体を一瞬

ではありますが観測することができま

した。その光体は中心がオレンジ色に

はげしく光り、そのまわりは明るい黄

色、外側が濃い黄色で光っていないよ

うに見えました。私のほか3人が望遠

鏡で見たのち、その光体は急に速度を

上げて降下し、しだいに明るさを失い

消えてしまいました。光体を発見して

から望遠鏡をむけるまで3分、それか

ら消えるまで1分ぐらいでした。仰角

15°、流星、停止流星、人工衛星、飛行

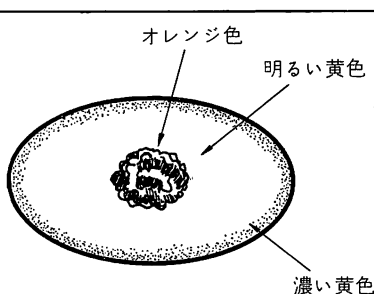
機などは観測の経験がありこの光体が

これらとまったく違うことは断言でき

ます。なお音は聞こえませんでした。

(千97 東京都世田谷区大蔵一―三―

一〇五)



上図のUFOを拡大したスケッチ

①島 敦志

②一九七四年一月十日

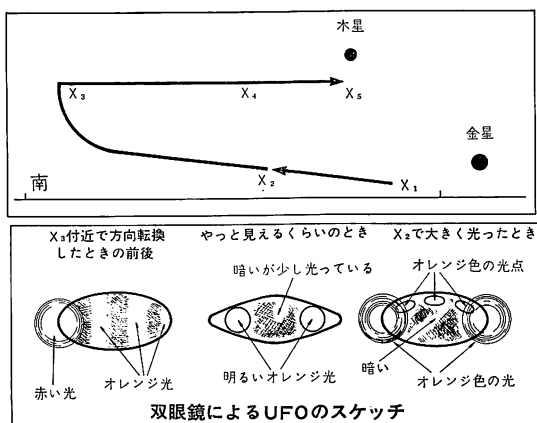
午後5時50分頃

③千葉県習志野市、東邦大学付属高校の寮（4階）の屋上で。

④晴

⑤5〜10分

⑥天体部員6名



双眼鏡によるUFOのスケッチ

⑦肉眼・双眼鏡(X8)
⑧X1 発見位置。最初は木星より暗いオレンジ色の光点だったのが、金星より大きく光ったあと元の暗い光点にもどってから移動しはじめた。
X2 一時静止。前ほどではないがまたかなり大きく光る。このとき、双眼

鏡で観察した。かすかな速度変化と光体の大きさの変化を繰り返しながら、X3に移動していった。

X3 一時停止、2〜3秒後に方向転換をした。

X4 肉眼では、飛行中赤っぽい光がオレンジ色のまわりに散ったように見えた。(このときの肉眼による観察者は3名でした)

X5 消滅。X1〜X5までの飛行中、双眼鏡による観察(観察者1名)では光体の楕円形がときどき傾いたような感じで円形に変化した。

光体の飛行速度は同じくらいの大きさに見える飛行機より速かった。ただし、目撃地点上空は羽田への飛行機の旋回場所でもあり、自衛隊の航空基地も近くにある。なお、光体の大きさの不規則な変化は1等星の5〜6倍から、見えないほど小さい光点までの範囲で変化していました。飛行機のライトの規則的減とは違うものでした。

(〒124 東京都葛飾区堀切五―四七)

* * *

①須永由貴子(19)

学習院大学1年

②一九七四年一月六日(日)

午後4時35分頃

③東京都練馬区旭町付近のグランドハウイツ内

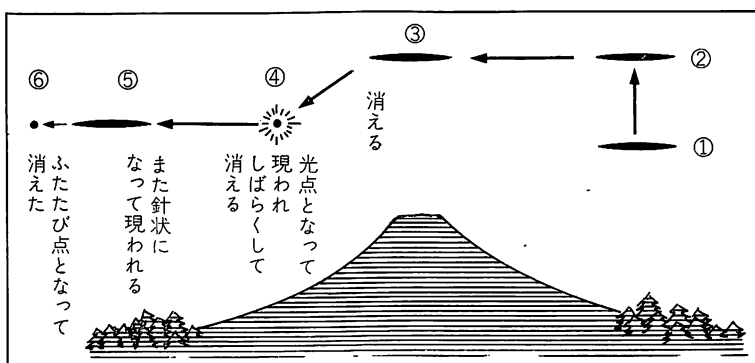
④快晴、雲量0

⑤約5分

⑥露木晴枝(19) 学習院大学1年

⑦肉眼

⑧⑨グランドハウイツ内の成増駅寄りの道路で、この日夕焼けにうつる富士山



を大きく正面に見ながら車でゆっくり走っていたところ、夕焼け空の仰角30°ほどのところに①のように白銀色に輝やくすじ状の物体を発見した。助手席の露木さんが雲にしてはおかしいから

UFOではないかと尋ねたが、私は気にもとめず飛行機雲か何かだろうと思っていました。方向転換をして富士山を背に走ったが、その間、露木さんがずっと後を観察し続けていた。車が前進するスピードを考慮しても確かに物体が垂直に上昇したというので、横道に入り、富士山と平行の位置で車を止めて2人で観察した。飛行機雲にしては形がうすすぎ、針のように鋭く、はっきりわかるスピードで南西に進んでいるので不信に思っ見てつづけた。

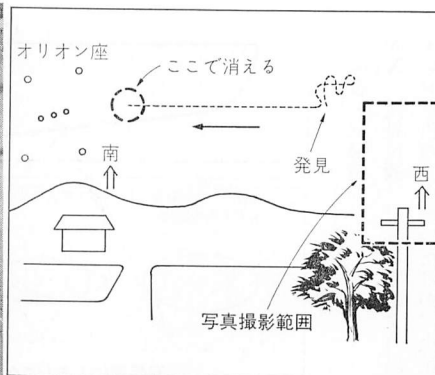
物体は④〜⑥と変化しながら消え、赤く染っていたので物体が光っているのがはっきりわかりました。あれが空飛ぶ円盤だとは思いませんが、実際にあのように雲が特殊な状況下では光って移動しうるといふ何らかの気象現象の一部であるとは思えませんので、未確認飛行物体(UFO)としてお知らせいたします。なおこの日、偶然にもコホーテク彗星がちょうど②あたりの位置に見えたそうですが、時間的には2時間ほど食い違いますし、光度からいっても物体は夕焼けを背に輝やくほどですので、まったく無関係だと思えます。物体は実際に富士山近くにあるのではなく、私達との中間点に浮んでいたようです。

(〒176 練馬区旭町二―四二―一二)

* * *



カメラ ミノルタSR・フィルム トライX
レンズ 50mm F1,4・絞り F2,8・露出約40秒



- ① 清水一郎 (18) 高2
- ② 一九七四年一月二十七日(日)午後6時50分
- ③ 岡山県笠岡市西大島五七一一二
- ④ 晴、月が西の低い位置にある。

- ⑤ 約1分
- ⑥ なし
- ⑦ 肉眼、ミノルタSR
- ⑧ 大きさは星ぐらい、白色、光度は変化し最高で1等星ぐらいであった。
- ⑨ 仰角約35°、発見したときは上下左右に動いていたが後に東へ向って直線飛行をした。物体は1秒間に4〜5回点滅していて、最初は1等星ぐらいの明るさであったが南へ行くにしたがいだいに光度はおちて、ほぼ真南の上空で消えた。なおカメラは目撃地点より右方向へ向けていたので、写っている物体は目撃前のものと思う。

(〒714 笠岡市西大島五七一一二)
* * *

戦場に出現したUFO

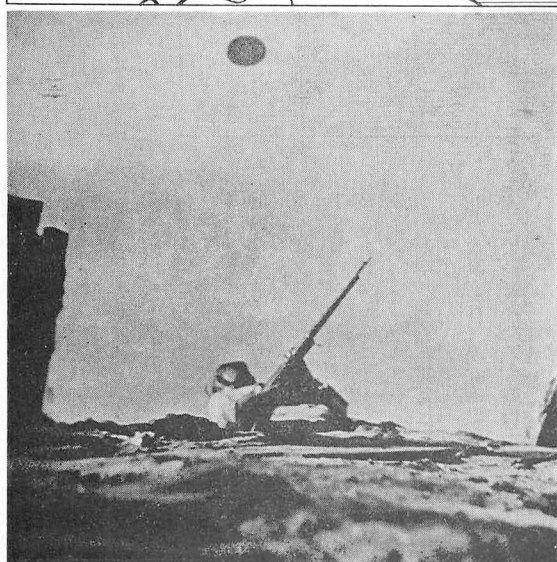
青木敏明

●32年前の中国で!

この写真は私の父が中国との戦争中、昭和17年(一九四二年)12月20日頃に中国の河北省藁城下営、または馬相營附近において、父が崖の下から戦友に写してもらった写真です。

写真にも見られるように上空に何か黒い物体が写っており、父はこの黒い物体が「太陽だろう」といっていましたが、太陽が黒く写るはずがないし、父の影により太陽の位置とは別方向にあるのがわかると思います。

当時飛行機と気球は飛んでいなかったことは父が証言しているし、ある



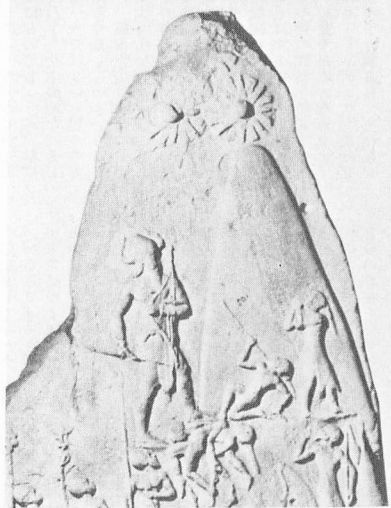
いは写真のシミとも考えられるがその点についてとにかく鑑定してもらいたいと思います。何分にも古い写真なのでネガがなく、またトリック写真とも考えられるが、しかし円盤さわぎの発端ともなったケネス・アーノルドが発見した「フライング・ソーサー」は一九四七年6月18日であり、それよりも5年も前であることに注目して下さい。現在父は54才、当時23才でした。

編者注 使用カメラ、ネガなどを調査できませんので、この写真が空飛ぶ円盤であると断定しませんが写真のシミではないようです。

(〒343 埼玉県越谷市南越谷二一六一)

読者の声

OPINIONS



●ナラムシンの戦勝碑

上部に光体らしい物体が3個認められる。
スーサ出土。前2300年頃のもの。

現在の地球における戦争やそれに伴う国家間の分裂、それらは人間相互に利己主義、猜疑心、憎悪、怨念を生えつけこれらの念が病氣や不幸を誘発するのは宗教のおしえるところですが、人間として最も大切な愛情、謙虚さ、尊敬、ゆずり合いの精神が今日の世の中で失われているのは残念です。

その点ではアダムスキーと会った宇宙人は、永遠の愛と美と生命力、そして自由、平等に満ちあふれたすばらしい存在であると思います。そのために宇宙人たちは自分たちの宇宙船を駆使して地球人の誤った考えを正しに、また、まちがった方向に進んでいる科学を正しい方向に、地球の破壊を導かないようやってくれています。現に宇宙人たちは地球にいくつかの基地を設け、地球人に混じって平和を確立するために活動しているようです。

それからもう一つ、これは身勝手な説ですが清家新一氏の「宇宙の四次元世界」においては火星と木星との間に小惑星があるのは御存知と思いますが、これは昔高度の文明星（ルシファーと呼ぶ）であったが三重水素の対消滅に伴う実験により、星ごと爆発したとあるが、原子爆弾でさえ質量の千分の一がエネルギーに変換されるだけに、対消滅に伴う爆発は質量のほとんどがエネルギーに変換されるのであるから、その恐ろしさがうかがえる。地球もこのままではいけないルシファーの二の舞いを踏まないと限りません。このルシファーの爆発により火星の軌道が大きくはずれそうになり、火星人たちはフォボスとダイモスの2衛星を打ち上げたといえます。この裏付けの証拠として私はコズモ11・12月号52頁の「宇宙人の遺伝子」の記事があり、イン石から地球には存在しない遺伝子が見つかったといえます。このイン石は小惑星から飛来して来ている

と思われすから、爆発が起こったさいに高等動物が何らかの原因でイン石中に閉じこめられたのではないかと推測します。

UF0の真理の追求のためにも「コズモ」のこれからの発展と活躍を祈っております。

青木敏明(25)

(千33) 埼玉県越谷市南越谷一六一一九

UF0の古い記録

今より三〇八年前の上野国沼田にUF0の目撃があったとの記録がある。寛文六年(一六六六年)の或日、沼田城の隅の方赤城山の上に光る物体が天に現われ、乾の方三峯山辺に至って停留した。しばらくするとまた、西の方吾妻耶山の方向に飛行した。その光は火の玉のようであって、大きさは一丈程に見え爆音が地を動かす程であったから人々は大いに驚き、城主真田信直もこれを聞き早速神人や巫女に神託を伺わしめた。神人巫女の祈りが終ると八束照明神が現われ、神託を巫女に言わしめ宮の造営と三神権現の尊号を奉ることになったのである。

八束照明神は三峯山系石尊山の洞窟にあって、此処には三体の人骨や脛骨の長さ80cmに及ぶ、これも此世のものと思われぬが、里人はこれを神に祀っている。今この遺骨は保存されているが身長3m程はあるだろうと思われる巨人のものである。

小野 勝

(千30) 13 群馬県利根郡月夜野町石倉一三三二

「暗い夜空に一人叫んでみては愛はひきまかれて形もないさ!」という歌詞があります。今のぼくの心境もこれと似ている。中3の受験勉強に疑問を感じ、宇宙に想いをはせている。いつも一人、夜にな

ると満天の星空を見あげてあの星へ行きたい、いやああの星のほうがいいなどと考えているばかりです。星の光りほど魅力的な星はありません。はなばなしい輝きもなければ、目を見はるような美しさもない。広大な真暗い夜空に点々ともらばる星よ! おまえはその美しさを殺したその青白い光は、何百年いや何万年、何億年光り続けているのか! 暗いうつろな空間に自分の存在をはにかみながらも教えてくれる星よ、おまえは何物より美しい。いつか行くぞ! おまえのところに待っていてくれ、人類が下等なロケットを飛ばすのをやめたころ、ぼくの作った円盤でおまえのところにたずねて行くよ。夜空よ! その日まで輝きつづけておくれ!

匿名氏

拝啓コズモ殿、いつも楽しく読ませていただいております。(これから編纂なさっている方々、この世からいなくなりますが、私はSF好きがいの女の子です。そのためか学校でUF0のことを友人に話しても、誰も話したのってくれませんでした。「また、SF好きがいが始まったか!」などといううなずきで私を見つめているだけです。ですが私はそれにも耐え、絶対UF0の存在を信じます! この広い宇宙にこれほど発達した文明があってもいいではありませんか! ですが悲しいかな、我が目でUF0を見たいことはないので、ヨロヨロ……。毎晩、寝る前に寒いのをガマンして窓からUF0がこないかと空を見つめています。

家庭で朝礼をするとき、校長の話を見無視し、校長の行き帰りをみながらトボトボと歩いています。そのために我が人生一八年、UF0にこれほどあこがれているのににもかかわらず、お目にかかったことがないので、どなたかUF0の見つけ方、呼び出し方、よく出現する場所を教えてください。それからぜひ、コズモで「イエス・キリストは宇宙人であった」という説を面白く載せて下さい。私の学校はカトリック系の学園で、マ・スール(ミスター)のことがとかく宗教をおしつけぎみです。キリスト、神を不定しているわけではなく、むしろ肯定している私ですがこうおしつけられてはかたがたありません。宗教の時間にマ・スールに「キリストは宇宙人であった」という説をもちだしてこまらせたことがありません。ですが「キリストは復活した。これがあなたよりもキリストが神の子である証拠」とやら、ギャフン。この説をぜひともうちやぶるようなものを教えてください。(キリストを侮蔑する気はもうとなく、ですから信者の方々あしからず)。エー! それからUF0に興味のある方々で(コズモを買

くらいだから興味を皆様おもちと思いますが)SFに興味のある方、こんなバカな女の子でもよかったら文通をして下さい。これからのコズモの繁栄を祈りつつ、(ついでにコズモの値段が上がるよう)つたなき筆をおきます。

中田敦子

(千30) 神奈川県茅ヶ崎市浜須賀一六三八

早いもので、もう4号も発行されました。すべてを買った読者としていくつか述べたいと思います。

特に「神々の戦争」はすばらしく、内容も丁度良い。また「日本古来の天竺人出現説」もこれらが楽しみです。「二人の科学者の論争」の反対論も興味深く読みました。「科学トビックス」も意表をうけています。これから掲載してもらいたい記事は「円盤の歴史」「読者の論文」「海外UF0事情ニュース」などです。私は貴誌が同人誌に終わらず、同人誌以上に発展されることをせつに希望します。

日置賢悟(24) 会社員

(千30) 東京都渋谷区南平台町一五一五

No.4号の信田裕さんの意見にひとこと。

①②③の意見は私も賛成です。③については私良く知っていますが、④の意見については少しひっかかりました。夕暮れ時、まっすぐの軌道で飛んでいる光る物体があなたたは人工衛星の見まがえではないか、といっています。UF0の意味をもういちどよく考えてみて下さい。UF0とは一般に未確認飛行物体、または謎の飛行物体などといわれています。円盤だけがUF0ではないのです。もし見たものがたとえ人工衛星だとしても、その目撃した人が何かわからなければこれはもう未確認飛行物体とか謎の飛行物体といっているのです。

それから年齢も併せてくださいとありますが、それには年齢が若ければおそくそれから人工衛星を見まがえたとは思っていないのですか?

私の意見に反対の人、賛成の人と意見をお願いします。

上村佑史(15)

(千30) 山口県萩市土原一七七八

「コズモ」を創刊号より愛読しておりますが、4号の「二人の科学者の論争」等のように1号ごとに内容が充実してくるようで非常にうれしく思っています。また2号3号における国内UF0目撃報告には少々不満をもっていました。4号においては詳しくていいいになったかと思えます。少々不満と

いますのは、1/2秒という短い時間のものが多いということです。1/2秒間の目撃において流星、その他とUFOとを正確に区別することは無理ではないでしょう。もちろん目撃時間が短くとも何か決定的な条件からUFOと判断できる場合はあるでしょうが、普通は少なくとも10/15秒以上は必要なのではないでしょうか。私は次のような失敗をしたことがあります。

通学途中、空を南から北へ移動する葉巻型の銀色に輝く物体を見つけた。所々にある積雲から高度は5000mと判断した。飛行機だろうと思い翼をさがしたが、低気圧下から見ているにもかかわらず葉巻型に見えるのです。(私の視力は両方とも1.5です) しかも無音でした。この物体が北の山にくだるまでの約2分間見ていたわけがUFOかどうか迷いましたが、軌跡が直線であることが気になり「飛行機ならばまた同じコースを通るだろう」ということで、次の日からは小型双眼鏡を持って通学するようにしました。5日後、同時刻、快晴であるはずは前とまったく同じ条件でこの物体を見ました。肉眼ですと翼は見えないのですが双眼鏡で見るとやはり飛行機でした。それ以後、同コースを飛行するのを何回も見えています。

このようなことからUFOに興味を持っている人は、報告や観察に関して一般のUFOにあまり関心を持っていない人々以上に、慎重で正確でなければならないと思います。

大泉喜賢 (18)
(千歳) 岩手県釜石市小川町五一―一六七

2月号(No.4)の原田・橋本両先生のご意見は大変有意義でした。しかし私は原田先生の意見には賛成できません。UFOを否定する人々、特に科学者のはほとんどはUFOに対して「バカバカしい」という考え方をしているのではないのでしょうか。私は彼らが科学者である限りそのような主観的な、そして非論理的な考え方をすべきではないと思うのです。否定するのであれば100%存在しないということを確認しなければならぬ。橋本先生は10%とせよその可能性に目をつむってはいかないということと述べられています。私はこの考え方は、特にこの種の問題を論ずる場合に重要であると思います。

コンドン調査団はUFOは100%ないということを確認していませんし、写真がインチキだからUFOは存在しない、では、論理が飛躍しすぎます。またアメリカ空軍のいうことはすべて正しいとは限らないのだから科学者がこの種の問題を研究するときは、常に客観的な態度が必要であると考えます。そういう点からみて私はE・F・デニケン氏は立派だと思えます。彼は自分の手で調査し、それらを

模範として考えを述べています。私は彼の著書「未来の記憶」と「星の帰還」を読みました。それらが非常に説得力があったのは、延べ10万回にもおよぶ彼の調査旅行の裏づけがあったからだと思えます。デニケン氏は科学者ではなく、ホテルの経営者だそうですが、しかし彼の態度はそこのへんの本物の科学者よりもっとと科学者らしいではありませんか。

浜口勝則 (18)
(千歳) 三重県志摩郡志摩町布施田七四七

ほんとにコスモが出版されてとてもうれしく思っています。前からこんなUFOや宇宙のことについての本、もしくは雑誌がほしいと願っていたのです。それで書店に行ったらそのようなものを探していませんでした。でもなかったのです。だからほんとにうれしくて……。

内容については特に「神々の戦争」がおもしろいですね。ついでに興味のあることが書かれているからです。えーと、それからちょっといいことがあつたのです。「ウッドストックUFO祭典」はNo.2からNo.3にかけて載せてありましたが、この載せ方はあまりよくないのでは。だって、No.2では本文が書いてあり、その注釈をNo.3とNo.4にわけたなんて、ちょっと読みづらいなあと感じたのです。

それからNo.4のついていた「アルゼンチンの驚くべき瞬間遠隔移動」のような奇聞的なことも、もう少しのせめてもらえないでしょうか。アメリカの近くに船や飛行機が消えちゃうという「魔の三角地帯(?)」なんていうところがあると何かに書いてありました。そこは4次元の入口になっているのでは!? ととても興味があるのです。

私はUFO等について興味のあるような人と前々から文通してみたくたんです。どこかの県の方でもいかにコスモを通して紹介下さい。私は只今、16才で高校1年生です。

田中 都子
(千歳) 北九州市八幡区下土津役筒井団地四―一

私はUFO、心霊等に興味を持ち友人数名と研究をしている者ですが、地方のため資料が入手しにくく残念に思っていたところ、貴社よりこのような雑誌が出たのでたいへん喜んでおります。これからどうしよう内容の充実したUFO専門誌になることを期待いたします。

ところで、最近日本においてUFOの出現がふえたようですが、まだまだ一般人の関心は薄いようです。当地でUFOの目撃が少ないのもこれに原因のひとつがあるようです。そのために、私達UFOの存在を信ずる者の積極的な活動が必要だと思

いますが、UFOの研究にコリすぎ学校の勉強、仕事等がおろそかにならぬようお互い気をつけましょう。

徳広 朗
(千歳) 高知県安芸市市町二一〇―一

私は自分の目でUFOを確認したことはありませんが、テレビ番組や関係書でそのありさまを知らされてから、「これはタダ事ではないぞ」と深刻に考え込むようになりました。そして本を読めば読むほど、考えれば考えるほど、その問題の果てしない広がりや怪奇さにぼろぼろとしてしまうのです。

ともかく、確実に明らかにすることは現代の地球上の文明を遙かに超えた未知の世界から、そのUFOと呼ぶべきものが私たちの地球の各地に訪れているというところ、これが動かしがたい事実です。それが、いったい何であり、最終的にいかなる目的を有しているのか、これこそ問題の核心です。これはとどのつまり、人類の将来に決定的な意味を与えるといつても決して過言とは思いません。あるいは逆にわれわれ人類の過去をさえ明らかにしなれません。そして現代のわれわれの科学といわれるものが、あのUFOの超科学的産物にくらべればまだまだ子供供だましのレベルでしかないことに、底知れないおそれを感じます。

私はこのコスモ誌で知り合いになれる方と、今後UFOの問題について広く深くお互いの考えを交換し合いたいと願っています。なんなん興味本位でなくて、UFOのめたらす深い意味について考えようとしてくれる方、お便りくださいませんか。

阿部 人士 (24)
(千歳) 神奈川県大和市上草柳一五五六一二三

宇宙人の存在は今や誰にも否定できない。否定する人々は無知であろう。しかし肯定するにしても決定的合理的な証拠がいまだ発見されていない。万人が認める円盤の構造理論が確立し、実際に人間が円盤を造るとまで我々地球人は不十分な自己体験と知識を武器におろかぬ論争を繰り返すことになる。円盤信奉者は現代の科学者を批判したり、他人にそれを押しつけようとするやっつきになるし、否定論者もまた、まっとうな感情的に反論する。このようなくだらぬい論争は神が存在するか否かを論ずるがごとく、しよせん結論人間間人々の認識のちがいがであって、科学的にはまったく意味のないものである。

現代最先端の物理学は「重力」を究明しようとしている。ニュートン以来の人間の科学文明はいよいよその本質にせまえた。重力とは何か、なぜ存在するのか。これこそ円盤構造を確立するカギでもあるし、また宇宙を解くカギでもあるのだ。しかし、

これは天才的な科学者の出現を待たなければならない。我々凡人は今から精神的に準備する以外に道はない。その意味で過去のデータ、遺跡等を研究するのと比べると、万一年宙人と会見する場合に適切な行動がとれるように日ごろから心がけようではないか。

G・アダムスキーがおこなったことを基礎にして、私たちがもし宇宙人と会見するとき何をどうにか話し、何を聞きだすべきかという、いうならば宇宙人会見学を統一的な学問として研究したらどうだろう。この研究が確立し、何百万何千万の人々がそれを身につければ円盤体験がふえ、円盤の究明につながることになる。科学者の地球人の科学的理論と宇宙人会見から得た体験的理論において、どちらが先に円盤問題を解決するかはまことに興味深いことであらう。

清水亮三 (20) 早大理工一年
(千歳) 東京都中野区若宮三八―一九

はじめまして、僕はある中学の男子の子です。このたびは「コスモ」などという僕にはもったいないくらい立派な本を出版して下さってありがたうございます。今ではこのすばらしい「コスモ」がもう4冊もたまり、早く次の号が出ることを楽しみに待っています。

僕は学校にこの「コスモ」をもって行き、休み時間に見ています。するとなぜか、授業中もきこえずに勉強そっちのけで「コスモ」に集中してしまうのです。「コスモ」を読む心が広くなり、自分が人より偉くなったような気になるのです。これから「コスモ」の発刊をふやしていただきたいと思います。次第であります。

ところで話は変わりますが、「コスモ」特製のバイナダーをついて別売していただけないでしょうか。僕だけでなく創刊号から「コスモ」を読んでいる人もそれを望んでいるのではないのでしょうか。僕は今、「コスモ」を袋に入れて大切に保存してありますが、それではどうも書類と間違えてしまうので。だから、この「コスモ」特製バイナダーを別売していただくとお願いしたいと思えます。たとえばそのバイナダーが10冊くらいはさめないで3000円したとしても、きっと僕は買うと思うので。お願いします。頼みます。」「コスモ」特製バイナダーがどうして欲しいのです。なぜならば、「コスモ」のファンだからです。勝手なことを書いてすみませんでした。

服部秀人 (13) 中2
(千歳) 東京都杉並区成田東三一―一三二

UFO専門誌「コスモ」の発刊をお祝い申し上げます。創刊号から興味深く拝見しています。

『コズモ』2号の「神々の戦争(2)古代スメル人の驚くべき天文学」の中で、「クムンジクの高に195,965,200,000」という計算の跡が……」の数字が何ん

となく気掛りで、この数は何を意味するか計算を重ねる内に次のような一つの糸口を見い出しました。この数「965……」を1日24時間を「秒」に換算した「965,400」で割ると「2,268,000,000(日)」となり、この値は「965(日)」では割り切れませんが「コズモ」創刊号72ページ「2万7千年前の記録」中の「過去の一時間において1年間を288日とした」にヒントを得て「968」で割ると「7,875,000(年)」という値が出ますが、これ以上の計算をし

る論理的？ 根拠もなく結論に達していません。しかし、計算の答えが割り切れることから「何らかの天文学的所要時間を意味するのではないか」という仮説が成り立つわけで、これを数千年前にスメル人の国を訪れたのではないかとと思われる宇宙人が、地球に到達する迄に要した地球時間、あるいは未来を予知する能力を有する宇宙人がスメル人に對して未来のある重要な時点を予告したのかも知れないと考えるのも面白く、いずれにせよ今を去る2千年前のスメル人の天文学の発達には、驚異的であつたと思われ

ます。

阿部 進

(千64) 兵庫県伊丹市東野七(一四)

私は絶対にありえないとい切れることでも、無限分の一の確率で必ずありうると信じています。だから見たこともない空飛ぶ円盤の存在を信じているのです。それにしてもかわいこのワタシがモテないはずがないのは、なぜかモテないのも無限分の一の確率で起きた不思議な事実なのです。

でも、無限分の一の確率で必ずありうることも、無限分の一の確率でありえないことがあるかもしれな

いとしたら、円盤は存在しないといえるかもしれませぬ。

それでも私は円盤の存在を信じているのです。

匿名者

「コズモ」をいつも興味深く読んでいます。今までのコズモは全部買いました。一番よかったのは2月号だと思えます。「コズモ」ってだんだんよくなるんだなあと思ひました。

私は酒田に酒田超自然現象研究会というのがありますがその会の会員になっております。研究をやっている上であつております。私はまだ18才ですがいつか酒田に「喫茶UFO」というのを作って、そこに酒田にいるUFOに興味をもっている人の集会所みたいなのができたらなあ、心から思っています。「コズモ」は素晴らしい本です。これからものがん

ばって下さい。

今野 誠

(千64) 山形県酒田市大字鶴田前田(一三)

神と人間

人類は何万年も昔から神を崇めてきました。しかし、今では父(神)に逆らい、人間の誤った心が作りだした創造物を崇めています。聖書中にもありますが、父は私たちにそのよう人間を崇めなさいとは言っていない。それは、なぜ人間はそうするのでしょうか。それは心が弱いからです。つまり恐怖に心が支配されてい

るからです。心は知識と信念の欠乏によってひき起こされる恐怖を通じて働いてい

るので、自分の知っている知識以外のことを聞くこと、恐

れなくするのです。そのため、何か物質的な物を握っておきたいのです。しかし、神は私たち自身の中にある至上なる英知、意識なのです。

イエスも「あなたがたは、生ける神の宮だ」といっています。つまり、私たちは生ける意識の具体化したものだということです。それは生命の呼吸によって証拠づけられています。

人類は英知に気付かない限りいつかは滅ぶでしょう。しかし、結果(現象)の奥にある原因(英知)が分るようになれば破滅を免れるでしょう。現在、人間は表面的にしか万物を見ていません。真実を知るためには意識で万物を見なければなりません。そのためには心をともかく開いて意識と一体化させるのです。

人間は何千年も同じ誤りを繰り返してきました。神の創造物の中で最高の人間ならば、過去の経験から新しいことを学ぶべきなのです。もう少し神と人間の関連性を考えて、心の誤りを悟ってほしいと思います。

林 靖英

(千64) 鹿児島市原良町(一三〇四二)

したが、D・フレイの話を私の考えを大きく前進させてくれました。今後、機会があればD・フレイの話の続きをぜひ掲載して下さい。宇宙人はフレイにまた会うとのことですが、そのときフレイに教えた色んなことをぜひ知りたいのです。できれば、フレイの著書があれば教えてください。

目撃報告があれば教えてください。

ですが、私の友達の目撃をいくつかレポートしてみましたが、その友達は大部分、UFOに関心がなくて、そこで貴重な目撃を聞かれないのと同じで、私が代りに報告することになります。そのレポートは細く整理して後日送ることにします。

これからのどの私達に興味のあるすばらしい情報を提供して下さい。またそうなるようがんばって下さい。

中山陽一(17)

(千64) 高知県高知市横浜(八五)

僕たち人類の未来をすでに実現した他の人類が、この広大な宇宙にいくつが存在するでしょう。だから僕は、円盤は人類の未来の姿だと考えます。

梅村清貴

(千64) 名古屋市中北区桶町味崎(中田四八)

「真実は悲しきかな、それはいつも反逆視せらるる」こんな言葉があった。今日の私は、それをひとりつぶやきながら物思いにふけっています。

誰かがいって、「宇宙? そんなものに興味をもたなくても、わからなくても生きてゆけるさ」。勿論そのとおり。でも、私達も宇宙に存在しているんだもの宇宙について少しは関心をもつていいと思

う。そうすることは結局、自分自身について知ることでもあると思う。一般の人々にはあまりにバカバカしく思われるようなことも世の中には存在する。そして、それがあ

るいは宇宙の真理かもしれない。

今井福子(19)

(千64) 長野県長野市北堀六八(一三)

★譲ります

コズモ2号、5号、各300円(送料当方負担)

尾沢隆夫(千64) 東京都調布市築地三(一、多摩川)

コズモ2号、5号、各200円(送料別)

五十嵐法人(千64) 神奈川県横浜市磯子区汐見台

三三〇三(一三四)

★譲って下さい

コズモ2号、5号、各200円(送料別)

五十嵐法人(千64) 神奈川県横浜市磯子区汐見台

三三〇三(一三四)

コズモ創刊号を通過して譲って下さい。

片桐 元(千64) 大阪府堺市金岡町(二四七三三八)

相川弘満(千64) 秋田県平鹿郡大森町坂井田字西

渡辺藤一(千64) 愛知県海部郡美和町木田小島

花見正二(千64) 長野県小県郡青木村天神(一六二五)

創刊号を700円でお譲り下さい。

山岸宏明 高1(千64) 埼玉県所沢市緑町四二二

公住(四四一六号)

値段は1000円前後で、UFOまじりの僕に

コズモ創刊号を!!

榎本 浩(千64) 東京都足立区保木間町四五七

どんなか是非、創刊号を譲って下さい。価格は相談のうへ、たっぷりさせていただきます。

田中秀樹 大学生(千64) 東京都清瀬市松山(一四〇一七若喜荘内)

できれば500円以内で、創刊号をもっている方譲って下さい。

上野重則 高2(千64) 和歌山県西牟婁郡すさみ町本城四〇(二五)

コズモNo1をぜひぜひほしいんですが、定価はいくらでもかまいません。ぜひぜひ売って下さい。コズモのNo1をほんとにぜひ売って下さい。

小田嶋源壽(千64) 岩手県石巻市南寺林(二一〇九)

UFOに非常に興味をもっているこのコズモファンのために、創刊号をどうか1000円〜1500円でお譲り下さい。

奥 民雄(千64) 神奈川県横浜市六五(一一二)

創刊号をぜひ入手したいので、800円くらいの値段でゆずって下さい。

古藤浩美 中1(千64) 島根県松江市大海崎町一四

七

僕は「コズモ」の愛読者ですが、創刊号だけがありません。ぜひ、手に入れたのでご連絡下さい。なお、値段は、500〜1000円くらいでお願いします。連絡するときに希望の値段を書き添えて下さい。

神山和幸 中2(千64) 栃木県宇都宮市駒形町字狭

又一五〇八一四二西の宮田地

☆本誌バックナンバー(旧号)

下記の号が、本社に少しあります。
ご希望の方は早目に本社へ直接ご
注文下さい。(No.1とNo.2は品切れ)
No.3 ￥300 No.4とNo.5 ￥330
送料 1冊￥85 2冊￥145 3～4冊￥250

No.3 (1973年11-12月号)

No.4 (1974年 2月号)

No.5 (1974年 4月号)

目撃者の証言「パプア島の円盤騒動」	6
円盤の中に連れこまれた男 1	22
1968年のウボストックUFO怪典(2)	30
東京大地震は発生するか	32
埼玉県羽生市の奇妙な物体	17
エビキエルは何を見たか	48
科学トビックス	50
神々の戦車 3	53
山形県の火の玉写真	75
私が見たUFO目撃報告	76
読者の声	82

目撃者の証言「パプア島の円盤騒動」	6
円盤の中に連れこまれた男 1	22
1968年のウボストックUFO怪典(2)	30
東京大地震は発生するか	32
埼玉県羽生市の奇妙な物体	17
エビキエルは何を見たか	48
科学トビックス	50
神々の戦車 3	53
山形県の火の玉写真	75
私が見たUFO目撃報告	76
読者の声	82

目撃者の証言「パプア島の円盤騒動」	6
円盤の中に連れこまれた男 1	22
1968年のウボストックUFO怪典(2)	30
東京大地震は発生するか	32
埼玉県羽生市の奇妙な物体	17
エビキエルは何を見たか	48
科学トビックス	50
神々の戦車 3	53
山形県の火の玉写真	75
私が見たUFO目撃報告	76
読者の声	82

●UFO目撃報告と写真を募集
UFO(未確認飛行物体)の目撃報告と写真を募集します。左に掲げた各項目を参考に、なるべく正確な詳細な報告をお送り下さい。掲載された分には薄謝を呈します。写真の場合はできればネガもいっしょにお送り下さい。ただし本誌に掲載後に偽作であることが判明してトラブルが生じた場合、本誌は一切の責任を負いませんので、その点をあらかじめご了承下さい。その他、各種新聞雑誌などに掲載されたUFO関係の記事・写真類の切抜きも歓迎します。

●UFO目撃報告用参考事項
(1)目撃者住所氏名(できれば本人の写真も添える)、年齢、職業(学生の方は学校名・学年)、電話番号(匿名を希望の場合は本名明記の上、その旨を付記すること) 同時目撃者の有無、その他。
(2)目撃場所地名、付近略図、時刻、天候、目撃継続時間、その他。
(3)物体飛行物体の形(スケッチを添えること)、大きさ、色、その他。
(4)飛行状態(仰角、方向、飛行中の形態の変化、飛行中の色の変化、飛行中の光度の変化、推定速度及び高度、その他)。
(5)観測機器使用の場合はその機器名、性能その他を付記する。
(6)撮影用具(カメラを使用の場合はカメラ名、使用フィルム、レンズ名、絞り、シャッタースピードその他のデータ)を付記する。
送り先 東京都台東区秋葉原三の三、アキバビル
コスモ出版社UFO資料調査部

●目撃報告とは別に、「読者の声」欄を設けています。本誌に対する感想、UFO問題に関する所感等をふるってご投稿下さい。宛先は「コスモ出版社、読者の声係」

◎大好評を博したデニケンの「神々の戦車」にかり今号から英国の円盤研究家レナード・クランプの「宇宙・引力・空飛ぶ円盤」が連載されます。これは謎とされてきた円盤の推進機関を解明したもので本邦初公開の記事です。ご期待下さい。

◎前号で募集した応募記事原稿をたくさんいただきましたが、スペースの関係上、今回は載せきれず、次号以下に回します。今後ますますの好記事原稿やUFO写真類をお待ちしています。

◎いまだに本誌創刊号と2号のご注文が多数ありますが、在庫は一切なく、再版の見込みもありませんので、ご了承下さい。

◎地球自転速度の急変(本号記事)世界的異常気象の発生等、変化の多いこの頃ですが、何が起ころうと、益々視野を拡大して宇宙的思想のもとに生き続けたいものです。(N)

UFOと宇宙 一九七四年六月号 (第六号)
編集発行人 久保田八郎
発行所 株式会社 コスモ出版社
〒110 東京都台東区秋葉原三の三 アキバビル
電話(二五五)八七八四、七〇一九
振替・東京119478
印刷所 大日本印刷株式会社
昭和四十九年六月一日発行
(隔月刊・奇数月二十日発売)
定価三三〇円・送料八五円
年々購読料・送料共二二〇〇円
(地方の書店で入手できない場合は本社へ直接ご注文下さい)
●本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます。
●海外の記事はすべて翻訳転載権取得済

スリービーチ望遠鏡

No.ST60B 屈折経緯台

D 60mm F 800mm
倍率 160×
100×
44×
上下微動装置

¥ 16,000
送料 ¥ 800

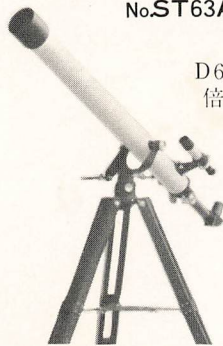


性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST63A 屈折経緯台

D 60mm F 1,000mm
倍率 125× 55×
上下微動装置

¥ 16,500
送料 ¥ 1,000



性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST65A 屈折経緯台

D 60mm F 1,000mm
倍率 125× 50×
上下微動装置
水平微動装置

¥ 23,000
送料 ¥ 1,000



性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST67B
屈折経緯台

D 60mm F 1,000mm
倍率 200× 125×
50×
上下微動装置
水平微動装置

¥ 27,000
送料 ¥ 1,000

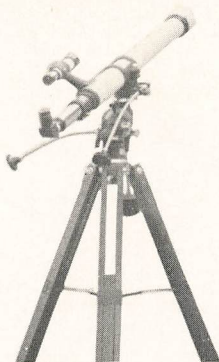


性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.SST600
屈折赤道儀

D 60mm F 950mm
倍率 158× 76×
43×
経緯微動装置
経緯目盛環

¥ 38,000
送料 ¥ 2,000



性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.SST80
屈折赤道儀

D 76mm F 1,250mm
倍率 310× 200×
100× 60×
経緯微動装置
経緯目盛環

¥ 57,000
送料 ¥ 2,000



性能 1.5秒・11.2等星・118倍

No.SR108B
反射経緯台

D 100mm F 800mm
倍率 160× 100×
44×
上下微動装置

¥ 19,800
送料 ¥ 1,000



性能 1.2秒・11.8等星・195倍

No.STR100A
反射経緯台

D 100mm F 900mm
倍率 180× 110×
45×
上下水平微動装置

¥ 26,000
送料 ¥ 1,000



性能 1.2秒・11.8等星・195倍

No.SS1000G
反射赤道儀

D 100mm F 1,000mm
倍率 200× 125×
55×
経緯微動装置
経緯目盛環

¥ 62,000
送料 ¥ 1,500

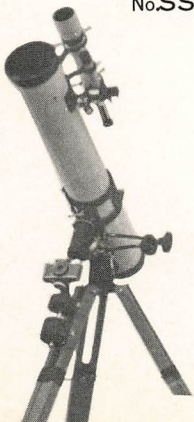


性能 1.2秒・11.8等星・204倍

No.SS1200G 反射赤道儀

D 100mm F 1,200mm
倍率 240× 96×
67×
経緯微動装置
経緯目盛環

¥ 62,000
送料 ¥ 1,500

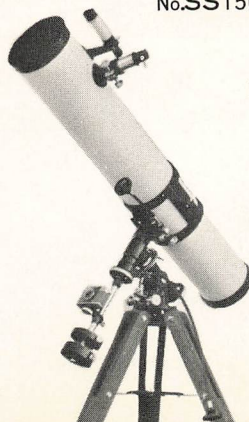


性能 1.2秒・11.8等星・204倍

No.SS150EA 反射赤道儀

D 150mm F 1,200mm
倍率 200× 100×
67× 48×
経軸微動装置
緯軸微動装置
上下桿微動装置
水平ネジ微動装置
経緯目盛環

¥ 120,000
送料 ¥ 4,000



性能 0.8秒・12.7等星・460倍

● 反射式は光軸修整
用アイピース付

くわしくは切手¥ 120
同封の上、総合

カタログ No. 10

申込み下さい。

〒121 東京都足立区
東島根町2392

K. K. スリービーチ

サービスセンター
KM 係



ヤマモト

サテライト天体望遠鏡

新発売

60mm 屈折径緯台

MODEL A-7

定 価 26,000円

荷造送料 1,500円



●光学的性能

有効径 60mm
焦点距離 700mm
集光力 73倍
分離能 2.0秒
極限等級 10.7等

●付属品

接眼鏡 (倍率)
SR-5mm 140倍 (280倍)
R-20mm 35倍 (70倍)
〔 ()内はバーローレンズ使用〕
2倍バーローレンズ
5倍ファインダー
天頂プリズム
地上用正立プリズム
サンガラス

●格納箱

発泡スチロール入り木箱

ヤマモトの天体望遠鏡は海外で絶賛を博しております。

メーカーからユーザーへ！

通信販売のお知らせ！

●上記の他各種あります。詳しくは115円切手同封の上カタログをC係へ御請求下さい。

株式
会社

山本製作所

東京都板橋区大原町 5-3
電話 966-2408 郵便番号 174